

人助けしたらホロライブスタッフになりました

やまりゅー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

とある日を境に人生が変わる!?

そんなストーリーらしい??

## 人物紹介

久崎        紅蘭

クザキ        クラン

モデル顔負けのスタイル

ホロライブの配信をよくみる

とあるホロメンを助けて人生変わる??

とあるホロメンと知り合い??

はじめまして!  
やまりゅーです!!

初投稿であります!!

勢いで描いたので止まるかも??

クロスオーバーはもしかしてかもです

希望により恋愛やら日常やら描きます

もしかしたらハーレムになるかもしれん

けど期待に応えられるかはわかりません

それでもよいかたお願いします!!

# 目次

## 番外編

番外編

1

番外編② (リクエスト)

7

番外編③

15

番外編④

24

番外編⑤

31

番外編⑥

39

番外編⑦

49

番外編⑧

59

番外編⑨

68

## 本編

人助けしたらホロライブスタッフになりました

75

ホロメンと顔合わせ

80

ホロメンと顔合わせ②

87

すいちゃんと付き合う??

93

フブキングに挑め!!

100

ホロメンの自宅にお邪魔する!  
!?!?

107

至福とはこれ

113

ここどこ???

119

遭難しました

126

何故、手料理を振る舞うことになった

133

意外な一面

141

部屋を掃除するドン!!

148

家バレてるんだけど

156

特例のマネージャー	163
いつもと違う	173
配信参加！&思いを届け！	181
すいちちゃんと配信しちゃう!?!?	191
お料理コーナー	202
晩酌配信	211
遂に俺の家に。。。	219
悪魔的な事	227
これぞずのー!!	236
ケモ耳集合!?!?	244
久々にのんびりと。。	253
ぽ、ぽえぽえく	260
取り残されたのは	267
闇のゲーム( )	274
禁断のお泊まり	284
あの計画を阻止せよ!!	292
すいちちゃんは色々話したい	299
修羅場を乗り越えろ!!	308
いつちよあがり!!	318
おかころと飲んでみよう	325
バレンタインデーらしい	336
バレンタインデーらしい②	349
バレンタインデーらしい③	364
オフ会に参加…だと…!?	375
謎のお届けもの	385

ここはどこ?? | 394  
魔法少女の相談所 | 405  
理性に打ち勝て!! | 412  
エイプリルフル、そうだ嘘ついてみよう!! | 421  
酸っぱいのはいかが? | 429  
おぶればいいじゃん | 437  
なーんだまたこのパターンか | 444  
シヨタしか勝たん!! | 457  
お着替えタイム | 466  
Let's training | 473  
おや?? 喧嘩ですか?? | 481  
エリートorポンコツエリート | 490  
わがはい? ワガハイ? 吾輩!! | 496  
噂の同居人 | 504  
鍵と財布は何処へ | 511  
今日は晴れのち拳が降るでしょう | 516  
目覚めたらあるある現象 | 521  
海だー!!! いや目的とちやうやん | 527  
目指せ釣りマスター!! | 533  
広い海を超えてきた!? | 538

番外編  
番外編

おかゆ

「どうして僕がいるのに……他の子の話するの？」

俺は今大変危険な状況です

遡る事数時間前

ころね

「えー!!…おがゆ今日いないの!？」

紅蘭

「はい…どうやら体調崩したみたいで」

フブキ 「うーん…それは仕方ないですな」

ミオ 「そうだね…ゲームーズ&紅蘭君の配信はまた今度によっか」

ころね 「おがゆ大丈夫かな…」

ころねさんの耳と尻尾がたれてる

落ち込んでるのがとてもわかるな

フブキ 「お見舞いに行きたいけど…白上厳しいですよ」

ミオ 「その…ごめんウチも…」

紅蘭 「それなら俺がお見舞いに行きましょうか？」

この後予定はないし適任かもな

ころね 「こおねもいくー！」

フブキ 「ころねは悪化させそうだから紅蘭君に任せることだよ」

と、結局お見舞いをしにおかゆさんの家に到着



おかゆ 「あ、あれ……紅蘭君じゃん……お見舞いに来てくれたんだ」

紅蘭 「おかゆさん……って……何出掛けてるんですか……」

おかゆ 「お腹空いててね……上がってく……」

そして部屋に上がらせて貰い

押し倒されました

紅蘭 「え、えつと……おかゆ……さん？」

おかゆ 「……つたんだ……」

紅蘭 「……？」

おかゆ 「僕……寂しかったんだよ……紅蘭君と会えなかったから」

紅蘭 「し、仕事ですからそこは仕方ないですし……」

おかゆ 「ねえ……今から僕といてくれる？」

断つたら大変なことになりそうだし……受けるしかないよな……

紅蘭 「いいですよ……おかゆさんがよければ」

その後は他愛ない話をしていた

紅蘭 「それでフブキさんがですね……」

おかゆ 「……………」

紅蘭 「おかゆさん……?」

おかゆ 「僕がいるのに……他の子の話するの?」

と、今に至る

紅蘭 「えっと……その……おかゆさん今のは……」

おかゆ 「僕の事何て……どうでもいいってこと？」

紅蘭 「そ、そんなわけないですよ！」

おかゆ 「ならもつと僕の事見てくれる？」

おかゆさんが着ている服が緩いせいか胸元が少し見え………つてどこを!!

紅蘭 「見えますよ……」

おかゆ 「なら僕以外のホロメンと二人きりになるのはダメだからね」

紅蘭 「ど、どうして……ですか？」

おかゆ 「だって僕……紅蘭君の事が好き……いや大好きだから……だよ？」

よく見たらおかゆさんの瞳がハートマークになってる

紅蘭 「き、気持ちは嬉しいですけど……おかゆさんの立場だとバレたりしたら……」

おかゆ 「断るんだ……そっかあ……なら仕方ないよね……」

おかゆさんは俺を強く抱き締め

いや…息…が…意識…が…

おかゆ 「これですーつと…僕と一緒にだよ…紅蘭君…」

おかゆは紅蘭の頬を撫でながら愛らしく呟いた

番外編②（リクエスト）

星街 「おはよう紅蘭君」

紅蘭 「おはようすいちゃん」

朝からすいちゃんの笑顔が見れる

こんな生活ができるなんて夢みたいだ

ただ1つを除いては。

星街 「……ねえ……すいちゃん以外と連絡はしてないよね？」

紅蘭 「うん…してないよ……俺にはすいちゃんだけなんだから」

星街 「フフツ…そつかあ……紅蘭君はすいちゃんのだもんね」

そう、束縛が凄すぎる

仕事の都合上連絡は必須

が、それすらもしないでと言ってるのだ

まあチェックはされないからすいちゃんには申し訳無いが嘘はついている

いつからこうなったんだろうか……

くとある前の日)

紅蘭 「それで…あの時…こうなって…」

マネ 「へえ…紅蘭さんって話し合いますし面白いですね！」

紅蘭 「そうですか？」

今日はみこめつとのレッスンでその間はみこさんのマネさんと色々話をしていた

結構意気投合して話が弾み楽しんでいた気がする

みこ 「…？…すいちゃん…ドア前で何してるにえ？」

星街 「ねえみこち…あの女消していいかな…」

みこ 「そ、それは困るにえ!!」

きつとここからすいちゃんの束縛は始まったと思う

星街 「紅蘭君…今日はどこ行く？」

紅蘭 「そうだね……すいちゃんとお出掛けはしばらくできてな  
かったし……うーん……」

星街 「すいちゃんは紅蘭君とならどこでも楽しめるよ」

紅蘭 「俺もすいちゃんとなら……どこでも……」

正直、出掛けないのが一番平和

出掛けてすいちゃんの束縛が発生する恐れがあるからだ

まあ家にも同じだが。。

星街 「うーん……じゃあ……」

すいちゃんは何か案が浮かんだらしい

星街 「お互いの携帯チェックとかどう？」

紅蘭 「……え？」

け、携帯チェック…？

星街 「すいちゃんは紅蘭君の事信じてるけど一応……ね？」

紅蘭 「し、信じてるならいいんじゃないかな？」



「ここはどうか避けないと……！」

星街 「……さっき連絡してないって言ってたならみせれるで  
しよ？……それとも……」

すいちちゃんに嘘ついて連絡してるの……？

紅蘭 「……す、すいちちゃん……」

や、やばい目に光がない……

星街 「ねえ……紅蘭君……早く見せてよ」

紅蘭 「いや……その……」

星街 「……そっか……紅蘭君の事……信じてたのに……」

シンジテタノニ!!!

↳数日後↳

星街 「はい……紅蘭君は……まだ体調悪くて長期休暇で……はい……  
……お願ひします……では……」

すいちちゃんは電話を切る

星街 「ねえ紅蘭君……君はすいちちゃんだけを見てるよね？」

紅蘭 「すい……ちゃん……」

俺はあれから拘束されている

星街 「すいちちゃんに堕ちてくれるまで許さないから……」

それ以降久崎紅蘭を見た者はいなかった

## 番外編③

白い雪が降り世間はホワイトクリスマスと賑わっている

クリスマスデートでアツィイカップルが沢山できるんだとか、

もしかしたら俺もその1人になるかもしれない

なんたって俺は今日、、

すいちゃんとデートなのだから!!

俺は待たせるのはよくないと思い15分前に着くよう動いた

紅蘭 「駅前の……確か……」

俺は目印となるのを探してたら声が聞こえた

星街 「あ、きたきた!……おーい紅蘭君こっちこっちー!」

紅蘭 「すいちゃん!……ごめん時間より早く来たのに待たせ  
ちゃった?」

星街 「大丈夫!……紅蘭君と早くデートしたいから早く来ちゃっ  
ただけだから」

やはりすいちゃんは可愛い

もう一度言うぞ?..

すいちゃんは可愛い

紅蘭 「その、俺もすいちゃんとデートしたくて早く来ようとしててさ、」

星街 「そ、そうなんだ、フフツ……嬉しい、」

すいちゃんは頬を赤らませ微笑んだ

星街 「じゃあ…行こっ！…紅蘭君！」

すいちゃんは俺の腕に抱き着いてきた

紅蘭 「あ、あの…近いのでは、」

星街 「いいじゃん……すいちゃんだって恥ずかしいからね……？」

紅蘭 「わ、分かったよ……」

今日のすいちゃんは甘えてきてていいなあ。。

腹ごしらえのお昼ご飯

星街 「紅蘭君の美味しそうだな」

紅蘭 「……あーんしてほしいの？」

星街 「…う、うん……」

紅蘭 「ほらあーん」

俺は一口サイズに掬い差し出す

星街 「あーん………ん〜！……美味しい〜♪」

紅蘭 「それならよかったよ……」

星街 「これですいちゃんとは間接キスだね♪」

プリクラにて



星街 「ポーズは2人でハートマーク作る！」

紅蘭 「まあそれくらいなら、」

2人でハートマークを作った

俺はからかってみようと思ひ

3∴

紅蘭 「ねえすいちゃん」

2∴

星街 「∴何々紅蘭君？」

1∴

紅蘭 「大好きだよ」

星街 「だだだ、大好き!?!?」

0∴∴!

写真は撮られみてみたら

紅蘭 「すいちゃん顔真つ赤!!」

星街 「うぐぐ∴∴やられたあ。。」

そして最後のイルミネーション

星街 「やっぱ冬はイルミネーションだよね〜!」

紅蘭 「そうだね∴∴綺麗に輝いてる」

星街 「うんうん！」

俺達は手を繋いで輝く道を歩いていく

星街 「ねえ……紅蘭君……」

紅蘭 「ん？……どうかしたすいちゃん？」

すいちゃんは前を見ながら俺に声をかけた

星街 「これから……すいちゃんの側にいてくれる……？」

すいちゃんは立ち止まり俺の眼を真っ直ぐ見つめている

紅蘭 「すいちゃん……」

答えなんか決まってる、

紅蘭 「俺の方こそ……側にいてほしい……これからもずっと！」

星街 「……………！……紅蘭君!!」

すいちゃんは俺に抱き着いた

そのタイミングで周りの噴水が湧いた

まるでパレードの中心にいるみたいだった

それより俺が一番驚いたのは、

すいちゃんが俺にキスをしたことだ

すいちゃんは俺の唇から離れて

星街 「すいちゃんの…プレゼント…どう…だったかな…？」

頬を赤く染めて言ってくれた

紅蘭 「…こんな嬉しいプレゼントはないよ……」

星街 「紅蘭君からのプレゼントは…ないの…かな……？」

紅蘭 「俺からの……ね……それは……」

俺はすいちちゃんの耳でとあることを話した

星街 「い、いい……の？」

紅蘭 「だって…こんな互いの気持ちがあるの今だけだよ？」

星街 「そ、そうだね!!……よ、よし……行こう!!」

俺とすいちちゃんの夜はこれから続く……

番外編④

クリスマス

だけど今は事務所

仕事なんだから仕方ない

俺は淡々と業務をこなしていた

フブキ 「紅蘭君く!!」

紅蘭 「グエツ……」

後ろから勢いよく抱き着いてきたのはフブキだった

フブキ 「えへへ〜…紅蘭君の匂い好き〜」

俺の首元をスンスンと匂いを嗅いで頬を緩ませている

紅蘭 「そんなだらしのない顔をしちゃだめだぞフブキ」

フブキ 「だって…収録中紅蘭君といれなくて寂しかったから、」

耳と尻尾がショボンと垂れる

こうなって言っちゃ悪いが可愛い

紅蘭 「つたく…でも今から一緒に帰るだろ？」

フブキ 「それとこれは別なの！」

紅蘭 「あーあ…クリスマスだからフブキの好きなもの作ろうとしたけどなあ、」

フブキ 「何してんのさ紅蘭君！…白上はもう準備完了だよ!!」

紅蘭 「ただいまーつと……」

フブキ 「さあさあ……白上に何を作ってくれるのですかね？」

目を輝かせ尻尾が揺れている

紅蘭 「やっぱり寒いからな………キムチ鍋だ！」

フブキ 「キムチ鍋キター!!!!」

フブキのテンションは爆上がり

尻尾の興奮が冷めません

フブキ 「キムチ鍋にタバスコいれるよね！」

はい………  
???



無事キムチ鍋完食

フブキ 「ふうく…美味しかった♪」

紅蘭 「……………」

フブキ 「…?…あれ紅蘭君どうかしたの？」

紅蘭 「……………」

俺はこの時意識が飛んでたみたいだ

フブキ 「紅蘭君?!?!」

紅蘭 「…んう……………」

フブキ 「あ、やっと起きました…………調子はどうですか?」

目が覚めると俺はフブキに膝枕をしてもらってることに気付く

紅蘭 「…おかげさまで……でもタバスコをいれるなら自分の皿だけにしろよ？」

フブキ 「うっ……わかりましたよーだ……」

紅蘭 「それと……膝枕……ありがとな」

フブキ 「ゲームをしながら紅蘭君の寝顔を拝めるといいう白上にとって一石二鳥だったので気にしてませんよー！」

紅蘭 「お、おう……」

もう少しフブキに膝枕されとくか

紅蘭 「よし…ゲームやるか！」

フブキ 「今日も勝たせて貰う！」

俺はいつも通りあぐらをかき

その上にフブキはちよこんと座る

そして俺はフブキの頭の上に軽く顎を乗せていつもの体制になる

紅蘭 「ほらほらフブキ…ミスってるぞ〜？」

フブキ 「紅蘭君の息が耳に当たってるから！」

尻尾でゲシゲシと当ててくる

痛くないけどな

紅蘭 「だってフブキの反応が可愛いからさ」

フブキ 「もうゲーム所じゃなくなったかな…」

……え？

フブキは俺を押し倒し顔を近づけてくる

紅蘭 「わ、悪かったって……フブキ……？」

フブキ 「今日くらいもつと甘えていいですよね？」

紅蘭 「あの……えつと………は、はい………」

俺の返答を聞いてすぐにフブキは唇を重ねてきた

部屋にリップ音が鳴り、唇が離れる

フブキ 「どうやら今日はそういう日なので……覚悟してください  
い………ね？」

紅蘭 「は、はい………」

果たして俺の体は持つのだろうか。。。

## 番外編⑤

クリスマスでも今日はいつもと同じ日常

のんびりと寝転んでる横にぼたんが同じように寝転んできた

ぼたん 「ねえ紅蘭…今日晩酌配信するんだけどさ」

紅蘭 「晩酌配信？」

ぼたん 「そうそう…紅蘭としたいなーって」

紅蘭 「んー…まあいいけど…ぼたんは大丈夫？」

ぼたん 「大丈夫大丈夫…ラミイちゃんとよく呑んでて耐性はついたからさ」

確かにここ最近はラミイさんと飲みに行ったりしてたな

紅蘭 「それならラミイさんも誘って…」

ぼたん 「だめ…紅蘭とだけ呑みたいの」

紅蘭 「わかった、わかったからそんなに拗ねないの」

ぼたんはプクーつと頬を膨らませてる

俺にしか見せない表情だから嬉しいんだよなあ

俺達は支度をし買い出しへと出ていった

まずは酒屋に着いた

紅蘭 「さてと今日は何を呑みますかね」

ぼたん 「んー…クリスマスだしワインとか？」

紅蘭 「酔ったりしないか？」

ぼたん 「し、しないから……紅蘭が酔ってくれたらな……」

最後の方は声が小さくて聞こえなかったが酔わないならいいか

俺はワインを物色してたら誰かが声をかけてきた

ラミイ 「あー！……ししろんと紅蘭君だ！」

ぼたん 「ラミイちゃんじゃん」

紅蘭 「ラミイさんもお酒の買い出しですか？」

ラミイ 「も？つて…ししろんと紅蘭君も買い出し…それなら  
ラミイも一緒に」

ぼたん 「あー…ラミイちゃん、ごめんけど今日は紅蘭と呑む予定なんだ」

ラミイ 「やだやだ！…ラミイもいれて!!」

紅蘭 「お、落ち着いてラミイさん」

ぼたんさんが困った顔をしている

どうにか穏便に済ます方法はないのだろうか、

ぼたん 「ラミイちゃん…聞き入れてくれないともう呑まないよ？」

ラミイ 「うっ…ごめんなさい。」

どうやら脅し？で解決したようだ

ぼたん 「じゃあ買って帰る紅蘭」

紅蘭 「あ、ああ…ラミイさん帰り気をつけてね？」

ラミィ 「は、はい……」

紅蘭 「ぼたん、今のはちよつと冷たすぎじゃない?」

ぼたん 「大丈夫大丈夫……今度ラミィちゃんの機嫌取つとくから」

紅蘭 「そんな簡単によくなるか?」

ぼたん 「紅蘭……ラミィちゃんのこと気にしすぎじゃない?」

ぼたんがジト目で俺を見てくる

紅蘭 「ぼたんの同期なんだし……ま、まあぼたんが大丈夫って言うならいいけど……」

ぼたん 「それでいいよ……ほら帰って準備するのでしょうか」

紅蘭 「ん、了解」



俺の家帰宅なり

と、思ったが何故か追い出された

ぼたん 「いいよっていうまで上がらないでね」

紅蘭 「えっ……ちよっ……」

俺が聞く前にドアを閉められた

俺なんか悪いことしたっけな。。。

数分経ってからぼたんの声がした

ぼたん 「紅蘭入っていいよ」

紅蘭 「やっとか……」

俺はドアを開けた

ぼたん 「……どう……かな……？」

何ということでしょう

ぼたんがミニスカサンタコスプレしてるではありませんか

破壊力抜群!!

紅蘭 「え……あ……似合ってて可愛い……よ……」

ぼたん 「下の方見すぎ……紅蘭のえっち」

紅蘭 「う、うるさい！」

これ配信耐えられるかな……

そして晩酌配信が始まり大好評だった

そりゃぼたんがコスプレしてるんだもんな

ちなみに全体は見せてないぞ？

ぼたんが俺にだけしか見せないって言ってたし

ちなみに俺は途中から記憶がなくなった。。

く翌朝く

紅蘭 「…んう…っ…あれいつの間に俺寝…て…」

ぼたん 「…紅蘭…zzz…」

あれ、何で俺達衣類着てないの…??

## 番外編⑥

フブキ 「紅蘭くーん……朝ですよー」

紅蘭 「んん……おはようフブキ」

フブキ 「はい……おはようございます……」

ニヤニヤしながら俺を撮る

紅蘭 「毎朝毎朝撮ってるよね。」

フブキ 「…嫌ですか？」

紅蘭 「別に嫌ではないが。」

フブキ 「これは白上のコレクションの1つですから」

コレクションの1つ

フブキは色んな俺を撮るのが趣味

撮ったのを印刷しアルバムに保存

またPCに保存したりと抜かりない

紅蘭 「…今日から数日会えないね」

フブキ 「…紅蘭君は寂しくありませんか？」

紅蘭 「寂しいよ？…でも仕事なんだからね？」

フブキ 「そう…ですね…」

今日から3日間、フブキはゲームーズと旅行に行ってくる

最初は俺を連れていこうとしていたが折角の旅行に俺が関与するのは申し訳ないと思ひ断った

ちなみにその時のフブキは大号泣だった

紅蘭 「忘れ物はないか？」

フブキ 「紅蘭君を忘れました」

紅蘭 「俺は物じゃありません」

軽くフブキの頭をチョップする

フブキ 「イタツ……むう……」

紅蘭 「ほーら……もう行かないと遅刻するぞ?」

フブキ 「ぜーったい……電話とか出てくださいね!」

紅蘭 「はいはい……ほら気を付けてな」

フブキは旅行へと出ていった

さて……俺は事務所に行くとするか

紅蘭 「お疲れ様です」

マリン 「紅蘭君……お疲れ様でーす!」

マリンさんはクネクネしながら俺にあいさつをしてきた

紅蘭 「……………」

マリン 「無言キツインですけど?!?!」

紅蘭 「あ、それは失礼しました」

マリン 「もう…紅蘭君ったら…船長のナイスボディにメロメ  
r」

紅蘭 「ぎっくり腰だけ気をつけて下さいね」

マリン 「マリンは17歳ですー!!」

紅蘭 「はいはい…………」

ここ最近フブキがない時はマリンさんがやたらと構ってくる

まあよくフブキとマリンさんは配信コラボしたりしてるし気には  
してないが。。。

マリン 「そういえばフブキ先輩って旅行ですよね?」

紅蘭 「そうですね…しばらく会えないと駄々こねてました  
ね」

マリン 「何か想像つきますね…………」



慰めるのにどれだけかかったか。。。

マリン 「そうだ……紅蘭君って…刺激的なの好きですか？」

紅蘭 「刺激的…ですか？」

マリン 「はい！……例えば…相手が夢中になってくれるとか  
」

相手が夢中に……

フブキはいつも俺を撮ったりしてるしこれといって……

いやでも撮られるだけで習慣みたいになっただしな。。

ここは話に乗ってみるか

紅蘭 「……フブキがない間暇ですしいいですね」

マリン 「なら簡単な事ですよ♪」

…簡単な事……??

何故かマリンさんは俺の目の前まで移動してきた

紅蘭 「ちよつ……フブキがないからってこの近さは……」

いつもはフブキがいると

バリアー!!とフブキが立ち塞がるのだ

マリン 「いないから……ですよ……」

マリンさんはそのまま俺に抱き付いてきた

刺激的なことってまさか。。。

マリン 「フブキ先輩帰ってきたらどうなんですかね」

ダメ押しにマリンさんは頬にキスをして去っていった

に、匂いを早く消さなきゃ!!!!



俺の匂いを嗅ぐなりフブキは距離を取った

紅蘭 「…フ…ブキ…?」

フブキ 「何でマリンの匂いがするんですか」

紅蘭 「いやこれは……」

フブキ 「白上がないのをいいことに他の人に色目でも?」

紅蘭 「ち、ちがっ」

フブキ 「白上の思い違いだったんですね……白上の事はどうでもいいと」

紅蘭 「き、聞いてくr」

フブキ 「白上なんていらないますよね?……白上よりマリンがいいと……それならもつと前から言うべきですよ?」

紅蘭 「お、俺は…フブキしか…」

フブキ 「白上しかいない?…その証拠はあるんですか?…頬に

キスの後がかすかに残ってますし……とんだ言い訳ですね」

ヤバイヤバイ……

フブキ 「紅蘭君が他の人に目が行かないようにしないとイケませんね……」

紅蘭 「……フブキ……」

フブキ 「紅蘭君の意見は聞きません……こうなるとわかっててそうしたんですよね？……白上としかいられないように今からしますので」

プツンと俺は意識が途絶えた

番外編⑦

ピンポーン

紅蘭 「お、きたきた……」

俺はインターホンの音に反応し玄関へと向かいドアを開ける

かなた 「やつほ〜！」

紅蘭 「いらっしやいかなた」

かなた 「ごめんね突然訪問したって言ってさ」

紅蘭 「対したことないよ……かなたのお願いは聞くのが当たり前だろ？」

かなた 「さっすが紅蘭！」

俺はかなたをおんぶしながら部屋へと向かった

かなた 「いや〜…やっぱりいつきても思うけど綺麗だよね〜」

紅蘭 「ちなみにかなたは掃除……してるよな？」

かなた 「うぐっ……シ、シテマス……」

紅蘭 「目を合わせなさい？」

かなた 「すみません……嘘つきました。。。」

紅蘭 「全く……今度一緒にしてあげるから」

かなた 「はーい!!」

相変わらずかなたに甘いなど俺は思ってしまう

かなた 「ねーねー……ゲームしよーよー」

かなたは俺の膝上に座り言ってくる

紅蘭 「わかった、わかったからあまり動かないの……」

かなた 「えー?……もしかして……僕にムラムラしちゃったりー  
?」



紅蘭 「ムラムラとか言わないの……」

かなた 「いいじゃん！……どうなの？」

紅蘭 「うーん……それよりトワさんがさ」

ベコベコベコ

俺が話題を変えようとした瞬間にペットボトルが握りつぶれる音がした

紅蘭 「……………え？」

かなた 「どうしたの紅蘭？」

につこりと俺をみるかなた

その右手には握り潰されたペットボトル

紅蘭 「あ、いや……ペットボトル……」

かなた 「握力強化の練習しちやつてたな」

かなたは笑いながらペットボトルを捨てに行った

そっかそっか……

握力強化か！↑おい

結局俺達はゲームを始め

かなた 「くらえー…：僕の必殺…：…つてあれえ!?!?」

紅蘭 「カハハハ!!…：甘い甘い!」

俺はかなたの隙をつきキャラを打ち落とす

かなた 「あんなのみたことないよ!!」

紅蘭 「ふっふっふっ…：まだまだだかななたは」

かなた 「紅蘭はやっぱゲームもうまいのかあ」

紅蘭 「ま、フブキさんとよくやってt」

バキヤツ

ん?

何か壊れた音したな

かなた 「ふーん…：フブキ先輩と…：ね…：…」

どうやらかなたがコントローラーを破壊したようだ

かなたのトーンが低いしイライラさせちゃったかな

にしても壊れるなんて劣化してたのかな？↑おい

かなた 「もう今日はゲームやらない……」

紅蘭 「そう？……じゃあご飯にする？」

かなた 「……うん……」

どうにか元気にしてやらないとな

俺はキッチンにて料理中

勿論、かなたの好きなオムライス

かなた 「……いい匂いするー」

少しは元気になったのか匂いをたどり俺のところに来た

紅蘭 「相変わらずはやいね……かなたの好きなオムライスだよ」

かなた 「やったー!!」

かなたはピョンピョンとジャンプして喜びを表現していた

可愛い↑

紅蘭 「はい、おまたせオムライスだよ」

かなた 「んー！…もうみてるだけでわかる！…絶対美味しい！！」

紅蘭 「それじゃあ……」

「いただきます」

かなたはスプーンで掬い口にに入れる

かなた 「とろけるう……」

普段みないトローンとした表情になった

紅蘭 「ふふっ…そんな言われると嬉しいね」

作ったかいがあったよ

紅蘭 「いやあ…やっぱりちよこさんに教えてもらっつ」

かなた 「は？」

突然空気が冷たくなった気がした

あれ、俺って風邪気味??

いや違うよな

かなた 「ねえ…さつきからわざと？」

紅蘭 「え、えつと…何が…？」

かなたはスプーンを置いて俺へと近付く

かなた 「へえ…気付いてもないんだ」

あ、あれ??

かなたのハイライトがないような。

俺はそこでプツツと意識が途絶えた

紅蘭 「んう……………」

かなた 「やっと目覚めてくれたね紅蘭」

紅蘭 「かな…た…??」

目隠しをされているが声でわかる……………かなたがいる

……………が……………俺は縛られている

そして……………右手の感覚がない

かなた 「僕さ…きつと紅蘭に依存してるんだよね」

紅蘭 「依存……？」

かなた 「うん、紅蘭と付き合ってからかな……一緒にいるとき他のホロメンの名前だとモヤモヤするんだ」

紅蘭 「……！」

そうだったのか……

俺のせいで……

かなた 「だから君を独り占めすることにした……だけど……謝らないといけないことがあるの」

紅蘭 「謝らないと……いけないこと……？」

かなた 「うん、紅蘭の右手……握り潰したの」

……握り潰した……？

あれ、そんなことできるの??

紅蘭 「今までかなたを苦しめたんだ……それ相応の事だよね」

かなた 「……そっか……でもまだ紅蘭を解放しないから……しばらく僕のになってね」

かなたは耳元でそう俺に伝えて去った

次に依存するのは俺のようだ



番外編⑧

K.  
O  
!!!!

いろは 「また負けたでござる!!」

ラプラス 「用心棒ざっこwww」

紅蘭 「今のはたまたまですよ」

いろは 「ぐぬぬぬぬぬ」

今はいろはさんとラプラスさんとゲームを楽しんでいる

クロエさんとルイさんは別件でいないようだ

こより 「ねえちよつといいかな?」

ゲームを楽しんでる最中こよりが止めてきた

紅蘭 「どうした?」

こより 「どうしたもなにも……この状況に困惑なんだけど、」

いろは 「紅蘭殿とゲームをしているからでござるか？」

こより 「違う違う」

ラプラス 「吾輩が紅蘭の膝上座つてることか？」

こより 「それだよ!!!」

え？

俺とラプラスさんはお互い目を合わせ頭を傾かせた

紅蘭 「ラプラスさんが座りたいと言ったからだか？」

ラプラス 「案外座り心地いいぞ！」

紅蘭 「クッションじゃありませんよ？」

こより 「こ、こよも座りたい!!……じゃなくて……」

ラプラス 「座ればいいじゃん」

こより 「ほんと?!……って……こよが言いたいのは紅蘭君にだよー!」

いろは 「……紅蘭殿は何も悪いことしてないと思うでござる」

紅蘭 「あれだろ……ラプラスさんに嫉妬してんだろ」

こよりは俺の発言に凶星をつかれたのかあたふたし始めた

こより 「そそ、そんなことないし？……紅蘭君はこよのマネージャーで大事な人だから!!」

ラプラス 「おーおー…吾輩達に紅蘭を取られて絶賛嫉妬中だな」

紅蘭 「みたいですね」

いろは 「嫉妬するところあるでござるか？」

相変わらずこういうのに鈍いんだよないろはさんは……

こより 「と、とにかくゲームは終わり!!……ほら紅蘭君はこよと大事な用事あるから!!」

大事な用事……？

そんなのあったか、？

こより 「いいから紅蘭君はこつち!!」

紅蘭 「わかったわかったからそんな強く引っ張るなって……ごめんないろはさん、ラプラスさん」

いろは 「また遊ぼうでござる〜」

ラプラス 「また乗せてくれよな！」

こより 「今からしばらくこよの実験室立ち入り禁止だからね  
！」

俺は強制的に実験室へと連れてかれた

いろは 「何だったでござるっ？」

ラプラス 「まあ気にするな…それより続きやるか！」

いろは 「いや最弱に用はないでござる」

ラプラス 「うつつつつつぎ」

こより 「ねえこよの言いたいことわかる?」

紅蘭 「こより以外の人とあまり接してほしくないとか?」

こより 「わかってるじゃん」

こよりは俺を座らせ膝上に座る

こより 「わかっててあんな状態になるかな?」

紅蘭 「仕方ないだろ?…俺はこよりのマネージャーであるからこその他のホロメンと接することは多々ある」

こより 「開き直るの?」

紅蘭 「そういう訳ではない」

ちよつとヒートアップし始めたな

俺の方も少しは落ち着かないと、

こより 「こよの言うこと聞けない紅蘭君にはお仕置が必要だよね？」

気付いたら俺は拘束されていた

いつのまに、

紅蘭 「お、落ち着けこより！……しつかり話し合わないか？」

こより 「こよは我慢してきたけど……もうだめ……そうだなあ……どんな効果のあるやつ飲んで貰おうかな」

こよりはいろんな試験管を見ながら選んでいる

ちなみに俺は何度か飲まされたことがある

ある時は一時的に理性がなくなる

ある時は女体化される

ある時はシヨタ化

ある時は……

こより 「よし、きめーた!!」

こよりは「3つ」の試験管を手にした

紅蘭 「ま、まで……何で何本もある?」

こより 「今までの罰を受けて貰うためだよ……大丈夫……何があつてもこよがいるから……ね?」

こより 「ねえ紅蘭君……こよの事好き？」

紅蘭 「ん？…当たり前だろ？」

こより 「えへへ…こよも!!」

何でこよりは当たり前前の事を聞いてきたんだ？

疑問に思っているとドアが開いた

●●● 「お邪魔〜」

●● 「ちよつと変なことしてないよね……って……よかった  
……」

顔付近が黒いモヤがかった人が入ってきた

こより 「もう勝手に入らないでよね」



●●● 「掃除お願いしたいから来たんだけど」

●● 「それくらい自分でやりなさい」

紅蘭 「……あ、あの……」

誰ですか??

## 番外編⑨

「はあはあ……!!」

どこか……どこか隠れるところは!!!  
俺は廃ビルに入り隠れる箇所を探す

だがそこに近づいてくる足音が聞こえてくる

コツツ……コツツ……コツツ……コツツ

ドクンツドクンツ

近づくにつれて心臓の鼓動が早くなる

「紅蘭君……どこにいますか?」

そうして現れのは……。

――数時間前――

「んーと確か待ち合わせはここら辺のはず……」

今日はとある人と会う予定だ

そうしてたどり着いたところは駅前時計塔の下

身に付けている腕時計と時計塔の時間も同じなのを確認した

「少し早かったかな」

デートというわけではないがあちらから買い物に付き合っ  
てほしいと頼まれたのだ

「……普通に考えたらデートだよなあ」

そう思いながら時間を過ぎるのを待っていた

「だーれだ?？」

突然両目を塞がれ視界は真っ暗になった  
まあ聞かれなくてもあの人だろう

「……るしあさん……ですよ?？」

「えへへっ……正解なのです」

るしあさんは両手を退けてくれた  
振り返ると頬を少し赤く染めたるしあさんがいた

「も、もしかして大分待ってたのですか?？」

「ううん…そんなに待ってない…：気にしなくていいですよ。」

「そ、そうですか…：じゃ、じゃあるしあの買い物に付き合っただけいいのです！」

「わかりました…：では向かいますか」

目的のお店に向かう最中は色々と雑談していた

「やはり紅蘭君はホロメンの皆から好かれているんですね」

「そ、そうだね…：何で俺なんかを好きになってくれるのかわからないけど。」

「るしあにはわかるのです…：」

るしあさんは立ち止まり俺を見つめてきた

そういえばるしあさんとはこうやって面を向かい合ったことないな

綺麗な目をしているなあ。。

「…：…：…：聞いていますか？」

「あ…：…」

るしあさんは俺の反応見るなりため息をついた

「もしかしてるしあといえるのになるしあ以外のこと考えたりしてたの  
ですか??」

「ち、違う違うー!……ただるしあさんの綺麗な目に見惚れてただけ  
ですよ」

「そ、そうなのですか!?!……あ、あんまり直視しないでほしいのです  
……」

るしあさんはすぐに俯いて俺と目を合わせないようにしてしまっ  
た

「折角綺麗なのに勿体ないですよ?」

「は、恥ずかしいのもう言わないでください!……ほ、ほら向かう  
のです!!」

るしあさんの歩調が少し早いけど大丈夫かな??

「はあ……るしあがいる時に紅蘭君がいたらなあ……」

「そればっかは仕方ないですよ……でもこうやってたまに会ったり  
できて俺は嬉しいですよ?」

「……女誑しなのです……」

な、何でそうなるのかな  
!?!?

「……ちなみに紅蘭君はるしあが付き合つてと言ったらどうしますか

「？」

……………え？

るしあさん今何て…………??

俺とるしあさんが付き合う??

「黙られるのは困るのです」

あれれー？

何かハイライトオフのような。

「何も言わないのですね…………つまりるしあとは付き合えない…………」

「ち、違つ…………突然の事で驚いて…………」

「言い訳は聞きたくないのです」

この雰囲気ヤバイ!!

俺は逃げることを選択し走り出す

「…………鬼ごっこですか…………」

そうして今に至る

今思えば逃げずにしつかり話せば、

「紅蘭君いるのはわかってるのです」

足音が近づき俺の前を通りすぎる

どうする……

このまま凌げるのか？

俺は息を止め必死に考える

「知ってますか？……るしあつてネクロマンサーなのですよ？」

ネクロマンサー……

確か死霊や屍を操れる……だっけな……

「ここで紅蘭君を捉えて……るしあだけのにするのです」

つまり……生かされることはないってことか……

見つからずに逃げないと終わりだな……

……通りすぎて大分時間が経ったな

つまり今がチャンスなのか？

……今しかない!!

俺はドアを開け隠れた場所から出た

「やっとでてきたのです」

そこにいたのは壁にもたれかかっているしあさんだった

「ど、どうして……通りすぎたし……」

「ネクロマンサーと言ったの忘れたのですか？」

素晴らしい反対方向からスピーカーがついた屍が歩いてきた

「まあいいのです……紅蘭君……これからはるしあが面倒をみてあげるのです」

「……待っ」

俺の視界は逆さまになり意識が消えた



本編

人助けしたらホロライブスタッフになりました

人助けしたらホロライブスタッフになりました

? 「ここがホロライブの事務所だよ」

俺は今ホロライブの方と事務所に来ました

〜数時間前〜

紅蘭 「はあ……あの面接も落ちたかあ……」

仕事に就くため色々な会社に面接を受けるがどの会社も俺を落とす

紅蘭 「モデルのスカウト……あん時受けていれば……」

数年前、大学生の頃に受けたが断ってしまったのだ

俺は悔やみながら道を歩いていた

そしたら女性の声が聞こえ、路地裏で女性が男二人に囲まれて絡ま

れてるでないか！

紅蘭 「……助けた方がいいよな……」

喧嘩は強くない

ならやることは一つ

紅蘭 「おいお前ら……その女性嫌がつてるだろ……やめてやれ」

男1 「正義のヒーロー気取りですかー？」

男2 「今時そんなのいるのかよ！www」

？ 「は、離してください!!」

紅蘭 「どうみても拒否してるし……それに写真撮ったから警察にお縄になるか？」

俺は男共に見せつける

男1 「チツ……めんどくさいやつだ……ほら行くぞ」

男2 「覚えてやがれ！」

男共は女性を置いて逃げていった

紅蘭 「ふう……何とかなった……大丈夫かあんた？」

？ 「……は、はい……！……その……助けて下さりありがとうございます……ごめいませ！」

黒髪のロングヘアでケモミミがついててもれなく尻尾もついでる女性が頭を下げた

……………ん？

ケモミミに尻尾……………？

ミオ 「申し遅れました……………私ホロライブ所属の大神ミオつて言います」

紅蘭 「……………へ……………大神さん…………………………つて……………あの大神ミオさん!?!?」

ミオ 「ちよつ……………あんまり大きな声出さないで!」

大神さんは俺の口元を押さえる

紅蘭 「す、すみません……………驚いて……………つい……………」

驚いて当たり前だ

なんせいつも配信で元気をくれてるあの大神ミオだぞ

それより名乗らないとな……………

紅蘭 「俺の名前は久崎紅蘭です……………それでは……………」

早めに撤退しようと歩き出したが腕を捕まれた

ミオ 「助けて貰ったから……………お、お礼くらいさせてください！」

く現在く

と、まあこんな感じで今に至る

フブキ 「いや……………ミオが彼氏を連れてきたと思ったよく」

ミオ 「ちよつとフブキ！」

事務所に入るなりすぐに声をかけてきたのは白上フブキさんだ

あやめ 「人間様……………ミオを助けてありがとね！」

こちらは百鬼あやめさん……………

紅蘭 「大神さんが困ってたので見て見ぬふりなんてできません  
よ」

まあ……………助けるだけだったから気づいてなかったけどね

ミオ 「それで……………紅蘭さんがよければなんだけど……………」

そうだ、お礼をしたいと言ってたな

ミオ 「…ホロライブのスタッフにならないかな？」

……はい？

短くてすみません  
!!!!

## ホロメンと顔合わせ

ミオ 「ということこれからウチらのサポートしてくれる久崎紅蘭さんです」

これは夢なのか？

俺の前にはホロメンがいるではないか！  
いない人もいるけど後日会えるのだろう

そら 「ミオちゃんを助けてくれてありがとう！」

みこ 「男前だにえ！」

星街 「みこちだったら助けないかもね！」

みこ 「すいちゃんふぎげんな！」

ときのそらにみこめつと!!

フブキ 「よろしくね紅蘭さん！」

メル 「こんかぷくよろしくね」

1期生の白上フブキに夜空メル……

あやめ 「これから余ろしくなのだー！」

あくあ 「よ、よろしく……おねがい……シマス……」

スバル 「あくあ…緊張し過ぎだよ」

2期生の百鬼あやめ、湊あくあ、大空スバルに

マリン 「船長も助けてくれたーい」

ぺこら 「こんなの助けるわけないぺこ」

マリン 「ああん?!?!?」

3期生の兎田ぺこらと宝鐘マリンさんだ

かなた 「紅蘭さんありがとうございます！」

ルーナ 「ありがとなのら〜」

4期生の天音かなたに姫森ルーナ……

ねね 「どんな女性がタイプですか！」

ポルカ 「初対面でどんな質問してんだ?!?!?」

5期生の桃鈴ねねと尾丸ポルカ……

いろは 「久崎紅蘭……うーん……」

こより 「……?……知り合いなの？」

秘密結社hoooxの風真いろはと博衣こより……

あ……風真いろはか……

やっぱり本人だったか……

いろは 「もしかして……蘭ちゃん……？」

紅蘭 「……どうやら本人らしいな」

ミオ 「ちよつ……ちよつと待って！……2人は知り合いなの  
!？」

割って入ってきたのは大神さんだ

いろは 「ミオ先輩……蘭ちゃんは風真の……」

「はじめてをとった相手でござる!!」

全員 「ええく  
!?!?!?!?!?!」

フブキ 「何と……!」



星街 「こりゃ…ヤバイよね？」

あやめ 「余…気になる！」

これ変な捉え方してないか??

紅蘭 「待ていろは…ただ俺はいろはに勝っただけだぞ？」

いろは 「それが問題でござる!!」

何処に問題が…??

そら 「…皆…ここはいろはちゃんと紅蘭君だけにしよ？」

ぺこら 「そら先輩に賛成ぺこ」

ルーナ 「またなのらく」

ねね 「あの好きなタイプは！」

ポルカ 「いい加減にしろ!!」

いろはと俺を残し皆は出ていった…

いや1人残ったな

紅蘭 「えつと…大神さん…?」

ミオ 「…ウチはその話を聞きたい…紅蘭君がどんな人か知りたから」

真剣な目で俺を見つめる

…譲る気はないようだな

俺はいろはに目を向けるといろはは頷いた

紅蘭 「いろはとは昔……」

く数年前く

俺はとある山奥の道場で己を磨いていた

いろは 「頼もー!!」

勢いよく道場のドアを開けたのは変な狸を連れてる女性だった

紅蘭 「えっと……体験の子ですかね？」

いろは 「道場破りの風真いろはでござるー!」

あー……そこらの道場で噂の方が

紅蘭 「……一戦交えるしかないみたいですね……」

いろは 「話が早くて助かるでござるー!……ではいざ真剣……」

そして結果は……

紅蘭 「大した腕前だ……が……俺には届かない」

風真の刀を弾き飛ばし首元に置く

いろは 「風真が……負けた……」

その日以来ずっと道場破りにきて倒しまくった

紅蘭 「とまあ……こうだが……いろは……はじめてなんて……」

いろは 「あれが風真のはじめての敗北でござる!!…責任取るでござる!!」

ミオ 「は、はじめてってそのはじめてかあ……よかった……」

いろは 「何のはじめてだとおもったでござる?」

ミオ 「いろはは気にしないでいいよ!」

いろは 「…そうでござるか……って蘭ちゃんは何も言わずに消えるなんて酷いでござる!!」

紅蘭 「ただの対戦相手にそこまで連絡するきなかったわ!」

いろは 「ごっちの気持ちを考えてほしいでござる!!」

この後ずっといろはと言いました

ちなみにいつの間にか大神さんはいなかった

アンケートはじめました!!

次話くらいで残りのホロメンだします！  
海外勢は考えてます!!

## ホロメンと顔合わせ②

お気に入り登録10人越えました！

それと誤字修正報告ありました

ありがとうございます!!

それではどうぞ!!

今日は研修を終えAちゃんにこの前会えなかったホロメンがいるから会ってほしいとの事で顔合わせに移動中

Aちゃん 「何か皆会いたがってたから…これから何かあったら言ってるね？」

紅蘭 「頼りになります！」

頼られて嬉しいのかAちゃんは笑みを浮かべていた

A Z K i 「あ、もしかして噂の久崎君？」

ロボ子 「はろーぼー…ロボ子だよ」

歌姫AZKiに高性能？ロボ子さんだ！

紅蘭 「どうもはじめまして…」

まつり 「わっしょーい！…夏色まつりだよー！…これからよろしくー！」

アキロゼ 「ふふっ…よろしくね♪」

はあと 「今度はあちやまの料理を食べさせてあげるわね！」

まつり 「それは罰ゲーム!!」

おお…！…清楚担当の夏色まつり…  
アキ・ローゼンタールことアキロゼ…  
ハチャメチャ料理をする赤いはあと!!

紅蘭 「こちらこそお願いします…！…あ、後…今度食べます！」

シオン 「いやそれはやめた方がいいと思うよ」

ちよこ 「久崎様には…ちよこの美味しい料理を作って差し上げますわよ♪」

紫咲シオンに癒月ちよこ…

ちよこさんの目のやり場に困る…

紅蘭 「……ふう……」

シオン 「何でこつちみて落ち着いてんの？」

ノエル 「あー！……噂の人だー！……こんマツスルー！」

フレア 「ちよつとそんな駆け寄ると困るよ」

No. 1 大胸筋の白銀ノエルとハーフェルフの不知火フレアだ！

紅蘭 「元気はいいことですよ……うお……」

トワ 「こんやつぴー……トワ様です！」

わため 「わためえは悪くないよねえ？」

後ろから来たのは常闇トワ

そして突っ込んできたのは角巻わためだ

紅蘭 「わ、悪いかと？」

わため 「そ、そうですか……」

ラミイ 「雪花ラミイです……お願いします……」

ぼたん 「ごめんね……ラミイちゃん二日酔い？でちよつと冷たい口調でさ……」

ラミイ 「ちよつとししろん!!」

これぞでえてえ

雪花ラミイと獅白ぼたんだ

ラプラス 「あれが噂のいろのはじめてか！」

クロエ 「新しい飼育員さんだ！」

ルイ 「コラコラ…2人とも初対面でしょ」

紅蘭 「あ、やまだだ」

ラプラス 「我輩をバカにしやがって!？」

クロエ 「え、事実じゃん…」

秘密結社h o o x、ラプラス・ダークネスと沙花又クロエと鷹嶺ルイだ

あれ、そういえばあの二人見当たらない……

辺りを見渡すと視界が真っ暗になった

おかゆ 「もぐもぐ……おかゆだよ」

ころね 「ゆびゆび……こおねだよ」

右耳からおかゆさん

左耳からころねさんが声を描けてきた

……生ASMRや!!!



おかゆ 「ミオちゃんの事ありがとね〜」

ころね 「絡んできた男はゆび貰つとく!」

この二人を忘れていたよ

紅蘭 「皆さんわざわざお忙しいなか……こんな俺に会って下さりありがとうございます……」

まつり 「ミオちゃんを助けてくれたからね!」

シオン 「まあ……会って当然じゃない?」

ラプラス 「おい!……やまだを取り消せ!」

ラミィ 「……………うるさい」

ラプラス 「は、はい……」

ノエル 「シヨタじゃなかった……」

トワ 「どちらかというモデルさんって感じですね」

と、各々感想を述べてくれた

Aちゃん 「それじゃあ……まだやることあるので皆さんは帰宅し

たり残ったりとお任せします」

Aちゃんの一言で解散をした

さーて……これから頑張りますか!!

中々長文作れない

これくらいの方が読みやすいのかな？

すいちゃんど付き合う??

お気に入り登録20人突破!!

早いのか?遅いのか?

そんなのどーでもよい!

とにかくありがとうございます!!

ホロライブのスタッフになってから数日

それなりに仕事には慣れてきた

紅蘭 「さてといつもの聴きながら作業しますか」

イヤホンをつけ、とある音楽を流す

やはり星街さんの歌はとても素晴らしい

語彙力が欠けているが素晴らしいんだ

作業を続けていると誰かにイヤホンを取られた

紅蘭 「…すみません…音楽を聴いてまし…」

振り向くとそこには星街さんがいた

星街 「何聴いてるのかと気になったけどすいちゃんのアルバム  
じゃん！」

紅蘭 「あ、その…」

急に恥ずかしくなってきた

それもそうか…本人が目の前にいるのだから

紅蘭 「そ、その…星街さんは…」

星街 「すいちゃん」

紅蘭 「…はい？」

星街 「すいちゃんって呼んで？」

突然距離感爆上げされました

でも呼ばないとこの事を広められそう

紅蘭 「す、すい……ちゃん……」

星街 「聞こえないな〜…ハッキリ言っほしいな〜」

こ、この人Sだ!!!

決して俺はMじゃないのに!!

紅蘭 「すいちゃん!……こ、これでいいだろ?」

星街 「まあ及第点かなあ〜」

まじか、この人ヤバすぎる

紅蘭 「あ、それでその……すい……ちゃんは…何用でこちらに?」

俺の作業場はホロメンの待機所等から別にある  
まあ男だし仕方ない

星街 「紅蘭君に会いたいなあつて……」

え、何この人可愛すぎませんか?

あのすいちゃんですよ?

ほらあのすいちゃんですよ？

大事なので2回言いました

星街 「今…変なこと考えてなかった？」

紅蘭 「そんなことないよ……」

星街 「ふうん…ま、いいや…それじゃ今からすいちゃんと付き合って？」

…付き合って…??

紅蘭 「ま、待て待て!!…それは会社的にヤバいだろ!!」

星街 「紅蘭君…もしかして付き合うって恋愛だと思ってたリク？」

すいちゃんは口元を隠しながらニヤニヤしていた

紅蘭 「紛らわしいこと言うからです!!」

その後すいちゃんの予定に付き合い時間が経過した

星街 「いや…久々に気持ちよく歌えたなあ」

紅蘭 「すいちゃんの歌はずっと聴いてられますよ」

2人はカラオケ店から出て各々感想を言った

え？何も起きなかった？

そりや聴くのに夢中だったからな

星街 「でも紅蘭君…歌ってないけどよかったの？」

紅蘭 「すいちゃんが歌ってるのを生で見れるだけでいいですよ…それに…」

星街 「それに??」

紅蘭 「すいちゃんは綺麗で素敵だなんて改めて思いましたよ」

俺の言葉にすいちゃんは走って先を行き振り向いた

星街 「…ま、またすいちゃんと付き合ってね!!」

紅蘭 「こちらこそ…お願いしますね」

星街 「あ、忘れてた…ねえ紅蘭君!!」

すいちゃんの頬は赤く染まっていた

きつと太陽の日で頬が赤くなったのだろう

それにしても夕方が背景になっててそれがより綺麗にみえた

星街 「すいちゃんは??」

紅蘭 「今日も可愛いー!」

このやり取りをし今日を終えた

く解散後く

星街 「…綺麗…か…」

姉街 「え、どうしたのいきなり」

星街 「か、関係ないから!!」



アンケートで投票が多かったすいちやん描きました！（50票以上で打ち切りました）

同票のフブキも描きます

後2人に絞ります

1つ前の話に他のホロメンのアンケート作ったのでぜひ投票お願いします!!

おかゆところねがアンケート内にいれてなかったので再度アンケートしてます

フブキングに挑め!!

フブキ 「あー…紅蘭君…こんこんきーつね!」

指で狐マークを作りポーズをしてきたのは白上フブキさんだ

紅蘭 「どうも…こんにちは白上さん」

フブキ 「もう少しリラックスして話してくださいよ」

紅蘭 「そう言われましてもまだひよっこのスタッフですし  
……」

フブキ 「でもいろはちゃんには大分親しいと思うけどなー?」

紅蘭 「いろはとは昔知り合ってただけですよ」

あのいろはの発言で変な噂が経ってしまったが大神さんが何とか  
誤解を解いてくれた

まじ感謝です大神さん……

紅蘭 「白上さんは今から帰宅ですか?」

白上 「白上は紅蘭君とゲームがしたいから待ってたのだ!!」

ふむ、ゲームか

久しくやってないなあ

紅蘭 「白上さんにボコボコにされる未来しかみえませんが……」

白上さんはホロライブ1期生でありゲーマーズでもある

様々なジャンルのゲームをプレイでき

某ゲームの色違い耐久は見物だ

白上 「だから白上は紅蘭君とゲームがしたいんです!……上手い下手とか関係ないです!」

紅蘭 「まあそこまで言われると……やるしかありませんね」

白上 「やったー!」

とても嬉しかったのか尻尾が勢いよく揺れてるのではないか

……触りたい……

白上 「紅蘭君……今どこ見てました?」

ジト目で俺に問いかけてくる

紅蘭 「……さ、さあ時間勿体ないしゲームやりましょう!」

白上 「あー!……逃げた!今絶対逃げました!」

俺は逃げるように配信部屋に行き白上さんは怒りながら追いかけていた

↳配信部屋↳

紅蘭 「ここに来てしまいましたけど…まあゲームするだけでも  
んね」

白上 「いつそのこと白上のゲリラ配信にでも出ちやいます？」

紅蘭 「いやそれはやめとくよ…」

ホロライブにクレームとか入って解雇とかされたりするかもしれ  
ない!!

白上 「うーん…まあ今はゲームをやりましょう！」

ポチツとなど白上さんは呟きながらゲームを起動させた

紅蘭 「ふむ…格闘ゲームですか」

白上 「そう！…これならそんな難しく考えなくてすむかと思  
まして！」

紅蘭 「わざわざすみません……」

これからゲーム色々やろうかな……

フブキ 「とどめの飛び蹴り！」

紅蘭 「やられた……」

K. O!!

フブキ 「またまた飛び蹴り！」

紅蘭 「またもや同じて。。」

K. O!! (2回目)

フブキ 「隙あり！」

紅蘭 「必殺技……」

K. O!! (3回目)

K. O!! (4回目)

K. O!! (5回目)

紅蘭 「もういやだ……」

フブキ 「紅蘭君はワンパターンだからすぐダメージくらって負けるんですよ」

紅蘭 「そうなのか?…無意識だった……」

フブキ 「もっと色々試さないよこのフブキングに勝てないのだ  
!」

紅蘭 「勝とうとは思ってないけど……でも1回は勝たないと  
!」

〜数時間後〜

紅蘭 「キャラ変えても勝てなかった……」

フブキ 「まだまだですな〜」

紅蘭 「ゲームの技術磨いてリベンジさせて貰うからな!」

フブキ 「受けてたとうじゃないか!!」

紅蘭 「首洗つとけよフブキ!」

俺は宣言をし作業場へと戻っていった

取り残されたフブキは

フブキ 「…えへへ…フブキって呼んでくれた!」

頬を赤くし尻尾もソワソワと動く

ミオ 「へー…いい感じなんだねフブキ」

フブキ 「ミ、ミオ…?!?!」

ミオ 「紅蘭君見当たらないと思ったらフブキの所にいたんだ  
」

フブキ 「あ、えつと…ミオ…私はただ紅蘭君とゲームを…」

ミオ 「……も…したかった……」

フブキ 「…ミ、ミオ…??」

ミオ 「ウチもしたかった!!」

フブキ 「き、きつと誘えばいいと思うよ!」

ミオ 「ほんと?…じゃあ今度聞いてみる!」

そう言い配信部屋を出ていった

フブキ 「…白上も負けてられませんかあ…」

はい、どもやまりゅーです！

アンケートですが圧倒的に遅くてもいいから描けるだけ描け!!が多かったため票が入ってたホロメンを優先に描きます！

(アンケート削除します)

尚、後半のアンケート(ホロメンと顔合わせ②)のアンケートもある程度の票数入ったらまたアンケート取ります

お気に入り30件突破

UA1,000突破、ありがとうございます！



ホロメンの自宅にお邪魔する?!?!?

俺は今とあるホロメンのお家に向かっております

物凄くソワソワしてます

ちなみに正座中

〈数時間前〉

紅蘭 「今日の仕事も終えたし…帰ったらゲームの技術をあげる  
かあ」

フブキとのゲーム対戦以降欠かさずゲームの技術を磨いている

…あれ、いつの間にかフブキって呼んでるな…

まあいつか!!

俺は荷物を持ち会社を出た

そしてすぐに声を掛けられた

ミオ 「あ、紅蘭君…今から帰りなの？」

紅蘭 「大神さん…はい今から帰るところですね」

大神 「そ、そっか…あの…もしよかったら…ウチの家に来ない？」

な、何…だと?!?!?

でもそれは大問題になるのでは……

紅蘭 「俺と大神さんの関係はスタッフとアイドルですよ……それに…俺だつて男です…やめといった方が……」

ミオ 「この前のお礼でご飯食べてほしかったのになあ……」

大神さんの手料理だ…と!?

こんな機会めつたにないはず!

それならば取る行動は1つ!

紅蘭 「…そ、それならお邪魔させて貰います…」

ミオ 「……それじゃあウチの家に行こっか！」

と、今にいたるのである

ミオ 「紅蘭君できたよ〜って……何正座してるの？」

紅蘭 「己を抑えるため上の行動であります」

ミオ 「そ、そう？」

食卓には肉じゃが、豚汁、炊きたてのご飯そして……

紅蘭 「これは……俺の大好きな……オムレツ!!」

ミオ 「いろはちゃんに紅蘭君の好きな食べ物何か聞いて作って  
みたんだ！」

紅蘭 「わざわざ俺のために……」

それにいろはもよく覚えていたな

いろはのオムレツは焦げまくってたけど今は作れるのかなあ

ミオ 「助けてくれたお礼と入社祝いということで……いただき  
ます」

紅蘭 「いただきます！」

俺は固まってしまった

ミオ 「えっと……紅蘭……君……？」

紅蘭 「す、すまない……美味しくて……つい……」

ミオ 「そ、そっか……美味しかったんだ……」

大神さんは安堵の顔をしていた

そして軽く話ながら食べ終え片付けをしてから2人でのんびり会話をした

紅蘭 「今日はありがとねミオさん」

ミオ 「……い、今ウチのこと……」

紅蘭 「……あ……ご、ごめん……その今までよく配信みててつい……やめとく……」

ミオ 「ううん……ミオって呼んでほしい！」

ミオさんが凄く近寄ってきた

紅蘭 「う、うん…わかったよミオ…さん…」

ここ最近名前呼び増えてきたなあ

仲良くなつてきて証拠かなあ

ミオ 「あの出会いがなかったら今がないよね」

紅蘭 「確かに…そういやあの時ミオさんは何であそこにいたんだ？」

ミオ 「恥ずかしながら…時間押してて近道使おうとしてまして…」

紅蘭 「ミオさんでも時間に追われることあるんですね」

ミオ 「で、でもそのおかげで今があるからね！」

紅蘭 「そうですね…これからもよろしくねミオさん」

ミオ 「よろしくね紅蘭君！」

ミオさんは満面の笑みを浮かべていた

一旦アンケート終了します

それにしても獅白ぼたんがダントツ！

ということで獅白ぼたんは確定します！

とりあえず今は最初のアンケート最終候補を描いています

後程今回の最終アンケート取ります

それとUA2,000越え

お気に入り50件越えありがとうございます!!

## 至福とはこれ

紅蘭 「ふわあ……………」

時計をみると今は22時を指している

紅蘭 「もう少しやるか……………いや仮眠してから……………」

俺は机に伏せながら眠りについた

紅蘭 「ん……………あれ……………」

目を開けるとそこは仮眠室だった

それと後部には柔らかな感触……………

そら 「あ、久崎君…よく眠れた？」

紅蘭 「そ、そらさん……………つてす、すみませんこんな事させて

しまつて…」

起き上がろうとすると上から抑えられた

そら 「いいから休んで……Aちゃんから許可は得てるから」

A先輩に……？

紅蘭 「えつと……今の時間つて……」

そら 「朝8時だね」

仮眠というより普通に寝ちまった！

それに同じ服だしお風呂入ってない！

何で沙花又さんは平気でいられるんだ！

クロエ 「へっくしゅっ!!」

いろは 「汚いでござる」

クロエ 「悪気はないって!!」

紅蘭 「…あの…ちなみにここに運んだのは……」



そら 「私だよ？」

紅蘭 「お手数お掛けしました!!」

俺は勢いよく土下座をする

そら 「そ、そんな土下座しなくていいよ？」

紅蘭 「それに膝枕してくれるなんて……つてあの何故押さえつけてます?」

そら 「うーん……ちゃんと休んでほしいから？」

ホロライブの大先輩のそらさんに気を遣わされてる……

そら 「その感じだと大丈夫な感じするけどまだ休んでて」

紅蘭 「いやでも……」

そら 「いいから休みなさい」

紅蘭 「は、はい……」

これ以上反論したら何されるかわからない……

そら 「それじゃしつかり休んでね？」

そらさんは仮眠室を出ていった

紅蘭 「……お言葉に甘えて休むか……」

俺はゆっくり瞼を閉じた

仮眠中の紅蘭をみつけたときのそらとAちゃんの会話

(ときのそら目線)

そら 「おはようございま…す?」

いつもより早く事務所に入るとAちゃんが人差し指で静かにして  
と合図をしてきた

Aちゃん 「見てみて…紅蘭爆睡してる」

そら 「ほんとだ…って…寝顔可愛いね」

何か意外な一面見れた気がする

Aちゃん 「さてと…仮眠室に運ぼうかな」

そら 「あ、私が運ぶよ」

久崎君をおんぶし仮眠室へと移動をした

そら 「これでよし…と…時間はまだあるし…」

少し悩んだけど膝枕をすることにした

そら 「あ、久崎君のほっぺって意外ともちもちしてる…」

こんなに触ってるのに起きる気配もない

そら 「……私達のために色々サポートしてくれてありがとね  
…」

今度皆で何かやってあげたいなあ

はい、描くのが難しい!!

アンケートは全部描いちゃえ!!がダントツ

その為自分のペースで自由に描いてみます!

もしリクエストありましたら全然してもらって大丈夫です!

ちなみに新たにアンケート作りました

これは長めに取ります

その間に色んなホロメン描けたらなと思います

ちなみに1,000文字ギリギリで

めちや長文で描く人尊敬します。。。



いろは 「…?…何でござるか?」

えっと確か……………

紅蘭 「ノットジャキンジャキン……イエスニンニンだっけ?」

いろは 「逆!…逆でござる!!」

紅蘭 「ニンニンだろ〜」

いろは 「もう許さないでござる!!」

いろははチャキ丸を装備して追いかけてきた

紅蘭 「おいこっちは何もないぞ!!」

いろは 「蘭ちゃん……………覚悟するでござる!!」

こうして追いかけてここが始まった

やはり運動をサボったせいかな少し鈍っている

いろは 「蘭ちゃんこのままだと風真の勝ちでござるな!」

紅蘭 「ただのかけっこで負けても何とも思わねーよ！」

いろは 「ぐぬぬぬぬ……」

紅蘭 「疲れたから俺は休ませてもらうぞ……」

いろは 「それなら風真も休憩するでござる」

それより事務所を出てここはどこだ？

紅蘭 「いろは……ここどこ？」

いろは 「奇遇でござるな……風真も困ったことに分からないでござる」

何てこつたい

紅蘭 「いろはのせいだからな！」

いろは 「蘭ちゃんのせいだござる!!」

2人 「うがー!!!」

漫画のような取っ組み合いが始まった

ようやく落ち着き俺は話しかける

紅蘭 「やっぱ変わらないないろは」

いろは 「蘭ちゃんこそ変わってないのでござる」

紅蘭 「あのさ…いろは…蘭ちゃんじゃなくて蘭殿とかどう？」

いろは 「蘭殿…確かにいい響きでござる！」

紅蘭 「だろー？…ってどう帰るか考えねーと！」

いろは 「蘭殿…落ち着くのでござる…風真はスマホ持ってきてるのでござる！」

紅蘭 「ポンコツではなかった！」

いろは 「聞き捨てならないでござる！」

いろははスマホを起動した

いや、したように見えた

いろは 「充電…切れてたでござる……」

紅蘭 「……はい？」

いろは 「…万事休すでござるー!!」



く事務所にいるホロメン達く

ミオ 「あれ紅蘭君のスマホだ」

フブキ 「そういえばいろはちゃんに追いかけてたね」

ミオ 「…もしかして迷子とか!？」

フブキ 「そんなまさか…:…:…:まさか…:ね？」

2人は見つめ合い答えが出た

ミオ、フブキ 「探すしかない!!」

後に何とか見つけてもらいました

紅蘭 「2度といろはと出掛けないからな！」

いろは 「同じく蘭殿と出掛けないでござる!!」

そろそろ1人ずつじゃなく複数人交えようかなあ

そっちの方が自然と文字数増えそうだし？

!!  
でも内容すつからかんかもしれないからあまり期待しないように

遭難しました

今回はお試しに複数人

あんま自信ないっす

いやもとからやった

今日は仕事のもなく休みの日

俺が今いるところは……

海のと真ん中である!!!

紅蘭 「……魚釣りは辛抱強く待つのである……」

船を借り海で魚釣りをしている

そしてもう一人

マリン 「紅蘭君……船長……酔いました……ウプツ」

紅蘭 「無理矢理ついてきたからですよ」

マリン 「だ、だって……海に出るって言うのですからそんなの船長が行くしかないっしょー!」

紅蘭 「うん、とりあえず一旦吐いてこい」

マリンさんは船室に入っていった

紅蘭 「……気になるから見てくるか」

決してやらしい事じゃないからね!!

紅蘭 「マリンさーん……あくあさんの容態は……」

もう一人この船に乗ってる人がおりそれがあくあさんだ

あくあさんは船を出してすぐに気分を悪くした

マリン 「あくたんは寝てますよーって……船長のことは気にしてくれないんですか!？」

紅蘭 「心配はしてますよ……けどあくあさんに関してはマリンさんが無理矢理連れてきたでしょ」

マリン 「ぐうの音もでません……」

紅蘭 「そういえばあくあさんとはあまり話さない気がしますね」

マリン 「あくたんはちよつと距離を置く癖がありますからね」

……嫌われてたり？

顔合わせの時もそんな感じしたような……

マリン 「まあでも紅蘭君なら大丈夫ですよ!……この船長が太鼓判押してあげます!」

紅蘭 「静かにしてくださいね……あくあさんが困りますから」

マリン 「ねえねえ紅蘭君……あくたんばつかじゃなくて……船長にも構ってはしいな」

紅蘭 「また今度ならいいですよ」

マリン 「え!?!…いい、いいの!?!」

何かおかしいことを言ったのだろうか？

まあいい……今はあくあさんの回復に務めるか

く数時間後く

あくあ 「んん……あていし……今まで……」

紅蘭 「気分はどうかなあくあさん？」

あくあ 「あ……えつと……大丈夫……デス……」

相変わらず距離を取られてる気がする

マリン 「紅蘭君……あくたん起きましたく？」

タイミングよくマリンさんが戻ってきてくれた

紅蘭 「今起きたところですよ」

マリンスさんは急いで近づいていった

マリン 「ごめんねあくたん……船長が無理に連れてきたせいで……」

あくあ 「だ、大丈夫だよ……その紅蘭さん……あの……ご迷惑かけてすみません……」

紅蘭 「あくあさんは悪くないですよ……悪いのはマリンスンなので」

マリン 「脱げばいいんだな!」

紅蘭 「何でそんな思考になるんだよ!」

マリン 「見たくないんですか!」

歯止め効かなくなる前に逃げねば

紅蘭 「あくあさん……マリンスン置いて事務所に帰ろっか」

あくあ 「は、はい……」

マリン 「待つて待つて!……船長も一緒に帰らせてくださーい!!」



紅蘭 「そういえば1匹も釣れてねえ」

あんまりあくあの出番無かったかな？

複数人難しいな……

色々思考して描いていきます!!

ちなむにアンケートが100票越えました！  
0期生かその他になりそうですね

まだまだアンケートは続きます

それと評価バーに色がついた!?

こんな作品に評価してくださりありがとうございます!!

何故、手料理を振る舞うことになった

お気に入りで100件越えました！

は、早いのか!?

とにかく読んでくださりありがとうございます!!

紅蘭 「と、いうわけでこのスケジュールで大丈夫ですかね？」

俺はあるホロメンのマネージャーさんとスケジュールの打合せをしている

俺はあくまでスタッフだ

マネージャーではない

でも社長には統括をいつか任せて皆の管理を頼むと言われた

まあそんな話は置いてこう

紅蘭 「……聞いてました？……あやめさん？」

あやめ 「ん？……余聞いとらんかった！」

マネ 「すみません……いつもこんな感じで……」

本当にあやめさんは聞いてないことが多い

正直嘘かと思っていた

紅蘭 「……あやめさん聞く時はしっかり聞いてくださいね……そうじゃないと後々困るのはあやめさんですよ」

あやめ 「話の内容がわからないから聞き流してる」

困ったな……

何か条件だしたりすればいいのか？

紅蘭 「そうですね……ちゃんと聞いてくれたら……3人でご飯でも行きますか」

あやめ 「ご飯!!…余、お腹空いた!」

マネ 「それならしつかり聞いてスケジュールを把握しましょう?」

あやめさんのマネージャーの一言で打合せは再開した

紅蘭 「はい…これで打合せは終了です…聞いてました?」

あやめ 「余、聞いてた余!…それより早くご飯ご飯!!」

あやめさんは目を輝かせながら近づいてきた

マネ 「すみませんこの後他のマネさんと打合せあるのでお二人でいってきて貰っていいですか?」

おいマネージャーさんそりゃないぜよ。。。。

あやめ 「なら紅蘭と行く!…それでいいよね?」

まあご飯食べに行くだけだしいいか

紅蘭 「仕方ないですね…では今回は2人で行きますが今度は3人で食べに行きましょう」

マネ 「はい…では私は失礼します」

あやめさんのマネージャーさんは「礼をし出ていった

紅蘭 「さてと…何食べに行きますか？」

あやめ 「紅蘭の手料理を食べたい！」

はい??

と、いうことでスーパーにいます

あやめ 「紅蘭の手料理♪」

紅蘭 「ハンバーグですか…まあ作れはしますがあまり期待は  
しないでくださいよ？」

あやめ 「それは大丈夫！」

何が大丈夫なのか。。。

ハンバーグの材料を探しに歩いていたら声を掛けられた

スバル 「あれあやめと紅蘭じゃん」

あやめ 「あ、スバルだ」

紅蘭 「どうもスバルさん」

スバル 「何かの買い出し？」

あやめ 「紅蘭の手料理、それに余の大好きなハンバーグ作って貰う！」

スバル 「何それ面白そうだからスバルも食べたい！」

あやめ 「許可する！」

いやなんであやめさんが許可してるのさ

まあ断る理由もないけど

紅蘭 「わかりましたから……あやめさんお菓子は駄目ですよ」

あやめ 「バ、バレタ。」

買い出しを終え事務所に戻る

あやめ 「紅蘭の家に余は行きたかった！」

スバル 「スバルも!!」

紅蘭 「そんな軽々男の家に行つてはいけませよ」

あやめ 「ミオの家には上がったの？」

何故それを。。。

スバル 「それならスバル達もいいじゃん！」

紅蘭 「ミオさんの家に上がったのはたまたまです！」

俺は足早にキッチンに行き調理を始める

その間2人はわちゃわちゃしてて微笑ましかった

これぞ生でえてえ



紅蘭 「はい、お待たせハンバーグだよ」

あやめ 「おお!!これは絶対美味しい!!」

スバル 「わかる!」

2人 「いただきます!!!」

2人はハンバーグを口にいれた

紅蘭 「どうかな?…不味いなら全然言っ  
て構わないですから  
ね」

あやめ 「旨すぎる!!」

スバル 「これ店だしていいレベル!!」

どうやら2人から好評をいただいた

紅蘭 「そうですか…また作ってほしい時  
言ってくださいね」

あやめ 「その時は紅蘭の家で!」

それは避けられないのか。。。

今回は後半のアンケート1位だった獅白ぼたんを描きます

それ以降は自分の好きなホロメンを描きます

もしこの人描いて!!というのがありましたら感想下さい  
優先はそちらになります

尚、メンヘラやヤンデレは描こうと思えば描けますが期待はしない  
ようお願いします

ちなみにアンケートは削除してますので何やねんと思うかた申し  
訳ありません

## 意外な一面

ぼたん 「すいませーん…紅蘭いますかー？」

紅蘭 「おや珍しいですねぼたんさんがこちらに来るのは」

ぼたん 「ちよつと暇だったので来ちやいました」

紅蘭 「他の方という方がいいんじゃないですか？」

ぼたん 「そんな事言わずにのんびりさせて下さいよ」

紅蘭 「まあ構いませんが……」

俺はぼたんさんにお茶を淹れて渡した

ぼたん 「誰か来るな……紅蘭隠れるから追いついて」

そう言い何故か俺のデスク下に潜り込んだ

それより誰が来るんだ？

足音しないけど

ねね 「ししろーん!!!」

勢いよくドアを開けたのは桃鈴ねねさんだった

デスク下に隠れたぼたんさんに目配りしたら頼む！と両手を合わせている

紅蘭 「ねねさん入るのは構いませんがせめてノックはしましよ  
う」

ねね 「はーい!!」

相変わらず元気がいい

ねね 「あ、それよりししろん見てない??」

紅蘭 「ぼたんさんですか?…うーん見かけていませんね…ど  
うかされました?」

ねね 「気付いたらいなかったから!」

紅蘭 「そうですか…でもこちらには来てませんよ」

ねね 「そっか!…あ、そうだ今度買い物行こ!」

紅蘭 「ねねさんですか…まあいいですがくれぐれもSNSに  
挙げないでくださいね?」

ねね 「はーい!…それじゃまた!!」

ドアを閉めししろんどこー!!と叫んで走っていった

紅蘭 「もう大丈夫ですよ」

ぼたんさんは下から出てきて突然膝の上に座った

紅蘭 「え、えつと…ぼたん…さん??」

突然のことで困惑

しかもいい匂いがすr

ええい、変な気を起こすな久崎紅蘭!!!

ぼたん 「今から買い物行きたいな」

紅蘭 「突然何言い出すんですか」

ぼたん 「ねねちゃんとは行って…私とは行かないんだ…  
へー」

あ、これ俗にゆう嫉妬ですか？

え、あのぼたんさんが？

この俺に嫉妬??

いやいや、勘違い乙男になるよ

紅蘭 「あのつかぬこと聞きますが」

ぼたん 「何？」

紅蘭 「ねねさんに嫉妬しました？」

その問いにぼたんさんはムスツとした顔をしていた

何とクールなぼたんさんでもこのような顔するのですか！

ぼたん 「紅蘭の事もっと知りたい」

紅蘭 「俺の事知っても何もありませんよ」

ぼたん 「それでも知りたい」

どうやら折れてくれないようだ

紅蘭 「分かりました、もう少しで終わりますからそれまで待つててくださいいね？」

ぼたん 「あんま待たすなよー？」

ぼたんさんは膝の上から退いた

表情や声のトーンは変わらずだが何処かしら嬉しい感じの雰囲気

をだしていた

そして一緒に買い物に行き

ぼたん 「今度何の配信しようかな……何かオススメある？」

紅蘭 「最近とある理由でゲーム始めたからなあ」

ぼたん 「へえ……どうなの？」

紅蘭 「格闘ゲームかな……それよりぼたんさんはホラゲーとかもありですよ？」

ぼたん 「何か理由ある？」

紅蘭 「ここに入る前から観てたけどホラゲーが一番しっくり来るかな？」

ぼたん 「それならホラゲーにするかな」

そんな軽く決めてええんかい

ぼたん 「いつか一緒に配信してみたいな」

紅蘭 「配信ですか……うーん…俺出たらヤバいんじゃない？  
……いくらスタッフでも俺男だし？」

下手したら炎上するだろうし会社にも被害がくる可能性はある

ぼたん 「なら公式配信で出始めればいいんじゃない？」

紅蘭 「そんなに配信出てほしいんですか？」

ぼたん 「まあ皆そう思ってるかな」

何と…

紅蘭 「検討してみるよ」

ぼたん 「絶対一緒に配信しような」

紅蘭 「そうだったらよろしくお願いしますね」

まあぼたんさんなら問題なくできそうかな??

一方ししろん探しのねねちは

ねね 「ししろーんどこー!!」



ポルカ 「ここポルカんちにいるわけないわ!!!!」

何故かポルカが合流していた

部屋を掃除するドン!!

紅蘭 「まだ半分かあ」

かなた 「反省しております。。。」

↳数時間前↳

かなた 「あ、紅蘭君」

ルーナ 「紅蘭なのら〜」

紅蘭 「おやかなたさんにルーナさんレッスン上がりですか？」

レッスン上がりのせいか2人は軽く頬を赤くしている

かなた 「そうなんだよね〜…つて汗臭くない!?!?」

紅蘭 「大丈夫ですよ汗臭くても俺には褒美なので」

ルーナ 「天音ちゃんくせえのら〜」

かなた 「紅蘭君擁護できてないからね!?!?…つてルーナ直球す  
ぎない!?!?」

相変わらずルーナさんは直球だなあ

ルーナ 「それに天音ちゃんの部屋とか汚くてくせえのら〜」

かなた 「ここでそれ言うかな!?!?」

紅蘭 「言いすぎですよルーナさん」

ルーナ 「事実なのら〜…紅蘭も行ってみたらわかるのら〜」

紅蘭 「まあ百聞は一見にしかずですからね」

かなた 「え、紅蘭君来てくれるの!?!?」

紅蘭 「いやそうとは決まったわけではないですよ?!?」

それにあまりホロメンに家に行くようになると色々困るし。

かなた 「紅蘭君…1度だけ来てほしい!!」

ほらこうなった

ルーナ 「ルーナはやめとくのらく」

ルーナさんは逃げるかのように足早に離れた

紅蘭 「じゃあ俺も失礼するよ」

かなた 「だめ！、紅蘭君は強制だから！」

右手を掴まれ止められた

紅蘭 「え、えつと…かなたさん？」

かなた 「行かないって言うなら…握りつぶしちゃうよ?！」

かなたさんは少し強く握ってきた

ミシミシゆうてますやん

紅蘭 「お、お邪魔させてもらいます。。。」

かなた 「それなら僕は準備してくね！」

ご機嫌良くスキップしながらいくかなたさん

紅蘭 「骨、ヒビ入ってない??」

くかなた宅（部屋）く

紅蘭 「何故飲みかけだらけ!？」

かなた 「味に飽きちやって」

紅蘭 「洋服、脱ぎっぱ!？」

かなた 「畳むのめんどくさくて……ってその下には僕の下着あるからだめ!!」

それはいかんいかん

紅蘭 「全く…掃除はしないとだめですよ」

かなた 「それはわかるけど…」

紅蘭 「他の方もかなたさんと同じで配信したりレッスンしたりと忙しいのですよ?」

かなた 「わかったわかったから…僕のライフはもう0だよ!!」

ちよつと言いすぎましたか

紅蘭 「それでは俺はここで帰りますね」

かなた 「ちよちよ…待つて待つて!!」

突然ドア前に立ち塞がったかなたさん

紅蘭 「どうされました?」

かなた 「僕の部屋掃除…手伝ってほしい!!」

紅蘭 「えつと…?」

かなた 「どうかお願いします!!」

土下座をされた

紅蘭 「わ、わかったから土下座なんてそんなことしないでくだ

さよ  
「さよ」

と、今に繋がるのだった

紅蘭 「今後はしつかり掃除するようお願いしますよ?」

かなた 「う、うん…」

そう言えば他のホロメンにも部屋が汚いと言われてるよな

紅蘭 「あのかなたさん…今回のことあまり他の人に言わないで  
くださいよ?」

かなた 「ごめん、僕もう眩いちゃった」

紅蘭 「え?」

俺は咄嗟に眩きアプリを起動し確認をする

天音かなた

今日は張り切って部屋掃除!!

何とスタッフさんが手伝ってくれてるよ!!  
僕の部屋が綺麗になりますように!!

おーまいがー。。。

かなた 「で、でも男性とは書いてないし大丈夫大丈夫!!」

紅蘭 「そういうことじゃなくて……」



気付いたら色々なホロメンから部屋掃除の連絡がめっちゃきてた

間が空いての投稿申し訳ありません。

何というかアイデアが浮かばなく描いては消しての繰り返しでした

アンケートももうじき締めて描こうかなと思います

アンケートにゲームーズ入れ忘れてましたのでそちらは描きます。

次は誰を描こうかなああ!!

家バレてるんだけど

紅蘭 「お、今日はこれで終わりだな」

予定がいつもより早く終えたため颯爽と帰宅して誰かの配信でも観ようと思っていた

が、待っていたかのように家前に誰かいる

いや、何で俺の家の前におんねん

やばっ、見つかったああ

やまだ 「おい！吾輩の悩みをもって表記がやまだなんだけど!?!?」

紅蘭 「んなメタイこと言うなってやまだ」

やまだ 「やっぱりこいつ嫌い!!」

俺の家の前にいたのはやまだことラプラス・ダークネスさんだ

ラプラス 「だからやまだはやめろっ!!あ、やっと戻った」

紅蘭 「全くうるさいクソガキですね」

ラプラス 「何で吾輩だけこんな態度なのかな!!」

紅蘭 「何ででしょうね」

何故かやまださ……おっとラプラスさんにはこうなってしまおうんだよな

紅蘭 「それでラプラスさんは何故俺の家の前に?……いや何で俺の家知ってるの?」

ラプラス 「フッフッフツ…吾輩は総帥だからな!」

はい？

紅蘭 「あの薬やっています？」

ラプラス 「やってねーよ!!」

息を切らしながらラプラスさんはツツコミをしてきた

ラプラス 「全く…用心棒の知り合いだから少しは多めに見てやってるが……」

紅蘭 「……用心棒……？」

いろはのことか

あ、さてはいろはの奴教えたな……

今度対決でボコってやろ

いろは 「はっ!!」

こより 「どうしたの?」

いろは 「何者かの殺気がしたでござる!!」

こより 「……こよがまともになる薬作るね」

いろは 「ドン引きしないでほしいでござる!!!」

外で話すのも申し訳ないと思ひ家にながらせた

ラプラス 「おお!……ここがお前の部屋か!」

入るなり物色し始めた

紅蘭 「物色するのはいいですが散らかさないでくださいね」

ラプラス 「吾輩子供じゃないから大丈夫!!」

フラグにしかみえねえ。。。

紅蘭 「それで…ラプラスさんはどうしてここに？」

ラプラス 「そうだ、忘れるとこだった!!…吾輩の相談を聞いてほしい!!」

紅蘭 「相談??…俺に??」

俺はいつから相談所を開いたんだ??

ラプラス 「お前って色んな人から慕われてるから相談するにうってつけなんだ!」

紅蘭 「慕われてるんですか??」

ラプラス 「自覚ないのか?」

慕われてるといふか…何といふか…

紅蘭 「まあそれは置いといて…それで相談とは??」

ラプラス 「吾輩の部下になってほしい」

紅蘭 「はい、おかえりはあちらですよー」

俺は聞くなりドアへと送り届ける

ラプラス 「即答かよ!?……ってまだ話してる最中!!」

紅蘭 「全く……何でいきなりそうなるのですか??」

ラプラス 「お前が部下になれば吾輩の秘密結社も鰻登りになるからだ!」

紅蘭 「何を根拠にですか?」

ラプラス 「用心棒よりも遥かに強く、そして幹部のように営業にも向いている……こんないい人材を見逃すわけにはいかない!!」

あ、ちゃんと評価されてる

そこはうん、素直に嬉しい

紅蘭 「そこまでの評価はありがとうございます……けど俺は皆を支えたいのでお断りします」

ラプラス 「なん……だと!？」

紅蘭 「でも時間があつたらサポートしますからそれで許してください」

ラプラス 「ぐぐぐ……仕方ない……総帥だから時には納得せねばな!!……たまには吾輩の手伝いを頼むぞー!」

紅蘭 「そこはちゃんとしますよ」

ラプラス 「そうか!...それなら早速1つ!!」

紅蘭 「家に送れというパシリはやりませんからね」

ラプラス 「なんでバレたかな!?!?!」



## 特例のマネージャー

今日はあるホロメンの世話役だ

そのマネージャーさんが体調不良で動けないとのことだから仕方がない

そして今はそのホロメンの家前にいる

まつり 「あ、本当に紅蘭君が迎えにきた」

紅蘭 「嘘かと思ったのですか？」

まつり 「マネージャーさんから連絡来たとき半信半疑だったからさ〜」

紅蘭 「そうですか……ほら事務所向かうので乗ってください  
い」

俺は後部座席のドアを開け乗るよう促す

まつり 「助手席がいい！」

紅蘭 「いやでも後部座席の方が広々と使えますよ?」

まつり 「だとしても!!」

紅蘭 「……わかりました……ちよつかいだけは出さないようにしてくださいね」

まつり 「はーい!!」

満面の笑みで助手席に座るまつりさん

紅蘭 「さてと今日も頑張りましょう」

俺はまつりさんに乗せ事務所へと向かった

〈事務所〉

メル 「え〜!?…紅蘭君がまつりちゃんのマネージャー!?」

まつり 「うん!…羨ましい〜?」

メル 「ズルイズルイ!!、メルもマネージャーになってほしい!!」

車を置きに行くためまつりさんを先に事務所に行ってもらったら早くも周知された

紅蘭 「メルさん…今回はまつりさんのマネージャーが体調を崩したので特別にですよ」

メル 「だとしてもだよ!!」

まつり 「今日だけはまつりのだー!!」

俺は物じゃないんだけどなあ

紅蘭 「ほらまつりさん…時間押してるので行きますよレッス  
ン」

まつり 「そうだった!!…よし行こう!!」

今日はやけにハイテンション

そんなに俺の付き添いがいいのか??

レッスン場に着くとそこにはフブキさんがいた

フブキ 「紅蘭君だー!!」

俺を見つけると思いつきり抱きついてきた

紅蘭 「フ、フブキさん?!?!」

まつり 「ちよ、ちよつとフブキ…離れなさいって!」

何とかまつりさんに剥がしてもらった

あー、心臓止まると思った。。

フブキ 「むう……あれ紅蘭君はどうしてここに?」

まつり 「私のマネージャーだからだよ!」

あ、フブキさんが固まった

紅蘭 「だからまつりさん…今回だけって何度言えはいいんですか??」

フブキ 「な、何だく…今回だけか」

紅蘭 「そうですよ……そういえば今回のレッスンはお二人同じ

だそうですね」

まつり 「うん!…:今度あるもんねー?」

フブキ 「しっかりいいものにしないと!!」

紅蘭 「では俺は自分の業務に戻るので時間になったらまた来ますね」

まつり 「うん!…:また後で!」

フブキ 「紅蘭君またねー!」

しばらく時間が経ちレッスン場へと着く

紅蘭 「2人ともお疲れ様です…:しっかり水分取ってくださいね」

2人 「ありがとー!」

2人は受け取りゴクゴクと飲んでいく

フブキ 「プハー!!…:いやあ今日は疲れたよ」

手で扇ぎながらフブキさんはそう言う

な、何か色っぽい。。

まつり 「ちよっとフブキのこと見すぎじゃないの?」

前に移動し俺の前に座ってジト目で見つめてくるまつりさん

こんな顔もするんだなあ

フブキ 「紅蘭君…水分ありがとうございます!…白上は着替え  
てきます!」

まつり 「あ、まつりも!!…事務所で合流で!!」

紅蘭 「あ、はい」

何か嵐のように去ったな

その後事務所で合流しまつりさんに乗せ家に送るので今日を終え  
る

これが最後の仕事だ

そういえばまつりさんって清楚担当と豪語してて下ネタバンバン言うと思っただけど普段は言わないのか??

まつり 「いや〜…今日はありがとね紅蘭君」

紅蘭 「俺こそ色んなまつりさんが知れてよかったですよ」

まつり 「そう?…あーあ紅蘭君がまつりのマネージャーだった  
らな〜」

紅蘭 「だったら??」

まつり 「毎日が楽しいしやる気に満ち溢れるって感じ!!」

何かお守り効果みたいな感じやな

紅蘭 「今のマネージャーに失礼ですよ」

まつり 「え〜…だつて〜…」

まあ遅かれ早かれ皆のマネージャーになるかもしれないけどそれは伏せておこう

紅蘭 「着きましたよ」

まつり 「え、もう?!?!?」

紅蘭 「話し込んでましたからね」

残念。つと言ってるような表情をしているな

紅蘭 「もう会えないって訳ではないのですから……ほら元気だして」

まつり 「そうだけど……そうだ!」

何か閃いたようだ

まつり 「まつりのこと……呼び捨てでタメ語で話してよ!」

このハードルの上がりかた……

あの時と同じだ!!

紅蘭 「えっと……どうしていきなり?」

まつり 「そうしてくれたら元気出るしこの後の配信頑張れる!!」

呼べば頑張ってくれる

そう、呼べば……

紅蘭 「ま、まつり……今日も……お、お疲れ……様……」

まつり 「もうハッキリ!!」



紅蘭 「あーもう!!…まつりこの後配信頑張れよ!…観ててやるからな!!」

まつり 「…!…うん!頑張るから観ててね!!バイバーイ!!」

そう言いまつりさんは家へと入っていった

紅蘭 「…はあ…これから大変になるぞ…」

俺は知っているこの後何が起きるのか…。

く夏色まつりの配信にてく

まつり 「今日なんか機嫌いいねって?…やつぱバレるかく…いや今日ね?、仲のいいスタッフさんに呼び捨てとタメ語にするようになってくれてさく」

その後の事は察してくれ。。。。

いつもと違う

紅蘭 「え、俺が配信にですか??」

Aちゃん 「うん、もう決まったことだからね」

紅蘭 「俺のいないところで……」

これは拒否権ないんだろっうなあ。。。

紅蘭 「それで誰と配信出るんですか?」

流石にホロメンと俺だけじゃ流石にね。。

Aちゃん 「0期生の皆と」

紅蘭 「ん??」

Aちゃん 「だから0期生の皆と」

紅蘭 「いやいや…0期生ですか?!?!?」

Aちゃん 「うっさ……やけにそらが配信出てほしいって言うか  
らっや」

そらさんが、

嬉しいけど他のホロメンも誘ってくるしこれって……

紅蘭 「あの……もし今回の配信評価よかったら……」

Aちゃん 「色んなホロメンと配信に出てもらおうよっ」

ですよー……。。

そして配信への打ち合わせが始まった

紅蘭 「今日はよろしくお願いします」

そら 「久崎君よろしくね！」

みこ 「おおー！紅蘭だにえー！」

星街 「……………」

ロボ子 「よろしくね〜」

AZKi 「すいちゃんどうしたの??」

各々あいさつをしてくれたがすいせ……………すいちゃんが黙った  
ままだ

みこ 「きつとお腹に悪いのを食べたんだにえ」

星街 「……………」

そら 「えつと…とりあえず始めよ??」

結局すいちゃんは口を開かず打ち合わせが始まった

少し休憩を取ることになり今は休憩中

すいちゃんは休憩になるとすぐ部屋を出ていった

みこ 「ちよつと紅蘭…すいちゃんに何かしたの？」

紅蘭 「うーん…それが俺も分からないですよね」

みこ 「あんな喋らないすいちゃんは初めてみたにえ」

紅蘭 「それは俺ですよ」

確かにこうやって話したりするのはあの日以来だ

それが原因なのか……？

A Z K i 「今はそつとしいた方がいいよ」

そら 「でもどうにかしないといけないよね」

みこ 「紅蘭に任せたにえ!!」

ロボ子 「君なら大丈夫だと僕は思うよ」

紅蘭 「わかりました……では今から2人で話してみます」

そら 「ごめんね、きつと久崎君なら大丈夫だと思うよ」

俺は皆の応援を背にすいちゃんを追って出ていった

みこ 「今回は仕方ないにえ」

そら 「私も一緒にいたいけどすいちゃんのためだもんね」

AZKi 「えっと……2人は名残惜しいの？」

ロボ子 「僕はまだそこまでかな」

一方いつもと調子が違うすいちゃん  
(すいちゃん目線)

星街 「はあ……」

今日は折角紅蘭君と久々に会って話したりできるのに上手く話しかけられない……

きつと皆に迷惑をかけてる。

これも全部…紅蘭君のせいだよ。

綺麗だなんて言うから……

星街 「……紅蘭君のバカ……」

紅蘭 「えつと……すいちゃん??」



振り向いたら紅蘭君がいた

星街 「えっと紅蘭君。その今は……」

紅蘭 「教えてくれすいちゃん……俺のせいで君を困らせてるなら俺に責任がある」

そんな真つ直ぐな瞳で言われたら君の事を。。

星街 「た、ただ緊張してただけだから……ほ、ほら打ち合わせ戻ろ??」

私は逃げるように走った

その後打ち合わせを終え各々帰っていった

紅蘭 「よし、決めた!!」

俺は今回の配信で覚悟を決めた

!!  
あんな悲しい顔をさせるのはスタッフ……いや男として情けない

どうやら

今回の配信で何かを考えてるようだ

配信参加！&思いを届け！

さあ遂に配信が始まった

今回は公式放送で0期生が集まりそこに俺がスペシャルゲストとして入る

一応公式の告知でスペシャルゲストありとは書かれていないのである

そら 「皆〜！こんそめ〜！…ときのそらだよ〜！」

AZKi 「こんあずき、AZKiです！」

ロボ子 「はろーぼ〜…ロボ子だよ〜」

みこ 「にやつはろ〜…さくらみこだにえ〜」

星街 「はーい！、彗星の如く現れたスターの原石！…アイドルVTuberの星街すいせいでーす！…すいちゃんは〜？」

みこ 「今日もちいさ〜い」

星街 「……み、こ、ち??」

流石すいちゃん

皆の前ではいつものすいちゃんだ

コメントをみると各々のあいさつのコメントを多くみえる

ちやんとかわいくも書いてあるな

そら 「今日はわざわざ公式で配信するってのは理由があつてね」

AZKi 「スペシャルゲストがいるんだよ！」

ロボ子 「僕達みーんなお世話になつてる人だね」

みこ 「そろそろ出て来て貰うにえ！」

星街 「…………ど、どうぞぞ!!」

あれ、すいちゃん台詞違うけど……

まあここはすいちゃんのために出るとしますか

紅蘭 「ど、どうも……はじめまして…ホロライブスタッフの久

崎紅蘭です！」

俺が出てくるとコメントが大いに増えた

男やん、待ってめちやイケメン

お前なら許される、誰推しなん？

と、多数のコメントが送られている

そら 「久崎君はいつつも私達のスケジュールを確認してくれてるよね！」

みこ 「ホロメン皆のを頭にいれるなんてみこじや無理だにえ」

AZKi 「まあ、無茶しすぎなところはあるよね」

紅蘭 「スタッフですからね…」

ロボ子 「それじゃあ…質問コーナーいこつか」

星街 「……………」

大丈夫かなすいちゃん……

コメントにもすいちゃん生きてる？

あれ、もしやこの紅蘭というのと……

というコメントが打たれてるのがみえる

みこ 「1番多かった質問は……推しは誰かときてるにえ」

そら 「気になるよね」

紅蘭 「俺は皆さんを推してますよ……誰かをずっとなんて出来ませんからね」

ロボ子 「それは嬉しい言葉だね」

AZKi 「すいちゃんも嬉しい？」

ここでAZKiさんが話を振ってくれた  
まじ、ナイスです!!

星街 「え?…あ、うん……う、嬉しいよ……?」

みこ 「何で疑問系なんだにえ」

星街 「う、うるせー!!」

紅蘭 「まあまあ…落ち着いて?」

その後配信は問題なく？進み約1時間くらいが経った

そら 「はい！……今日はこれで終わりになるけど……久崎君どうだったかな？」

紅蘭 「えっと……正直ホロライブの配信に出ていいのか凄く不安でしたが皆さん優しい方で不安は消えました……えっと今回だけではなく今後も出るかもしれませんのでその時はまたお邪魔させてもらいます」

ロボ子 「不安だったんだ」

AZKi 「まあその気持ちはわかるかも」

みこ 「今度みことコラボしようにえ！」

星街 「……………」

そら 「え、えっと……じゃあどこかの配信に久崎君が出る時は皆よろしくね〜！」

そらさんの締めで配信を終えた

そら 「……はい！……皆お疲れ様～…久崎君もありがとね」

紅蘭 「いえいえ…そらさんが出てほしいって懇願したから出れたんですよ」

みこ 「これから紅蘭は忙しくなるにえ」

AZKi 「しつかり休んでね？」

ロボ子 「休むことも大事だからね～」

紅蘭 「わかりました……って……あれすいちゃんは？」

気付いたらすいちゃんはもういなくなっていた

みこ 「紅蘭に何も言わずに帰るなんて流石にみこは怒ったにえ！！」

そら 「うーん…久崎君…頼める??」

紅蘭 「そうですね……追いかけてきますね……皆さん、今日はありがとうございました！」

俺は一礼しすいちゃんを追いかけた



俺は事務所を出て辺りを見渡す

紅蘭 「……………いた…」

後ろ姿からでもわかるくらいすいちゃんやんは落ち込んでいた

紅蘭 「…やつと追い付いたすいちゃん」

星街 「……………！」

すいちゃんは驚いて振り向いた

そしてすぐに悲しい顔をして

星街 「ごめん……………今は紅蘭君と話したくない……………」

すいちゃんは俺に背を向け歩きだす

紅蘭 「待って、今日は離さないよすいちゃん」

俺はすいちゃんの右手を咄嗟に掴む

星街 「紅蘭…君……」

紅蘭 「最近のすいちゃんはきつと俺のせいだと知っている……だから教えて…すいちゃん」

俺はすいちゃんの潤んでいる瞳を真っ直ぐ見つめる

何だろう……こんな表情のすいちゃんは見たことがない

星街 「……き……に……つたから……」

すいちゃんはポツリと呟いた

紅蘭 「落ち着いてすいちゃん……ゆつくりでいいから」

星街 「…君の事が……好きに……なってしまったの!!」

紅蘭 「……俺の…事が？」

星街 「気付いたら好きになって………それから君は色んな人と接してて……でもそれは仕方ないと思ってたけど……」

紅蘭 「……すいちゃん……」

星街 「変…だよね……まだ会ったばかりで…好きになるなんて……ごめんね紅蘭君…すいちゃんとは距離を取ってくれればいいか

ら」

紅蘭 「変じゃない!!」

俺の大声にすいちゃんは驚いた

紅蘭 「俺だつて…すいちゃんの事が好きだ!」

星街 「嘘つかないで!!」

紅蘭 「嘘じゃない!!」

星街 「でも…君は…皆の事を…」

紅蘭 「ホロメン皆の事を好きだよ…だからってすいちゃんだけを省くなんて俺にはできない」

星街 「そんなの調子がよすぎないかな？」

紅蘭 「そう思われるかもしれない…でも俺はすいちゃんが好きだ」

星街 「……嫉妬で狂うかもよ？」

紅蘭 「すいちゃんの嫉妬か…見てみたいかな？」

星街 「…ずっと嫉妬してたけどなく」

紅蘭 「うっ……そ、それならすいちゃんがしたいこと一つでも……」

星街 「それなら……もう決めてるよ」

紅蘭 「もう？……ちなみに何を？」

星街 「今からすいちゃんの配信に出て貰う」

ぼえ  
????

すいちゃんと配信しちゃう?!?!?

星街 「今からすいちゃんの配信に出て貰うから」

と、いうことでしたすいちゃんの家に着きました

てかこの道中手を繋いでたんですけど!?

すいちゃんは機嫌よく歩いてたけど俺の心臓はバツクバクだったよ!!

星街 「どしたの紅蘭君？」

紅蘭 「へ!?!…べべ別に緊張してないし!?!」

星街 「へへ紅蘭君緊張してるんだ」

何だあの悪いにやけ顔は!!

可愛いけど!!

俺達はギヤイギヤイ言いながらすいちちゃんの家へと入った

姉街 「おかえり〜…ってさつき配信で出てた紅蘭君じゃん!」

紅蘭 「は、はじめまして…」

姉街 「そんな畏まらなくていいよ…もしかして恋仲だったり〜?」

紅蘭 「え、えっと………」

星街 「好きって言うてくれたんだから付き合ってるでしょ?」

紅蘭 「は、はい………」

星街 「私の部屋で待っててね〜」

姉街 「すいちちゃんの部屋は奥の部屋ね」

と、いうことでinすいちゃんの部屋

所謂女子部屋です

紅蘭 「落ち着け落ち着け落ち着け」

こういう時こそ円周率を。。

星街 「紅蘭君おまたせ〜って…すごいブツブツ唱えてる!?!」

紅蘭 「すまない、落ち着くためにな。。」

星街 「あ、そうそう…この後ゲリラ配信するって事で眩くんだけど紅蘭君の事載せていいかな?」

紅蘭 「あー…いいけど流石に付き合ったとかを言うのはやめといた方がいいぞ?」

星街 「うーん…でも…」

紅蘭 「すいちゃんの活動にも影響が及ぶし…」

星街 「うーん…紅蘭君がそう言うなら…」

何とか理解してくれた。

ちなみにすいちゃんはこう呟いていた

星街すいせい

今日この後ゲリラ配信するよー！

何と紅蘭君と一緒に！！

皆よかったら来てね！！

この呟きに多数のホロメンが反応していた

さくらみこ

すいちゃんだけずるいにえ！！！！

絶対今度みこの配信に出て貰う！！



白上フブキ

今度白上の耐久配信に出てもーらお!!

宝鐘マリン

船長はいつまでも紅蘭君を待っております

いや何が待っておりますだ

今後体もつかなあ

星街 「やっぱり皆から好まれてるね」

紅蘭 「ま、まあ…それは嬉しいことだけど…」

星街 「でも今は私だけの紅蘭君だからね？」

ぐはっ。。

吐血しそうだったぜ。。

それにしてもすいちゃんの距離が近いんよ

星街 「?…?…どうしたの紅蘭君?」

うん、当たり前のように真横なんだよね

配信中耐えられるかな。。。

そして配信が始まった

内容は凸待ち

いやいや絶対誰かくるよ?

あんなにすいちゃんの眩きに反応してたし

星街 「さて…ゲリラ配信で凸待ち…誰がくると思う?」

紅蘭 「もう誰か入ってるよ」

星街 「え?」

みこ 「こらあ!!すいちゃん!!」

最初にきたのは予想通りみこさんだ

星街 「げっ、みこちじゃん」

みこ 「げっ…じゃないにえ!!」

紅蘭 「まあまあ落ち着いて…」

星街 「ねえねえみこち」

みこ 「なんだにえ?今のみこは怒ってるからにえ!!」

星街 「バチコーン☆」

みこ 「ふっざけ」

すいちゃんはみこさんが言い出す前に通話をきった

紅蘭 「え、えつと……大丈夫かな??」

次に来たのはトワさんだった

トワ 「こんやっぴ〜」

星街 「おお!…トワじゃん!」

トワ 「紅蘭君と配信とかズルすぎですよ!」

紅蘭 「たまたまですよ…ね、すいせいさん?」

星街 「すいちゃんって…呼んでくれないの?」

ムスツと頬を膨らませ睨んでくる

紅蘭 「あの、えと…す、すい…ちゃん…」

星街 「はーい♪」

トワ 「何てえてえみたいなことしてんだよ!!」

その後沢山のホロメンがきてくださり最後に来たのは

いろは 「遂に風真でござる!」

紅蘭 「お、いろはが来たか」

いろは 「蘭殿に伝えたいことがある！せいせい先輩の凸待ちに来たのでござる！」

星街 「紅蘭君に??」

なーんか嫌な予感するぞ

いろは 「今度、風真の配信でどっちの剣術が強いかな勝負するの  
でござる！」

紅蘭 「却下以上…ばいばーい」

俺はくい気味に通話を切った

星街 「よ、よかったの？」

紅蘭 「大丈夫大丈夫…それより締めなくていいの？」

星街 「あ!…そうだった!」

すいちゃんは少し話配信を切った

星街 「今日はありがとね紅蘭君」

紅蘭 「こちらこそ…楽しかったよ」

俺は荷物を持ち玄関のドア前に立つ

星街 「そ、その…またすいちゃんと配信って……」

紅蘭 「すいちゃんがよければいいですよ」

その言葉を聞きすいちゃんはとても微笑んだ

この笑顔、絶対守らないと。。。

紅蘭 「じゃあ…帰るね？」

星街 「あ、待って紅蘭君、忘れ物！」

忘れ物??

そんなのあつただらうか？

俺は振り向いたが頬に暖かい感触がくる

そう、すいちゃんは俺の右頬にキスをした

星街 「…ま、また今度……ね？」

紅蘭 「あ、ああ……」

可愛すぎだろ、すいちゃん、

## お料理コーナー

紅蘭 「……………はあ……………」

仕事最中に何度目かのため息がでる

すいちちゃんの配信に参戦してから色んなホロメンから配信に出てほしいと多数殺到きてるのである

嬉しい事だけ……………

紅蘭 「……………はあ……………」

またもやため息が漏れる

ちよこ 「あら紅蘭様…ため息何かしてどうしたんですか？」

紅蘭 「ちよこさん……………」



横から顔を出してきたのは2期生の癒月ちよこさんだ

ちよこ 「どこか体調が悪いのならちよこが診ますよ?」

紅蘭 「だ、大丈夫大丈夫…体調を崩してるわけではないよ!」

ちよこさんが体を寄せてきてとてもいい匂いがする

ちよこ 「うーん…でも紅蘭様…今日沢山ため息してますよね?」

紅蘭 「た、たまたまだよ!……って何でそんなの知ってるのさ!」

俺、ここからまだ出てもないのに!

ちよこ 「何でって…ちよこがここに入っても気付いてないだけでしょ?」

紅蘭 「…い、いつから入ってたのですか?」

いや、ほんと気付かなかったよ!?

ちよこ 「んーと…2時間前くらいからかな」

紅蘭 「そ、そんな前から…気付かなくてすみません。」

ちよこ 「紅蘭様の色んな一面が見れてたのでちよこは気にして

ませんよ〜」

でもとちよこさんが言葉を繋げる

ちよこ 「休むことも大事なので…今日ちよこの食事を振る舞いますよ?」

紅蘭 「え、いいのですか?」

ちよこ 「紅蘭様に食べてほしいので…それで配信に出てほしくて…」

なるほど…でもちよこさんのあの料理は食べてみたいし断る理由はないか

紅蘭 「いいですよ…折角ちよこさんにお誘いして下さったので」

ちよこ 「と、いうことで今日のお客さんは皆に愛されてる紅蘭様です」

紅蘭 「ど、どうも……久崎紅蘭です……」

ちよこ 「ではちよこは作ってきますので……紅蘭様はお待ちくださいね」

紅蘭 「は、はい……」

ちよこさんはキッチンに行った

にしても綺麗な部屋だ

こうやってホロメンの家上がるのはミオさん以来かな？

紅蘭 「んーと……コメント見えますが……紅蘭さんは誰を推しますか……ですか」

ちよこ 「あ、それちよこ気になる〜！」

料理をしてるちよこさんからも声がする

紅蘭 「私はホロメンの皆さんを推してますよ……スタッフになる前は皆さんの配信をみて元気を貰ってましたので」

ちよこ 「すいちゃんじゃないんですか？」

紅蘭 「ぜ、前回出たからとそういう訳では……」

ん？…何か通知きたな

すいちちゃん

私の事好きってのは嘘なのかな  
今からそつちに行くから

や、ヤバイヤバイ!!

ちよこさんの家に来ちゃう!!

ちよこ 「…?…?…紅蘭様どうかしました？」

紅蘭 「お、お手洗い借りるね!!」

俺は足早に部屋を出ていった

納得いく返事しないと……

今度その…お出かけどうかな？

すいちゃんが行きたいとどこどこでもいいよ？

頼む、これで何とか……

すいちゃん

しょうがないなあ

くれぐれもすいちゃんへの気遣いを忘れないように！

何とかなった……

ちよこ 「紅蘭様く…料理出来ましたよ」

ちよこさんの料理が出来たみたいだ

ちよこ 「じゃーん…ちよこ特製のシチューですよ」

紅蘭 「おお!!…皆さんも映像でわかると思いますがこれは美味しいですよ!」

俺は一口食べてみる

紅蘭 「う、美味すぎる…ちよこさんは本当に料理が上手ですね」

ちよこ 「皆く…紅蘭様に褒められました」

紅蘭 「スプーンが止まりませんよ」

俺はどんどん口にいられていく

ちよこ 「でも紅蘭様も料理上手だと聞きましたよ?」

紅蘭 「…んんっ?!?!?…ふう…え、えと誰からかな?」

いやもう心当たりあるぞ

ちよこ 「あやめ様ですよ」

やっぱり。

ちよこ 「今度お礼として紅蘭様の手料理食べてみたいなく」

紅蘭 「そう…ですね…わかりました…今度作ってみますよ」

これくらい、うんいいいな

そして料理配信を終えた

紅蘭 「ちよこさん今日はありがとうございます…料理ご馳走になって…」

ちよこ 「どういたしまして…それで紅蘭様…疲れは取れました？」

そうだ…俺のために誘ってくれたんだよな

紅蘭 「お陰さまで疲れは取れたよ！…ちよこさんのおかげです  
ね」

ちよこ 「それならよかったです…これからもちよこの事よろしく  
お願いしますね〜♪」

紅蘭 「こちらこそ…では俺は帰りますね」

そうだ…後ですいちゃんに連絡しないとな…



## 晩酌配信

紅蘭 「晩酌配信に出てほしい？」

突然電話を掛けてきた相手はそう言ってきた

正直配信に出るのはいいが晩酌配信は危険な感じがする

だってお酒だよ?!?!?

紅蘭 「あの…通話繋げての配信はだめですか？」

それなら被害は多分起きない!!

電話相手は渋々了承してくれた

紅蘭 「……晩酌かあ……帰りに色々買っておくか……」

ラミィ 「こんらみく…今日は晩酌配信にゲスト呼んでるよー  
！」

紅蘭 「はじめましての方ははじめまして……久崎紅蘭です」

晩酌配信に誘ってきたのはラミィさんだった

ラミィ 「今回は通話での配信で…隣に紅蘭君いないんだよね」

紅蘭 「酔うと危ないですからね」

これは理解してほしいよ!!

ラミィ 「それで紅蘭君は何を飲むんですか？」

紅蘭 「今日買ってきたのは…ワインですね」

ラミィ 「ワインとはまた大人のお酒を。」

紅蘭 「お酒はまず大人の飲み物ですから変わりませんよ？」

ラミィ 「うーん……まあそれよりかんぱーい！」

紅蘭 「はい、乾杯」

さて、この配信どうなるのやら。。。

ラミイ 「つてことなんだよ！……わかるかな紅蘭くん!!」

はい、ラミイさんはいつも通り酔っております

紅蘭 「わかりましたから…もう酔ってすよね？」

ラミイ 「ラミイはよつれません!!」

うーん、ずつとこの調子なんだよなあ

ラミイ 「雪民の皆々今からラミイに聞きたい事何でも答えるよ〜」

果たして大丈夫なのだろうか

ラミイ 「んーと……じゃあこの質問にするー！」

紅蘭 「決まったんですね……それで質問内容は？」

ラミイ 「紅蘭さんの事をどう思ってますかだって！」

紅蘭 「えつとその質問答えるの？……他の質問にした方が……」

ラミイ 「紅蘭君の事は大好きだよー！」

うん、この配信オワタ

コメントには紅蘭、返事しないと

大人気紅蘭羨ましい

ホロメンに愛されてるとかハーレムやん

勝ち組ええなあ

と、色々コメントされている

ラミィ 「むう……紅蘭君…ラミィへの返事はないんですかー  
!!」

紅蘭 「え、えっと……」

どうする、どう返事をすれば正解なんだ!?

この前はちよこさんの時すいちゃんがヤバかったし  
下手に好きと返答したらまたすいちゃんに……

ど、どうすれば!!

ラミィ 「紅蘭君ー?」

紅蘭 「……………」

沈黙をすることにした

某アニメで沈黙は正解と言っていた!!

これにより寝落ちしたとなれば避けれる!

ラミイさんには申し訳ないけど……

ラミイ 「あれ紅蘭君…寝ちやったのかな?」

頼む……

ラミイ 「ラミイの紅蘭君への気持ちは本当なのに……」

ヤバイヤバイ、

声が泣きそうになってる。。

ラミイ 「紅蘭君のバカバカバカバカー!!!……もう知らない!!」

ラミイさんは通話を切った

俺はミュートにしていた配信の音量をあげる

ラミィ 「雪民の皆……今度紅蘭君連れてくるから……許してね！」

そうして晩酌配信は終わった

～翌日～

ラミィ 「うーん……飲み過ぎた……え、何かすいちちゃんから連絡きてる」

すいちゃん

紅蘭君はすいちゃんと付き合ってるからあんなこと言わないでね

ラミィ 「……飲み過ぎて記憶ない……」



遂に俺の家に。。。

フレア 「お疲れ様ですー！」

元気良く扉を開けてきたのは

3期生のハーフェルフ不知火フレアさんだ

紅蘭 「お疲れ様ですフレアさん」

ちなみに俺は仕事を終えフレアさんの事を待っていた

約束してしまったからな

↳レッスン前↳

フレア 「あ、紅蘭さん！」

紅蘭 「ん？…フレアさんですか…今日はレッスンの日でしたね」

フレア 「はい！…それでもしよかつたらレッスン後ちよつと付き合つてほしいんですけど…」

紅蘭 「レッスン後ですか？…俺はいいですけど…フレアさん疲れたりしてませんか？」

フレア 「それは大丈夫！…じゃあまた後でね！」

と、こんな感じに約束してしまったんだよな

紅蘭 「それでフレアさん…今からどちらに？」

フレア 「紅蘭さんの家！」

紅蘭 「紅蘭さんの家？」

フレア 「うん！……だめ……かな？」

紅蘭 「そんな安易に男の家が上がっちゃだめですよ」

変な噂がたつてしまう!!

フレア 「すいちゃんとは付き合ってるの？」

うぐっ。。

すいちゃんもうバレてまっせ。。

フレア 「へっ……ここが紅蘭さんの家か」

結局断れず連れてきてしまいました

フレアさんは家にかかるなり物色をし始めた

紅蘭 「……何してるんですか？」

フレア 「紅蘭さんって何か集めてたりしてるかなって……  
あ、ゲームするんですね！」

紅蘭 「まあ人並みには……」

そういえば最近忙しくてやってなかったな  
フブキとやって以来してないか??

フレア 「じゃあ……このパーティーゲームやりましょ！」

フレアさんが出したのは皆大好きマ○オパーティー

紅蘭 「いいですよ」

フレア 「ちなみに……負けの方は罰ゲームで！」

これは負けられない戦いだ

俺が負けたら嫌な予感しかないからな

そうしてコングは鳴った

紅蘭 「だー!!…今のラグ!!」

フレア 「ふっふーん…今は紅蘭さんが遅いだけでーす」

紅蘭 「残り2マス……………何で1だよ!!」

フレア 「紅蘭さん引き強いですね…w w w」

結果は、

フレア 「はい、紅蘭さん罰ゲーム!!」

フレアさんの圧勝でした

俺は最下位

紅蘭 「変なのはやめてくださいね」

フレア 「大丈夫大丈夫〜……そうだなな〜」

フレアさんはニヤニヤしながらこっちを見ている

フレア 「じゃあ……フレアって今後呼ぶのとまた一緒にゲームしよう!」

紅蘭 「呼び捨て……ですか……」

一緒にゲームをするのは構わない

が、呼び捨ては中々なあ……

フレア 「だめ……かな……?」

ここは腹をくくるしかない!!

紅蘭 「……フ、フレ……ア……」

フレア 「……!……!……しっかり呼んでほしいなく」

紅蘭 「……フレア……ここ、これでいいですか!!」

フレア 「それでよろしい〜!」

流石にフレア1人で帰すのは危ないため家付近まで送ってきた

フレア 「今日はありがとね紅蘭さん」

紅蘭 「……俺がフレアって呼んでるならさ……そっちも紅蘭って呼ばないのか?」

フレア 「へっ!?……え、えつと……」

フレアは驚き目をそらしたりし始めた

フレア 「紅蘭……ま、またね!!」

紅蘭 「ま、またね……っでもう行っちゃった」

フレアはすぐに入っていった

俺なんか悪いことした??

フレア 「突然名前呼びなんて恥ずかしいよ。。。」



## 悪魔的な事

紅蘭 「さてこの異様にやばーいドリンクをどう処理するか……」

俺の前にはこよりさんから強制的に渡されたドリンク

その名も

紅蘭 「飲んだ人は好きな人にデレデレしちゃう惚れドリンク」

なんちゆうもん渡してくれるんですかね

紅蘭 「まあ今日は事務所閉めるし置いとくか」

持って帰ればよかったと今に思う

俺は事務所を出て特に予定もないため帰宅

紅蘭 「今日は配信でも観ようかな」

俺は早速パソコンを起動する

が、携帯が鳴り誰かから電話がきた

携帯を取り画面に表示されてたのは

紅蘭 「トワさんから？」

そういえば今日配信予定だったな  
配信に出てほしいとかかな？

紅蘭 『もしもし…トワさん？』

トワ 『ハア…ハア…』

トワさんからは返事がなく息遣いがえつ r ……ごほん……

紅蘭 『えつとトワさん…体調が悪いのですか？』

トワ 『ねえ…紅蘭君…今…から…会える??』

こ、このトワさんおかしい!!

いやその表現は失礼か

紅蘭 『会えますが…トワさん少ししたら配信予定ですよね  
?』

トワ 『紅蘭君に会いたいから…なしにした…』

うん、もう会う気満々だねトワさん!!

紅蘭 『……わかりました…ではどこに集まりますか?』

トワ 『トワの家に来てほしい……だめ………かな?』

紅蘭 『すぐいく、待っててトワさん』

あんな誘いかたされたら断れないでしょ!!

俺はすぐ準備をし家を出た

紅蘭 「……か……トワさん大丈夫かな……」

俺はトワさんの家に着きインターホンを押す

そしてドアが開きトワさんが出迎えてくれた

強烈なハグで

紅蘭 「ト、トワさん?!?!?」

トワ 「やっと紅蘭君に会えた!」

トワさんってこんな積極的なのか…?

紅蘭 「ど、どうしたのさ……突然……」

トワ 「トワ……紅蘭君の事が好きで……その……」

はい………?

トワさんが俺が好き………?

あの、トワさんが……？

トワ 「ねえ紅蘭君聞いてる？」

トワさんの顔が目の前に

ち、近いのである。。。

トワ 「紅蘭君の瞳……こんな感じなんだ」

トワさんは俺の頬を触ったりしてくる

誘ってますね!!

でも……は我慢……

俺にはすいちゃんがいるんだ

こんなのバレたら。。。

トワ 「ねえ…………トワと……………」

唇が触れるくらいトワさんはさらに近づき

悪魔的な事………しよ？

俺はその時理性が切れました

すまねえすいちゃん。。

もうどうにでもなれ。。

そう悟って受け入れようとした瞬間



トワ 「な、ななななななな…近いよ紅蘭君!!」

紅蘭 「トワさん……………ボケハアアア!!」

俺は突然トワさんに殴り飛ばされ意識飛びました

こより 「ドリンク効果は2時間後に無くなるよ!」

これぞずのー!!

紅蘭 「この腫れはすぐには引かないか。」

どうも、この前トワさんに殴り飛ばされた紅蘭です

目覚めたらトワさんが泣きながら抱きついてきたのは秘密ね

事の発端はあのあぶない薬を作った人が悪いんだから

まあ、しっかり処理しなかった俺も悪いけどね

でもトワさんと話したけど俺への気持ちは本当のようだ

すいちゃんに話はしっかりしないとイケないよな。。

こより 「何でこよは縛られてるんですか！」

紅蘭 「あんなの提供したせいです」

ちなみに隣にはトワさんがいる

こより 「こよは悪くないですー!!」

紅蘭 「開き直るんじゃないやありません」

全くこの頭ピンクココロヨーテが

こより 「今こよのことバカにしてみましたよねー？」

トワ 「も、もう紅蘭君いいんじゃないかな？」

紅蘭 「だめですよトワさん、甘やかしたらいつまたやらかすかわかりませんから」

トワ 「まあ確かに、」

こより 「こよの信頼そんなにないの!?!?」

こより 「あ、あのく、」

拘束して少ししたらこよりさんはもじもじし始めた

ちなみにトワさんは予定があるため帰宅した

紅蘭 「何ですか?反省したのですか?」

こより 「あ、あの…お手洗いに、」

紅蘭 「そうですか、ならそのまま我慢ですね」

こより 「ええ?!?!?紅蘭君ってそんな鬼畜野郎なの!!」

紅蘭 「何ですか鬼畜野郎って、まあ冗談ですよトイレ付近までは送りますのでそこからはご自分で」

こより 「うう、紅蘭君ってこよの事嫌いなのかな、」

そしてこよりさんは用を足しに行った

紅蘭 「もう懲りたかな、そろそろ許してやってみるか」

こより 「お待たせしました〜」

紅蘭 「やっとですか、って何で拘束が解けてるんですか！」

こより 「こよの頭脳なら監視がなければ余裕なんですよーだ  
！」

こよりさんは怪しい試験管を手にとってジリジリ近づいてくる

紅蘭 「え、えつと、こより、さん？」

こより 「覚悟紅蘭君!!」

俺はこよりさんに何かを飲まされた

紅蘭 「……何も起きないぞ？」

こより 「ふっふっふっ……そろそろ効果が出るころ！」

……効果??

紅蘭 「……うっ!？」

突然ドクンと身体の細胞が反応し始めた

こより 「さあこよの天才的頭脳で作られた成果を見せてー!!」

紅蘭 「やめろおおおお!!!」

ボフィンと身体から煙が出た

紅蘭 「ケホケホツ……あれ何も変化……ない??」

こより 「それなら……はい鏡で自分見てみなよ」

こよりさんに鏡を渡され自分を見る

紅蘭 「……は!？」

そこに写っていたのは……

紅蘭 「ケモミミ……?」

こより 「そう!……紅蘭君もこれでケモミミの仲間です!」

おいおいおいおい

これ非常にやばいんじゃない、

こより 「嬉しすぎて言葉がでない感じですか？」

紅蘭 「その逆!!…何してくれるんだよ、」

こんな姿を見られたら、

運命とはイタズラだ

誰かがこの部屋に入ってきた

フブキ 「紅蘭君いますかー?…:…つてえええ?!?!?」

ミオ 「ちよつとフブキ!…突然大声出さない…:…:…え?」

紅蘭 「ど、どう…:…も…:…」

こより 「あ!…:先輩方みてみてー!…:こよの薬で紅蘭君にケモ  
ミミが生えました!」



フブミオ 「……………」

2人は言葉を発さずに倒れた

紅蘭 「フブキ、ミオ?!?!」

紅蘭 「それで、いつ治るの?」

こより 「こよ、全然わかんない!」

俺のケモミミ生活は続くようです。。。

## ケモ耳集合!?!?

紅蘭 「……まだ消えないのか、」

ミオ 「ケモ耳可愛いよ?」

フブキ 「紅蘭君のケモ耳……」

フブキに関して はめちや連写して撮ってるし、

ころね 「おおー!…本当に耳生えてる〜!」

おかゆ 「僕らと同じだね〜」

こより 「こよの天才的頭脳のおかげです!」

紅蘭 「こよりさんは黙ってて」

こより 「相変わらずこよに対して当たり強い!!」

そういえばケモ耳の人が来てるような、

ぼたん 「お、本当に生えてんじゃん」

ポルカ 「え、まじやん!!」

……おい、これケモ耳集合するやつか

そして今はフブキが息遣いが荒く俺をみている

フブキ 「ねえ、尻尾は生えないの？」

紅蘭 「何を求めてるんだよ、」

フブキ 「可愛すぎる紅蘭君を白上は要求します」

紅蘭 「……こ、こんこんきーつね？」

俺はフブキみたいに指できつねを作りやってみた

フブキ 「……………」

またフブキは倒れました

ミオ 「紅蘭君……ケモ耳触ったらどんな感じ??」

ミオは気になってすぐ触ってきた

紅蘭 「……ひやつ……だ、だめ………」

ミオ 「……………」

あれ、ミオも倒れちゃった、

紅蘭 「ふう………一体あの2人はどうしたのやら、」

俺は倒れた2人を運び終え戻ってきた

おかゆ 「まあ気持ちはわかるかな」

ころね 「だってあの2人は紅蘭君の事好きだもんね」

紅蘭 「……え？」

おかゆ 「気づいてなかったんだ」

ころね 「紅蘭君って鈍感だね」

フブキとミオが俺の事を好きだと??

最近すいちゃんに告白されてトワさんの気持ちも本当だったし、

俺モテ期到来!?!?

って、そんなこと言ってる場合じゃない

紅蘭 「一体俺のどこが、」

ぼたん 「うーん……やっぱり優しいからだと思うかな」

ポルカ 「ポルカもそう思う！」

こより 「えっ、紅蘭君は優しくくないですよ」

紅蘭 「こよりさんは例外ですね」

こより 「酷い!!!」

ポルカ 「話聞いたけど紅蘭は悪くないよな」

ぼたん 「そうそう」

紅蘭 「やっぱりそう思いますよね」

こより 「こよの味方は誰もいないんだね！……それなら今度や  
バイの飲ますんだから！」

こよりさんは叫んで出ていった

しばらくこよりさんと関わるのは避けておこう

紅蘭 「ぼたんさんとポルカさんは今日の事は周りに言うのはやめてほしいのですが、」

ぼたん 「あー……その事なんだけどさ」

ポルカ 「ポルカ達、フブキ先輩の眩きみて来ちやつたんよね」

フブキの眩き、？

俺はすぐにアプリを立ち上げ確認をする

白上フブキ

私の激推しからケモ耳生えてて尊い、

うん、これやっばいね

身の危険を案じました

ぼたん 「あ、今度一緒に配信しついでですけど」

ポルカ 「ポルカもー！」

紅蘭 「……いいですよ……5期生で集まるのもいいですね」

ぼたん 「じゃあそれで行きますか……それじゃ帰りまーす」

ポルカ 「じゃ、紅蘭……お疲れ様でーす！」

2人は出ていった

そういえばおかこころも気づいたら帰ってたな

帰宅準備をしていたらこちらに向かってくる足音がした



これはケモ耳のおかげなのか、？

そしてドアを開け入ってきたのは、

星街 「紅蘭君!!……大丈夫………ブツ………」

紅蘭 「すいちゃん  
!?!?!?  
」

すいちゃんは吐血して何故か倒れてしまった

→ キャラ崩壊すまない

ペ「これぞペ「の計画通り、……」

久々にのんびりと。

今はのんびりとカフェタイム

そこに声をかけてきたのは

A Z K i 「あ、久崎君だ」

紅蘭 「ん?…A Z K iさんですか奇遇ですね」

0期生のA Z K iさんだ

そういやA Z K iさんと話すのはあの配信以来だったな

A Z K i 「カフェ行こうと思ってね…相席いいかな?」

紅蘭 「構いませんよ…えっと…何飲まれますか?」

A Z K iさんは着ていたコートを椅子に掛けて反対の席に座った

A Z K i 「久崎君と同じでいいよ」

紅蘭 「そうですか…では…」

俺は店員を呼び俺と同じホットコーヒーを頼んだ

A Z K i 「そういえば…最近忙しかったみたいだね」

紅蘭 「忙しい…：まあ…治まりましたがケモ耳が生えてたのでね。。。」

そう、やっと今日無くなったのだ

多数ホロメンの待受が俺らしいと噂が流れたりしてるし。。

A Z K i 「見たかったけどタイミング逃したな」

紅蘭 「こっちは恥ずかしいくらいですよ。。。」

A Z K i 「たまにはいいんじゃないの？」

紅蘭 「2度とごめんです！」

色々と話していたら注文のホットコーヒーが来た

紅蘭 「とりあえず頂くとしますか」

A Z K i 「うん、そうだね…」

俺とA Z K iさんはホットコーヒーを口にしながら色々雑談をした

A Z K i 「やっぱりすいちゃんという関係なんだね」

紅蘭 「は、はい……あ、でも外部には公表だけは……」

A Z K i 「大丈夫大丈夫……流石にそんなことしたらすいちゃんも久崎君も困るからね」

話がわかる人でよかった。

A Z K i 「でも何か羨ましいなあ」

紅蘭 「……羨ましい……ですか……？」

A Z K i 「うん……妬むくらいに……ね……」

紅蘭 「そ、そんなにですか!？」

そんな事した記憶ないのだが、

A Z K i 「私ももっとその……」

紅蘭 「……その……？」

AZKi 「久崎君と…仲良くなりたいな……つて……」

……え？

AZKi 「だ、黙られると…困るなあ……」

紅蘭 「あ、そ、その……十分仲良く接してると思うんですけど……」

AZKi 「ふーん……すいちゃんと同じくらい？」

紅蘭 「…そ、それは……」

どうすればいい……

何て答えたら正解なんだ……？

A Z K i 「…って…冗談だよ…真剣に考えすぎだよ久崎君」

A Z K i さんは笑いながらそう言ってきた

紅蘭 「…そ、そうなん…ですか？」

A Z K i 「からかってみただけだよ…もう本気だと思った？」

紅蘭 「ま、まあ……」

本当に冗談なのか……??

俺達は会計をし店の外に出た

A Z K i 「ご馳走さまでした…久崎君」

紅蘭 「これくらい当たり前の事ですよ」

A Z K i 「あ、そうだ……これから紅蘭君って呼んでいいかな  
……？」

紅蘭 「構いませんよ……」

A Z K i 「じゃあ……紅蘭君……今日はありがとね！」

A Z K i さんに呼ばれると新鮮だな

紅蘭 「では……また……カフェで飲みましょうね」

A Z K i 「うん！……また事務所で！」

そうして俺達は解散した

今日はいつもより平和だった……気がする……



.....  
「AZKi  
」

「.....ふう.....すいちゃん見かけて目が怖かったなあ

ぽ、ぽえぽえ〜

さて、今は厄介な人に絡まれました

誰か助けてくれい

沙花又 「ぽえぽえぽえ〜」

紅蘭 「……………」

沙花又 「ぽえぽえぽえ〜」

紅蘭 「……………」

沙花又 「ぽえぽえ……………」

紅蘭 「1つ足りないぞシャチ」

シャチ 「やっと反応してくれたって……………シャチになってる!!」

紅蘭 「問題ないだろ」

シャチ 「大有り!……………何かh o l o xに対して扱い雑すぎない

？…つて早く戻して！」

紅蘭 「問題ないだろ」

沙花又 「今度は問題ないだろbotになってる……」

紅蘭 「問題ないだろ？」

沙花又 「ちよつと変えてきたし！」

紅蘭 「喧しいなあ……おつと心の声が……」

沙花又 「あーもう！…ほんつと嫌い!!」

紅蘭 「つていうのは置いといて何用ですか？」

沙花又 「ほえほえほえく」

紅蘭 「ぶん殴りますよ？」

沙花又 「これが沙花又が受けた気持ちですよーだ！」

紅蘭 「はいはい……それで本当に用事はあるのですか？」

沙花又 「あるある！」

なーんか嫌な予感するな

いやそれで言うつとフラグが。。。

沙花又 「沙花又の配信に出てほしいんだけどさ」

紅蘭 「……掃除とかならお断りですよ？」

沙花又 「そこまで汚くないし！」

紅蘭 「そうですか……それならいいですが……」

沙花又 「それならいいって言ったね！」

紅蘭 「お、おう……」

沙花又 「じゃ、沙花又の家に来てね！」

俺に住所を送り出ていった

これ断った方がよかったような。。。

俺は少々渡された住所へと着いた

沙花又 「あ、きたきた！」

紅蘭 「全く……男性を安易に上げるのはいけないからな？」

沙花又 「紅蘭君は特別って事でほらほら上がって〜！」

紅蘭 「はいはい……」

一応警戒だけは怠らないようにしよう。

沙花又 「ここが沙花又の部屋です！」

紅蘭 「お、おう……」

沙花又 「思ったより反応薄！」

紅蘭 「何だ変な反応してほしかったか？」

沙花又 「それはそれで嫌かな！」

紅蘭 「つたく……それで配信は何すんだ？」

沙花又 「それは沙花又とお風呂配信するの！」

紅蘭 「……は？」

沙花又 「だから沙花又とお風呂配信！」

紅蘭 「どこで？誰と？いつから？」

沙花又 「沙花又の家で、沙花又と、今から！」

炎上越えて、犯罪になっちゃうわ!!

紅蘭 「んなもん無理に決まっつとるだろ!？」

沙花又 「え〜?…男にとってはご褒美じゃん」

紅蘭 「だとしてもなあ……………流石に無理だぞ……………俺の命なくなる」

沙花又 「やだやだー!…沙花又は一緒に入りたいの！」

紅蘭 「無理なものは無理！……まず俺達そういう関係じゃない  
だろ！」

沙花又 「ならなればいいじゃん……」

………はい??

沙花又 「ほら捕まえた♪」

クロエさんは俺に抱きつきそのまま持ち上げた

紅蘭 「降ろせ降ろせ！」

沙花又 「そんなに沙花又と入るの嫌？」

紅蘭 「嫌……ではないが……せめて配信じゃないなら……」

沙花又 「……！……もうそれならそうするの〜！」

あ、選択ミスった……。

ちなみに水着だった



取り残されたのは

あくあ 「あ、あの……………」

紅蘭 「ん？…あくあさんですか…お疲れ様です」

あくあ 「……………スーツ……………はい……………」

俺の作業室に入ってきたのは2期生の湊あくあさんだった

あれ、何で来たんだ??

紅蘭 「あのあくあさん……………部屋間違えてたりしてませんか？」

あくあさんはぎこちなく顔を横に振り

あくあ 「……………事務所…だ、誰もいなくて……………」

紅蘭 「あれ……………そうでしたっけ……………」

俺は時間を確認すると……………

0時を過ぎていた

紅蘭 「……あれ？」

見間違いだろ……うんうん……

紅蘭 「……今って……もう日を跨いでます……？」

俺の言葉にあくあさんはゆっくりと頷いた

紅蘭 「集中しすぎた!!」

まさかそんなに時間が経っていたなんて。

アプリ開いたらA先輩から早く帰りなよと連絡きてたし。

紅蘭 「……あれ……あくあさんは何でまだ事務所に……？」

「そういえば今日はレッスンのみ……19時頃には終わって上がってるはず」

あくあ 「か、仮眠……して……まし……て……起きたら……真っ暗で怖くて……」

オドオドしながらあくあさんは話してくれた

紅蘭 「なるほど……帰りは……？」

あくあ 「……………」

あくあさんは突然涙目になった

紅蘭 「も、勿論送るから……安心して？」

あくあ 「ほ、本当ですか？」

紅蘭 「はい……こんな真夜中にあくあさんを帰すのは危ないですからね」

あくあ 「ハ、ハイ………そ、その……紅蘭……君……は……」

紅蘭 「俺ですか？……俺は恥ずかしながら仕事に集中しててこの様ですよ」

まあそのおかげであくあさんとこうして話せれるし良しとするか

あくあさんは何かを決心したのか

ゆっくりと俺の席に近づいてきて隣の椅子を持って俺の隣に座った

紅蘭 「……あくあ……さん??」

あくあ 「お、終わるまで……待ち……ます……」

紅蘭 「……そう……ですか……見てても多分面白くないですよ?」

あくあ 「そ、それでも見たい……!……デス……」

そろそろ終わる頃に肩に重みがきた

それは俺にもたれたあくあさんだった

あくあ 「……………」

紅蘭 「……………待たせ過ぎたな……………」

あくあさんの寝顔って可愛いな…………

って……………変なこと考えんな!!

紅蘭 「……………あくあさん……………お待たせしました……………送るので起きて  
ください……………」

俺は軽くあくあさんの肩を叩いた

あくあさんは俺に抱きつき

あくあ 「……………まだ寝たいの……………」

紅蘭 「……………いつもお疲れ様……………」

俺はあくあさんの優しく頭を撫でて起きるまでのんびりすることにした

「このやり取りを目撃したすいちゃん」

星街 「あくたんが心配で事務所来たら………あくたんと紅蘭君が………」

すいちゃんはあくたんの事好きだし……

でもでも紅蘭君の事も好きだし………

星街 「あの空間……最高すぎ………」

1人でテンションが上がっていた模様

## 闇のゲーム ㉔

紅蘭 「……何で俺までいるのですか?」

ルーナ 「紅蘭も道連れなのら!!」

はあと 「2人ともはあちやまクッキングの時間よ!」

さあ、闇のデュエルの始まりだぜ! ㉔



〈数時間前〉

帰宅途中に携帯が鳴った

紅蘭 『……もしもs』

ルーナ 『紅蘭……一生のお願い聞いてほしいのら!!』

電話出て突然の一生のお願いをしてきたのは4期生の姫森ルーナさん

何か危機迫った状況なのだろうか

紅蘭 『落ち着いてください……一体そんなに慌ててどうしたんですか?』

ルーナ 『ルーナはまだ生きたいのら!』

いや、どういふことだよ

紅蘭 『……誰かに命を狙われてるのですか?』

そうだとしたら助ける他ない!!

ルーナ 『狙われてるのら………はあちやまに……!!』

紅蘭 『はあちやま??……赤井はあとさんにですか?』

ルーナ 『そうなのら!……今日、はあちやまクッキングに呼ばれたのら』

紅蘭 『そう……ですか……俺は参加しなくても……』

ルーナ 『紅蘭に来てほしいのら!……今は紅蘭にしか頼れないのら!』

ここまで頼むルーナさんはあまりみないし……

紅蘭 『分かりました……でもはあとさんに許可得てから……』

ルーナ 『あ、紅蘭は来る前提でもう伝えてあるのら』

………ええ。。。

はあと 「はあちやまつちやまく……今日は紅蘭とルーナに来て貰ったよ〜!」

ルーナ 「んなく!……強力助っ人感謝なのら〜!」

紅蘭 「どうも……これ俺が手伝ったり?」

はあと 「作るのははあちやまだけよ!……2人は食べるメイン!」

あ、これヤバイやつ??

ルーナさん青ざめた顔してるやないかい

ピンポーン

突然はあとさんの家のチャイムが鳴る

はあと 「あ、宅配来たから取ってきてまーす!」

はあとさんは急いで出ていった

ルーナ 「自由すぎなのら……普通、時間ずらすのら……」

紅蘭 「ま、まあそこがはあとさんらしいですけどね……」

しばらくしてはあとさんが戻ってきた

何故か上機嫌だったけど……

ルーナ 「今日は何を作るのら」

はあと 「今日はなんと………紅蘭の大好きなオムレツよ！」

紅蘭 「……待て、オムレツは好きだが……誰から聞いたんだよ  
！」

はあと 「それはもつちろん……企業秘密よ！」

ルーナ 「紅蘭……それくらいは我慢するのら」

はあと 「じゃあ…2人はのんびら話しててねー！」

はあとさんはキッチンへと歩いていった

ルーナ 「明日が来てくれるのか不安なのら」

紅蘭 「さ、流石にそこまでヤバイ事にはならないかと。」

ルーナ 「紅蘭は分かってないのら！」

はあと 「ちよつとそこの2人間こえてるからね！」

包丁を二刀流で何かを捌いてるはあとさんがそう言ってきた

ん?……二刀流……???

はあと 「さあオムレツが出来たわよ!」

完成?として出てきたオムレツは、。

ルーナ 「紅蘭……オムレツってまず黄色いのが普通なのら?」

紅蘭 「まあ……普通はな……」

オムレツが真っ黒  
焦げたのか……?

しかもオムレツの下何か入って膨らんでるし

紅蘭 「……はあとさん……オムレツの下には……？」

はあと 「流石紅蘭よく気づいたわね！……その下には……」

ルーナ 「……これはやべえ」

ルーナさん……口調が……

オムレツの下にあったのは……

はあと 「食用タランチュラです！」

2人 「どうしてだよ！?!?!?!」

ルーナ 「こんなの食べれないのら！」

紅蘭 「右に同じ！……でも食べるけどな！」

はあと 「紅蘭その意気よ!...はあちやまも食べるからね!」

ルーナ 「うぐぐ.....紅蘭!」

紅蘭 「どうしたんですか?」

ルーナ 「目をつぶるから食べさせてほしいのら!」

はあと 「ここであーんをしてくれるのね!」

こんなカオスな場であーんを要求て

紅蘭 「.....わかりました.....ルーナさん...覚悟して下さいね」

ルーナ 「掛かってこいのら!!!」

目をつぶりルーナさんは口を開ける

紅蘭 「あーん.....」

ルーナ 「んうっ.....トイレ行くのら.....」

紅蘭 「ルーナさん!?!?!」



しばらくルーナさんは戻ってこなかった

はあと 「また次回もよろしくね！」

ルーナ 「2度とごめんなのら」

紅蘭 「まあ刺激的で俺は良かったよ」

ルーナ 「は??」

## 禁断のお泊まり

紅蘭 「……………今なんて言いました？」

スバル 「だから…今日だけ紅蘭の家に泊めてほしい！」

紅蘭 「…他のホロメンに泊めて貰うのが一番よいかと……………」

引越しの手続きとかでバタバタしてて宿がないとは聞いてはいましたが、、、、

スバル 「紅蘭は酷い人っす……………」

うぐっ、、、、

心を抉らされた。。。

紅蘭 「なら条件を出しますね」

スバル 「条件……………」

紅蘭 「はい…この条件をのめないならお断りします」

スバル 「よーし…それでいいよー！」

紅蘭 「条件は3つ」

スバル 「げっ……そんなあるの……？」

紅蘭 「1つ……今回泊まることは誰にも言わないこと」

スバル 「何かヤバイことになる？」

紅蘭 「俺の命がなくなる」

スバル 「そ、それなら従います！」

紅蘭 「2つ……寝る際は必ず別室」

スバル 「別に一緒でも」

紅蘭 「よくありませんからね」

スバル 「ハ、ハイ……」

紅蘭 「最後は……」

スバル 「最後は……?」

紅蘭 「ほら着きましたよ」

スバル 「お邪魔しまーす!!」

紅蘭 「俺からの条件、破らないように」

スバル 「了解っす!!」

俺が最後に出した条件

それは配信はしないこと

これに関しては駄々こねられたが何とかなった

スバル 「スバルの寝床はどこ？」

紅蘭 「客人ですし……それに風邪をひかれるのは避けたいので俺の部屋でいいですよ」

スバル 「い、いいの!?!?」

紅蘭 「いいですから……俺はリビングのソファで寝ますから……」

スバル 「紅蘭……いいんすか？」

紅蘭 「いいのいいの……ではご飯作るのんびりしててくださいね」

俺は少しの間キッチンに滞在していた

そして料理を作り戻ってきたら、

紅蘭 「スバルさん…出来ましたよ……」

スバル 「あ、紅蘭がきた!」

ころね 『紅蘭きたのー?』

…ん?…この声はころねさん?

紅蘭 「はい、紅蘭ですよ……つて……どういう状況ですか?」

スバル 「いや何かころねが配信で逆凸やってスバルに来たって感じ」

ころね 『いえーい』

いえーい

じゃないでしょ?!?!?

これ配信に出てるよね

そしてスバルさんは今俺の家にいる事がバレる

俺の命、キケン、黄色信号

ピロン

ん？

ピロンピロンピロンピロン

これは見てはいけない……

がみてしまったら……

ピロンピロンピロンピロンピロン

ころね 『何かそっちから凄い受信音なってるねー』

スバル 「紅蘭の携帯だね」

紅蘭 「そう……みたいですね……」

ピロン、、、ピロンピロンピロン

みるしかない……よな……

俺は恐る恐るアプリを起動した

送り主は……やはりすいちゃんからだった

次に何かあったらもう、、



ユルサナイカラ

スバル 「スバルのせいでごめんです……」

紅蘭 「仕方ないですよ……してしまつたことですから」

スバル 「紅蘭………」

紅蘭 「あ、でも出禁で」

スバル 「そんなことある!?!?!?!」

あの計画を阻止せよ!!

紅蘭 「一体誰がこんなところに呼び出しを……………」

呼び出され訪れた部屋は薄暗く中央にテーブルが置かれている

紅蘭 「イタズラならまだ許しますから…いい加減誰ですか？」

差出人は無名

しかし俺のアドレスを知ってるのはホロメンとホロライブ関係者のみだ

よって社内の誰かなのは確定

? 「フアツフアツフアツフアツ…ようやく来たぺこね!!」

この独特の笑い方……

紅蘭 「ぺこらさんだったのですか……全く……」

ぺこら 「待ちくたびれたぺこ!」

紅蘭 「呼んどいてそれはないかと」

ぺこら 「まあ寛大な心持つてるぺこーらに感謝するぺこ!」

話が噛み合わねえ。。。

紅蘭 「それで何でわざわざこんな部屋に??」

ぺこら 「ぺこーらの相談にのってほしいから呼んだぺこ!」

紅蘭 「相談?…いいですけどわざわざ匿名じゃなくてもいいんじゃないですか?」

ぺこら 「来ない可能性を考えてこうしたぺこ！」

どちらにせよ来てたと思うが。。。

紅蘭 「それで相談とは？」

ぺこら 「前々から計画してたのを協力してほしいぺこ！」

紅蘭 「……………計画？」

ぺこら 「そうぺこ！……………今年は兎年なのはわかるぺこ？」

紅蘭 「あー…そうですね」

ぺこら 「そしてぺこらは人類兎化計画を建てたぺこ！」

紅蘭 「……………頭大丈夫ですか？」

ぺこら 「至って平常ぺこ!!」

何だよ人類兎化計画で。。。。

ぺこら 「ちなみにもう時期計画は始動するぺこ！」

紅蘭 「ええ……どうやって兎にするんですか？」

? 「その質問待ってました！」

突然出てきたのはあのピンク野郎だ

ピンク野郎 「こんこよー！……って何でピンク野郎って!!」

ぺこら 「ピンク野郎 w w w ……ファッフアッフアッフアッフ  
w w」

紅蘭 「それとわざわざロッカーに隠れてたのですか？」

こより 「狭い空間ってゾクゾクするんですよ！」

紅蘭 「ぺこらさん…人選ミスってね？」

ぺこら 「ぺこーらもそう思えてきたぺこ」

こより 「ちよつと酷くない!!」

紅蘭 「こよりさんって事はまた薬を？」

こより 「前回紅蘭君に飲んで貰った薬で完成したんです！」

紅蘭 「飲んだら兎になるって？」

ぺこら 「そこは違うぺこね……飲んだら……ぺこーらの姿になる  
ぺこー！」

これは阻止せねばならない事案だな

ぺこら 「紅蘭にはホロメンに飲んでほしいと渡してほしいぺこ  
ー！」

紅蘭 「犯罪に手を貸したくありません」

ぺこら 「犯罪じゃないぺこ!!」

こより 「栄養ドリンクって名目で渡せばいいんですよ」

いーしーら……

こより 「では紅蘭君から飲んでみるのはどうですか？」

ぺこら 「おお！…それはナイスアイデアぺこ！」

え………？

紅蘭 「待て待て!!」

こより 「ここ最近の鬱憤晴らさせて貰います！」

ぺこら 「やっっちゃえやっっちゃえー！」

紅蘭 「お、俺がぺこらさんになったら……ピーーやピーーす、するからな！」

ぺこら 「やばい…それはやばすぎるぺこ!!!」

こより 「むしろそんなぺこら先輩をみたい！」

ぺこら 「こつちの方がもつとやばいぺこ!!!」

紅蘭 「俺以外にもぺこらさんにされてそんなことする人いるかもしれないぞー！」

こより 「それはそれで最高です！」

ぺこら 「盲点だったぺこ!!……撤回……撤回するぺこー！」

ペこらさんは急いで出ていった

こより 「あー……待ってくださいよペこら先輩!!」

続いてこよりさんも出ていった

紅蘭 「これで人類兎化計画は止めれたか？」

その後、こより自ら飲んでペこらの姿になって暴れまくった模様



すいちゃんは色々話したい

今日はすいちゃんとデート

今回は俺から誘った

俺の命が赤信号になりかけてるからな。。

星街 「紅蘭君〜!」

待ち合わせについてしばらくしてすいちゃんが来た

星街 「紅蘭君…今日は”色々”話そうね?」

紅蘭 「は、はい……」

すいちゃん…笑顔だけど目が。。

星街 「とりあえず…紅蘭君の家に行こっか」

紅蘭 「…買い物とか…いい…の？」

星街 「うん…今日は”色々”話すつて決めてたからね」

そうして俺の家に着いた

星街 「ここが紅蘭君の家ね…」

紅蘭 「う、うん…」

凄い心が痛い。。。

俺が悪いから。。。

星街 「さあ紅蘭君…”色々”話そっか？」

紅蘭 「は、はい……」

星街 「まず……ここ最近紅蘭君の出来事についてね……」

色々掘り下げられそう。。。

星街 「ちよこさんの配信の時に今度デート誘うって言うてて……やつと今日だよね？」

紅蘭 「す、すみません……」

星街 「忘れられたと思ったけど？」

紅蘭 「そ、それはない！……遅くなったのは本当にごめん。」

星街 「はあ……次は……フレアとスバルをこの紅蘭君の家に上がらせたね」

紅蘭 「あ、あれは……成り行き……で……」

星街 「成り行きならいいって……？」

どこから出したのか首もとに斧を置かれる

紅蘭 「お、俺は…断りづらい性格で……」

星街 「…まあフレアには言ったけど…無理強いはよくないからね……スバルのは隠すつもりだったよね？」

紅蘭 「隠すつ、つもりなん…て……」

星街 「正直に言っ…すいちゃん…嘘嫌いだから」

紅蘭 「隠すつもり…でした…けど別室に寝たりと条件は出して。」

星街 「はあ…すいちゃんは紅蘭君の事信じてるから…そう言うのは事前に言っ…」

紅蘭 「は、はい……」

すいちゃんは斧をしまい座る

星街 「んーと…あくたんと事務所に取り残されてたよね？」

紅蘭 「あ、あれは…仕事に集中して。」

星街 「だろうね…そしてあくたんに肩を貸したと……」

紅蘭 「そ、そこまで…知ってるの？」

あれ……だっ…あの時事務所には誰も。。。

星街 「あくたんが呟いてて心配で来てたんだよ……その時見かけたけど許したの」

紅蘭 「そ、そうなの？」

星街 「あくたんも紅蘭君も好きだからね……あの空間は最高だったなあ」

よかった。。。

相手があくあさんじゃなかったら。。。

星街 「そしてはあちやまとルーナの配信……まあここは問題はないね……1つ除いてね」

紅蘭 「……1つ……？」

星街 「まあそこまで気にしてないけど……ルーナにあーんしたよね？」

紅蘭 「し、しました……勿論すいちゃんにもしたければしますよ？」

星街 「……もうそれならいいよ……」

ここはどうかか乗り越えたみたいだ

あれ？

何でこんなに把握されてるんだ？

ここ最近の事だよな……

ケモ耳事件はまあ問題ないよな……

AZKiさんとはカフェで話して。

ペこらさんは特に無かったよな。。

後は………

トワさんの告白とクロエさんのお風呂。

後者の方が大問題!!

どうかか……どうにかバレないように………

星街 「最後に……」

最後!

トワさんの方ならまだ何とか……!

星街 「トワに告白されたみたいだね?」

紅蘭 「あ……そうですね……でもあれは……」

星街 「うん……大丈夫……こよりのドリンクなんですよ?」

紅蘭 「え?……そ、そう……こよりさんのドリンクだね」

何で知ってるんだ?!

星街 「トワも紅蘭君の事好きなのかあ」

紅蘭 「そう…言ってたね…でも…」

星街 「すいちゃんが1番…でしょ?」

紅蘭 「え…あ、うん…」

まるで分かってるように遮られた

星街 「まあ…紅蘭君がすいちゃんの事を大事にしてくれるなら  
それでいいよ?」

紅蘭 「うん…大事にする…」

星街 「そっかあ…じゃあ…」



何でクロエとお風呂入ったかな？

修羅場を乗り越えろ!!

何でクロエとお風呂入ったかな？

今度は壁に追い詰められ俺の顔横に斧が刺さる

そして壁ドンされた

星街 「下心しかないよね？」

紅蘭 「そ、そんなこと……」

星街 「異性とお風呂なんてそれしかないよね？」

紅蘭 「そ、それ……は……」

俺は答えを出すため必死に考えた

星街 「何か…言ったらどうなの？」

紅蘭 「た、確かに…俺…はクロエさんとお風呂に入った…」

すいちゃんは俺をただただ見ている

紅蘭 「俺は最初は否定した…それは信じてほしい！」

星街 「でも入ったんでしょ？」

紅蘭 「それは…」

事の経緯をすいちゃんに伝えた

星街 「まどめると騙されたってこと？」

紅蘭 「そう……です……」

星街 「騙されたとしても……逃げれば良かったんじゃないの？」

紅蘭 「はい……」

確かに。

心のどこかで期待してたから。

星街 「それで……すいちゃんに言うことは……？」

紅蘭 「すいちゃんに……」

謝ることは当たり前だ。

何か。

何か特別な事を。

紅蘭 「すいちゃんがしたいこと何でもいい……お風呂も一緒に  
入るし……ご飯時あーんもする……一緒に寝ることだって構わない!!」

星街 「……その言葉……取り消さない?」

紅蘭 「取り消さない!……絶対!!」

ものの数分だろう

だがそれがあまりにも長く感じた



く一緒に料理く

星街 「紅蘭君…これってどう斬るの?」

紅蘭 「こうやって………って斬るってそっちじゃない!!」

星街 「すいちゃんわかんなくい」

く一緒に食事く

星街 「紅蘭君はやく!」

紅蘭 「慌てないの……ほらあーん」

星街 「あーん♪……んー…美味しいく♪」

一緒にお風呂

紅蘭 「ほ、本当に入るの??」

星街 「クロエと入ってすいちゃんとは入らないの?」

紅蘭 「こ、心の準備が。」

星街 「それはすいちゃんも同じだから!!!」

く寝室にてく

ベッドの上でお互い見つめ合い

星街 「じゃあ……最後は……すいちゃんと……」



紅蘭 「……………すいちゃん…いい…の?…」

星街 「うん紅蘭君がいいの……………沢山……………愛してね?」

紅蘭 「あ、あのさすいちゃん」

俺は抱き合っただまま話しかける

星街 「もしかしてもう一回戦したいの？」

紅蘭 「ち、違っ…」

星街 「冗談だよ…それでどうしたの？」

紅蘭 「そ、その……どうして俺がホロメンとどのような事をしたかなんで知ってたのかなって。」

星街 「ちよこせんとはあちやまとスバルのは配信で知ったね」

紅蘭 「言われてみれば……スバルさんのはまさかでしたけど…。」

星街 「あくたさんは眩きアプリでしょ？」

紅蘭 「なるほど……トワさんは？」

星街 「トワのはトワから言ってきたよ」

紅蘭 「そ、そうなのか…」

できれば俺も呼んでほしかった。。。

星街 「それでクロエのはくく」

脅しだよ??

いっちょあがり!!

紅蘭 「俺の手料理が食べたい？」

ねね 「うん!……皆すつごく美味しいって言ってるから!」

紅蘭 「うーん……そうですね。」

そういえばぼたんさんに頼まれてたな。

ぼたん 「あ、ねえ紅蘭……ちよつと頼みたい事があるんだけど  
さ」

紅蘭 「…頼みたい事??」

ぼたん 「ねねちゃんのさ野菜嫌いを克服してあげたいんだけど」

紅蘭 「野菜嫌いですか……」

ぼたん 「そうそう……紅蘭の手料理なら食べるんじゃないかな  
〜って」

紅蘭 「なるほど……その機会がありましたらやってみますね」

ぼたん 「お、さすが紅蘭〜頼りになる〜」

紅蘭 「いいですよ……おまかせでいいですか？」

ねね 「うん！……おまかせって何かワクワクするね！」

紅蘭 「そ、そうですかね？」

何か凄い眼差しだ。。

嫌いな野菜をメインで出すけど罪悪感が。。。

く調理中く

ねね 「何作るの〜?」

紅蘭 「お楽しみですよ」

ねね 「はーい。。」

ねねさんは末っ子感が凄いな

面倒をみてやらないといけないなと思ってしまう

ねね 「いい匂いするー!」

紅蘭 「もう少しで出来ますからね」

ねね 「はーい!!」

紅蘭 「ほら出来ましたよ」

ねね 「遂に紅蘭の手料理が食べれ……………る……………」

置かれた食事に絶句

ねね 「こ、これ……………野菜炒め……………」

紅蘭 「……………そうですよ……………体にいいですからね」

ねね 「ねねが野菜嫌いなもの知っててやったでしょ!？」

紅蘭 「さあ、どうなんですかね」

ねね 「やだやだやだ! 食べたくない!!」

駄々こねてしもうた。

紅蘭 「そっか……………折角ねねさんのために作ったのに……………食べて  
……………くれないんだ。。。」

ねね 「うぐつ。。。」

紅蘭 「食べてくれたら……ねねさんのしたいこと1つくらいは聞いてあげてもいいかな」

ねね 「ぐぬぬぬぬ。。。」

結果は食べました

ねね 「口の中が森だよ。。。」

紅蘭 「そんなことはありませんよ……全く……食べず嫌いはいくはないから……気をつけて下さいね？」

ねね 「今度は肉!!……絶対肉!!」

紅蘭 「分かりましたから……」

ねね 「食べたから約束守って貰うよ!!」

あ、確かに約束してしまったな



破るのはよくないしここは守るとしよう

紅蘭 「いいですよ……それで何を??」

ねね 「それは勿論……ねねとーあんなことやこんなことを」

グへへとねねさんは妄想を膨らませている

紅蘭 「……え、えつと……そういう感じですか?」

紅蘭 「わかった……わかりましたから………そんなジリジリ寄ってこないでー!!」

ねね 「野菜を食べさせたの後悔させてやるー!!」

ねねさんは飛びかかってきた

ねね 「覚悟ー!!!」

ねね

「ご馳走さまでした♪」

紅蘭

「ど、どう意味だよ。。。」

おかころと飲んでみよう

紅蘭 「飲み会…ですか？」

おかゆ 「そうそう…ころさんとだけど紅蘭君もどうかなくつて」

紅蘭 「そうですね…構いませんがどちらで??」

おかゆ 「ころさんの家でかな」

ころねさんの家か…

すいちちゃんには連絡しとかないとな。。。

おかゆ 「紅蘭君はよくお酒飲んだりするの？」

紅蘭 「そんなにですかね…あ、飲みたいなあって思ったら飲むっ感じですかね」

おかゆ 「ふーん…あ、そうだ…敬語外してよ」

紅蘭 「え?…いやでも…敬語外すと馴れ馴れしいですし…」

おかゆ 「距離とられる方が僕は嫌かな〜…きつところさんもそ  
う思うよ〜」

紅蘭 「そ、そう…ですか…」

おかゆ 「無理にとは言わないけど少しずつ敬語外していこ〜」

おかゆ 「ここがころさんが住んでるところだよ〜」

紅蘭 「ここですか…」

俺の家から近いな……………

ころね 「あー！…おがゆと紅蘭来たね〜！」

ころねさんは玄関を開け出迎えてくれた

紅蘭 「お、お邪魔します。。」

ころね 「紅蘭、緊張しすぎ〜」

おかゆ 「もしかして…僕らといるからかな〜？」

紅蘭 「それは…ある…かな…」

ころね 「もしかしてこおねとおがゆに惚れてるとか!？」

おかゆ 「ころさん、いきなりテンション上がりすぎだよ〜」

紅蘭 「と、とにかく…飲みましょう!!」

俺は逃げるように飲み会を推した

つまみや酒等を準備しいよいよ開始

ころね 「今日は楽しく飲むぞ〜！」

おかゆ 「おお〜！」

紅蘭 「お、おお〜！」

3人で乾杯しグラスに入っているお酒を飲み干す

紅蘭 「…………ふう…………2人とも飲むの早いね…」

ころね 「紅蘭が1番遅かったからもう一杯ね！」

おかゆ 「はい、もう一杯だよ〜」

いつの間にか俺のグラスに注がれていた

紅蘭 「の、飲んでやるよ!!」

ころね 「おお〜! ……いい飲みっぷりだね〜」

おかゆ 「じゃあ色々ゲームやろっか〜」

ころね 「はい、こおね上がりま〜す！」

紅蘭 「あ、後2枚!!」

おかゆ 「はい、僕のがり〜」

紅蘭 「だー!!…負けたく!!」

ころね 「ほらほら負けたら飲みだよ〜」

紅蘭 「いくらでも飲んでやるよ!!」

おかゆ 「頑張れ〜」

あれから色んなゲームをするが俺はほとんど負けまくり  
沢山お酒を飲んでしまった

ころね 「紅蘭、もう酔ったの〜?」

紅蘭 「はあー?…酔ってねーし!!」

おかゆ 「何か今まで凄いキャラ変わったね」

紅蘭 「おかゆが敬語外せって言ったからだろ〜?」

ころね 「おかゆって呼んでる！……こおねもこおねも!!」

紅蘭 「んだよころね……これでいいか？」

ころね 「何か新鮮く……こおね飲みまーす!!」

紅蘭 「お！……続いて俺も！」

おかゆ 「ころころ……2人とも飲みすぎると明日に響くよ？」

俺は一気に飲み干しグラスを置いた

おかゆ 「ほら紅蘭君……水だよ……少しは落ち着こ？」

おかゆは俺に水を差し出してくれた

だが俺の手は違ふところに伸びていった

紅蘭 「こんなに触りたくなり耳しやがつて〜！」

俺はおかゆの耳を触っていた

おかゆ 「くくく、紅蘭君?!?!……そ、そんな風に触られると……」

紅蘭 「何だ〜?……こうやって内側とかもか〜？」

おかゆ 「そ、それ以上はヤバイよ……!!……ころさん……助けてえ。」



ころね 「おがゆばかりずるい!!……こおねのも触ってよ!!!」

紅蘭 「おがゆの満喫したら……ころねのも触ってやるよ」

俺はおがゆの耳を満喫して離れた

おがゆ 「うう……紅蘭君のバカあ……」

おがゆは横たわった

何だ、もう眠たかったのか↑

ころね 「ほらこおねのもー!」

ころねは俺の膝の上に座り耳をピョコピョコ動かしていた

紅蘭 「そんなに言わなくても……ほら触ってやるよ」

頭を撫でたり耳を触ったりとした

ころね 「紅蘭の触り方がいい」

紅蘭 「そうかそうか……尻尾も触り心地いいな」

俺はユサユサ揺れてる尻尾を触った

ころね 「ちよちよ!?……………紅蘭…尻尾はだめー!!」

紅蘭 「少しくらいいいだろー?……………おおく……………」

ころね 「た、助けてよおがゆー!!」

俺はその後ころねの尻尾等を満喫した

く翌日く

俺は起きるなり激しい頭痛をくらった

紅蘭 「いっつ〜……………二日酔いだよな……………」

あれ、

俺いつの間に帰ってきてんだ？

途中から記憶ないし。。。

星街 「あ、紅蘭君……やつと起きた……はい、お水」

寢室にすいちちゃんは入ってきた

あれ、何故すいちちゃん???

紅蘭 「あ、ありがと……そ、その……昨日って……」

星街 「心配だったからね…………ころねの家に行ったらこんなになってたよ？」

見せられたのはおかゆさんところねさんと抱き合いながら寝転がってる写真だった

紅蘭 「の、飲みすぎました。。。」

星街 「まあ見た感じ……変なことはしてなさそうだし……」

紅蘭 「は、はい……ここへは……」

星街 「タクシーで来て……紅蘭君の鍵で開けて入っただけ」

紅蘭 「ご迷惑おかけしました。。。」

星街 「今度すいちゃんと飲んでくれるならいいよ?」

紅蘭 「それくらいいくらでも!!」

星街 「じゃあ……今回は許してあげる」

おかゆさんとこねさんは大丈夫かな。。。

おかゆ 「昨日は激しかったね」

ころね 「紅蘭は酔ったら凄いとわかった!!」

ミオ 「ふ、2人とも一体にしたの  
!?!?!?」

## バレンタインデーらしい

今日はバレンタインデー

もしかしたらホロメンから貰えたり!?とちよつと浮かれながら俺は入社した

紅蘭 「お疲れ様です…」

俺は1度顔を見せるためホロメンがいる方の事務所へと入った

Aちゃん 「あ、紅蘭お疲れ様……はいこれ日頃のお礼として」

渡されたのは板チョコ

それだけでもすごく嬉しかった

紅蘭 「ありがとうございます!!」

Aちゃん 「ん、そんなに嬉しい?」

紅蘭 「知り合いから貰うのが久しぶりでして。」

今までは知らない人から渡されることがあった

Aちゃん 「そう……何か板チョコでごめんね?」

紅蘭 「そんなの関係ありません!……貰うことが嬉しいので!」

A先輩と話していたらホロメンが入ってきた

マリン 「あー！…Aちゃんに先越された！」

ペこら 「ペこーら達が1番を取るつもりだったペこー！」

ノエル 「2人とも落ち着いて？」

フレア 「ホロメンで私達が1番ならいいじゃん」

紅蘭 「えっと…もしかして俺を探してました？」

マリン 「そうなんですよ！…紅蘭君の作業場に待ってても全然来ないので!!」

紅蘭 「そ、それはすみませんでした。」

ペこら 「それじゃあ…はい、バレンタインデーだからあげるペこ」

ノエル 「ペこらと一緒に作ったので私からも…どうぞ！」

ペこらさんとノエルさんに渡されたのは手作りチョコレートクッキーだ

マリン 「船長からは…紅蘭君への愛情がたつくさん入って」

フレア 「マリン、早くしてくれない?」

ぺこら 「さっさとするぺこ」

マリン 「今いいところでしようが?!?!?」

フレア 「はい、紅蘭…その…これからもよろしく……」

フレアはそっぽ向きながら渡してくれた

ノエル 「ちよつちよつと待って!!……今…フレア……」

フレア 「わ、渡したからね!!」

フレアは顔を赤くしながら出ていった

逃げないでよフレアー!とノエルさんは追いかけていった

ぺこら 「じゃあぺこーらは戻るぺこ」

紅蘭 「はい、ありがとうございます」

マリン 「まだ船長の渡してませんけど?!?!?」

ぺこら 「紅蘭も忙しいから……はい、これマリンのね……ほらマリン戻るぺこ」

マリン 「何勝手に渡してるの!?!……って……離してぺこら……船長はまだ紅蘭君と」



紅蘭 「美味しく頂きますね……では……」

まだ紅蘭君といたいですー！と引きずられながら叫んでいた

紅蘭 「もうすでに5個……しかもホロメンから……夢みたいだ……」

俺は泣きそうになるのを我慢して作業場へと入った

シオン 「やつほく紅蘭」

スバル 「お邪魔してるっす！」

あやめ 「遅くて待ちくたびれた!!」

ちよこ 「紅蘭様……もう貰ってたのですね」

あくあ 「……………」

紅蘭 「2期生勢揃いで……………すみません…先程ぺこらさん達に渡されまして」

あやめ 「そうなのか！…それより…これは余からなのだ！」

スバル 「スバルからのこれっす！」

シオン 「はい、ちなみに義理だからね？」

ちよこ 「ちよこからはこの手作り生チョコですよ」

紅蘭 「わざわざ俺なんかのために……………ありがとうございます  
!!」

あれ、あくあさんは…ないのかな……………?

スバル 「ほらあくあも渡しなよ」

あくあ 「え!?!……………あ……………ウ、ウン……………」

あくあさんは下を向きながら俺へと寄ってきた

あくあ 「え、えっと……………よ、よかったら受け取って…クダサイ……………」

綺麗にラッピングされたのを渡してきた

シオン 「あくあ、紅蘭の事好きすぎでしょWWW」

紅蘭 「…………え？」

あくあ 「あ、そ、その…………失礼します!!!」

スバル 「あーあ…あくあ行っちゃった」

あやめ 「追いかけてっこだな！…余、負けないぞ！」

シオン 「シオンはパスー」

ちよこ 「じゃあ紅蘭様、ちよこ達は失礼しますね」

紅蘭 「は、はい…………そのあくあさんの事お願いします」

ポツンと一人になった俺はあくあさんがくれたチョコをみた

紅蘭 「…………俺の事…………いやいやまさかなあ…………」

その後は仕事に入り昼頃になった

紅蘭 「作業の合間に食べると美味しいな……」

そういえばまだすいちゃんから貰ってないな……

俺は作業を止め、背もたれにもたれる

紅蘭 「貰えると……いいな……」

まつり 「…何が貰えるといいの?」

急に視界に現れたのはまつりさんだった

紅蘭 「いい、いきなり声かけないでくださいよ!!」

まつり 「ごめんごめん……こっそり入ったら気付かれなくてね  
」

メル 「あ、まつりちゃんいた!」

アキロゼ 「探してたよ」

はあと 「紅蘭のところに行ったのね!……丁度いい!」

続々と入ってきたのは1期生の方々

あれ、フブキはいないようだな

まつり 「はい、バレンタインチョコだよ！」

メル 「メルからも…どうぞ♪」

アキロゼ 「はい、アキロゼからもです♪」

各々俺にバレンタインチョコを渡してくれた

はあと 「はあちやまからは〜」

まつり 「……それ食べれるの？」

はあと 「食べれる!!」

何ということでしょう

ところどころに赤い点々があるではありませんか

メル 「みるからにヤバそうだけど。」

アキロゼ 「む、無理だけはしないようにね？」

紅蘭 「貰ったのだから食べないと相手に失礼ですからね」

はあと 「感想、待ってるわね!…じゃあはあちやまは大学あるから帰ります!」

紅蘭 「はい、大学頑張ってくださいね」

まつり 「それじゃあ、まつり達も帰ろっか」

メル 「そうだね…紅蘭君また今度感想聞かせてね♪」

アキロゼ 「配信の方もお願いね♪」

紅蘭 「はい、お疲れ様でした…：…いつか配信の方もお願いします！」

俺はまつりさん達を見送って受け取ったチョコを見る

紅蘭 「…：…まあ生きて帰れるだろ…：…」

〈数時間後〉

ねね 「お邪魔しまーす!!」

ポルカ 「お邪魔く」

ラミイ 「ちよつとノックくらいしなよ!!」

ぼたん 「まあまあ落ち着きなつてラミイちゃん……お、紅蘭いるじゃん」

紅蘭 「おや今度は5期生の皆さんですか……レッスン前ですか？」

ポルカ 「そうそう!……いや〜……流石に1番は取れなかったか〜」

ねね 「はーい!……ねねからのバレンタインチョコ!」

紅蘭 「ありがとうございます……ねねさんはあれから野菜は食べました?」

ねね 「た、食べてまーす……」

ポルカ 「食べてないだろ……はい、ポルカからもね」

ラミイ 「ラミイからもです……アルコール度数高めのチョコだよ」

ぼたん 「んーと……私からは……」

ぼたんさんの手元には小さめの箱があった

その箱を開け、手にチョコを持ち俺に近寄ってきた

ラミイ 「ちよっ…ししろん今食べさせるの!？」

ポルカ 「おく…アツアツですな〜」

ねね 「やっちやえししろん!!」

ぼたん 「受け取ってね…私からのチョコ…」

ぼたんさんはチョコを半分口に挟み俺の唇へと重ねた

紅蘭 「……んう?!?!？」

ラミイ 「ししろん!?!?!？」

ぼたんさんはチョコを俺の口の中にいれるように舌を押し込みやがて俺の中にチョコが入ってきた

その際舌と舌が触れあつた気がする

ぼたん 「ふう……どうだった…?？」

紅蘭 「あ、あまりからかわないでください。」

きつと俺の顔は真っ赤になつてる

ポルカ 「いや〜…ライオンだけあつて肉食だね〜」



ねね 「ねねも肉食だから！」

ポルカ 「まず野菜食え」

2人は満足しながら出ていった

ラミイ 「……………」

ぼたん 「あれ、ラミイちゃん？」

どうやらラミイさんは驚きのあまり固まったようだ

ぼたん 「…刺激が強すぎたかな…じゃ紅蘭…また後でしような〜？」

ぼたんさんはラミイさんを担ぎ俺にウィンクをして出ていった

紅蘭 「…俺にも刺激が強すぎるよ…。」

俺は両手で顔を隠した

星街 「ふーん……なるほどねえ。」

すいちゃんに見られてるのも知らずに……

バレンタインデーらしい②

どうも。

先程からぼたんにキスをされて何も手につかない紅蘭です

そんな俺のところに訪れたのは。。。

ルーナ 「紅蘭が上の空なのらく」

わため 「確かにずっとボーツとしてる！」

かなた 「た、体調が悪いとか!？」

トワ 「いやただボーツとしてるだけでしょ」

く10分経過く

ルーナ 「もう10分くらい上の空なのら」

かなた 「声…かけにくいね……」

トワ 「折角皆で渡そうと決めたのに……」

わため 「わためにお任せあれ!!」

わため 「目を覚ませー!!!」

紅蘭 「へ?……フゲツ……」

後ろからわためさんに突進され飛ばされた

ルーナ 「大胆なのらく」

わため 「紅蘭君がポケットとしてたからわためは悪くないよね」  
??」

かなた 「フゲツて言ってたwww」

トワ 「紅蘭君大丈夫?」

紅蘭 「ト、トワさん……」

トワさんは俺のところに来てしゃがんで頭を撫でてくれた

トワ 「何か考え事でもしてたの？」

かなた 「紅蘭君があんな感じなのあまり見ないからね……つと……」

紅蘭 「つとと……かなたさんありがとうございます……」

片手で俺を持ち上げたのは触れないで置こう

ルーナ 「天音ちゃん脳筋なのら」

かなた 「言わないでくれるかな?!?!」

わため 「あわわわ……落ち着いてー!!」

トワ 「はあ……全く……大丈夫ならいいけど……はい……トワから……」

ハートマークにラッピングされていた

紅蘭 「あ、ありがと……そのトワさん……」

トワ 「こ、この前の事は忘れてね!!……絶対だから!!」

紅蘭 「は、はい……」

かなた 「はいはい……僕からのもあるから!」

ルーナ 「ルーナのもあるのら……ギブギブ……天音ちゃん、ギブなの……ら……」

ルーナさんはかなたさんにプロレス技かけられてるけど触れないでおこうかな

わため 「わためからはこの角を真似たチョコ！……わためだと思っただけ食べてね！」

紅蘭 「な、何かそう言われると食べにくいぞ……」

わため 「そんな事言わずに……って……泡吹いてるよ!!」

かなた 「やっべ……ちよこさんのところに連れてくね……じゃバイバイ紅蘭君！」

まるで嵐が去ったかのように皆は走っていった

紅蘭 「ルーナさん……生きてるかなあ……」

いろは 「蘭殿はいるかー!」

ラプラス 「久し振りに遊びに来てやったぞ!」

こより 「今日こそ…こよの実験体に!!」

ルイ 「何か私利私欲すぎない?」

クロエ 「……………」

紅蘭 「…ええ…ルイさんとクロエさんくらいしか常識ないんですか?」

あれ、クロエさんってあんな元気ないっけ?

いろは 「風真は常識あるでござる!!」

紅蘭 「敗北者は黙ろろうなニンニン?」

いろは 「ニンニン…?…取り消せその言葉く!!」

ラプラス 「用心棒、遊ばれてやんのwww」

紅蘭 「やまだはこのアンパンマングミ食べとこうな?」

ラプラス 「吾輩は子供じゃねー!!…後、やまだやめろ!!」

こより 「2人ともそんなんじや紅蘭君には勝てませんよ」

紅蘭 「ピンクココロは立ち入り禁止って書いてあるぞ?」

こより 「嘘かと思ったらちゃんと貼り紙されてるの?!?!?」

クロエ 「……フフツ……」

ルイ 「凄い……あの子達を意図も簡単に流している……やはり……紅蘭さんは噂通りの……」

紅蘭 「……それより……何しにきたんだ?……迷子センターなら」

ラプラス 「……折角吾輩のチョコを渡しに来たのにな」

紅蘭 「……何?」

いろは 「いや……残念でござる……蘭殿には食べてほしかったでござる」

こより 「全く怪しいもの混ぜてないのにな」

ルイ 「いやこよはいれてたじゃん」

こより 「ちよつとそれ言わないの!!」

クロエ 「……沙花又、用事あるんで置いとくね……んじや……」

紅蘭 「あ、クロエさん……」



ラプラス 「紅蘭、何かしたのかー？」

いろは 「初めて見たでござるよ」

ルイ 「……私が見ておくから……紅蘭さん、私のも置いときますね」

ルイさんは追いかけて出た

こより 「こよのは……はい！……媚薬入りチョコ!!」

紅蘭 「堂々としてある意味尊敬するわ!!」

いろは 「媚薬って何でござるか？」

ラプラス 「お前は変わらずそのままできてくれ。。。」

ルイ 「ちよつと……あの対応はないんじゃないの？」

クロエ 「……から……」

ルイ 「……え？」

クロエ 「すいせい先輩に……怒られるから……」

ルイ 「……………うん、多分関わらない方がいいね」

クロエ 「ちよつとルイ姉!?!?!」

紅蘭 「いろは達のおかげで少しは気が楽になったな……………よし  
！」

俺は勢いよくドアを開けた

ミオ 「び、ビックリした……………」

紅蘭 「あ、ミオさん……………すみません突然ドアを開けてしまっ  
て。」

危うくぶつけるところだった

ミオ 「大丈夫だよ……それより何か急用とか??」

紅蘭 「ちよつと運動したくてレッスンにお邪魔しようかなと。。。」

ミオ 「そ、それならウチらこの後レッスンだけと……ど、どうかな?」

紅蘭 「お、いいですね!……あれ、ミオさんは俺に何か用事で??」

ミオ 「なな、何もないよ!?……先に行つて待つてるね!!」

ミオさんは走り去つた

紅蘭 「……まさかチョコ貰い損ねた??……だったら残念。」

それよりレッスンにお邪魔してみるか!

↳レッスン室へ

紅蘭 「し、失礼します……」

ころね 「おー!……紅蘭きたー!」

おかゆ 「ほらほら踊ろうよ〜」

フブキ 「紅蘭君と踊れる!!…ワクワク!!」

ミオ 「後ろで真似てればいいと思うよ!」

紅蘭 「は、はい……すみません、では1番後ろにお邪魔しますね  
……」

そしてレッスンは始まった

紅蘭 「……やっぱアイドル凄いな」

おかゆ 「紅蘭君も中々だね〜」

ころね 「何かスポーツやってたとか〜?」

フブキ 「さぞ爽やかイケメンでモテてただろう」

紅蘭 「あはは……俺は何もやってないですよ……それに知らない人に好きですと言われたくらいしかないのでモテてたのか分からない。。」

ミオ 「いやそれモテてるでしょ」

フブキ 「現に紅蘭君はモテてますよ………はい、白上からのチョコです！」

僕からもく、こおねも！、ウチからも！と続いて俺に渡してくれた

紅蘭 「こんな幸せなことあつていいのだろうか。」

ミオ 「いいと思うよ……紅蘭君は皆から慕われてるし愛されてる」

ころね 「何かあつたら言つてね！」

おかゆ 「僕らはいつでも力になるからね」

フブキ 「紅蘭君はもう1人じゃありませんから」

紅蘭 「皆さん。。」

俺は感動のあまり涙を溢してしまった

フブキ 「はい、白上は今の紅蘭君の涙を撮りました、コレクシヨン入りの永久保存にします!!」

ミオ 「あ、ウチにも送ってほしい!!」

ころね 「ずるい!!…こおねも!!」

おかゆ 「僕も…：…紅蘭君、もし疲れてたら先に上がってもいいからね」

紅蘭 「う、うん…お言葉に甘えるよ…：…」

4人は俺の写真の取り合いだったため俺はこっそりとレッスン室を出た

みこ 「やっと見つけたにえ!!!」

紅蘭 「みこさん？」

そら 「どこいっても見つからなくて心配してたよ」

A Z K i 「危うく警察に電話しかけたよ」

紅蘭 「その前に俺に電話してくれれば……」

ロボ子 「紅蘭の携帯、机に置いてあったからね」

え??

あ、確かにポケット探つてもなかった。

みこ 「紅蘭はポンコツだ!!」

紅蘭 「まあ反論はできないな……」

AZKi 「いやそこはした方が……」

ロボ子 「高性能の機能つけてみる?」

そら 「ほーら……紅蘭君が困ってるでしょ?」

みこさんとロボ子さんはそらさんの注意に落ち込んでいた

紅蘭 「あ、あの……ちなみにすいちゃんは?」

このメンバーならすいちゃんがないのがおかしいと思える

そら 「何かすぐに帰ったよね?」

みこ 「なーんかイライラしてたにえ」

A Z K i 「紅蘭君にチョコあげないのかな？」

何……だと……

俺は本命すいちゃんから貰えることができないのか?!?!?

ロボ子 「それか今作ってるかもね……ちなみにボクのはこれね」

そら 「後で連絡してみたらどうかな?……はい、今度感想聞かせてね?」

A Z K i 「あのカフェの新作飲みに行こうね?……どうぞ」  
♪

みこ 「みこからは……この鯛焼きを差し上げるにえ!!」

紅蘭 「こんな豪華なものを俺に……つくづく俺は幸せ者ですね。」

そら 「お世話になってるからだよ……これからもよろしくね?」

A Z K i 「ほーらすいちゃん追いかけなよ」





バレンタインデーらしい③

『お掛けになった電話は現在お出になりません』

紅蘭 「すいちゃん……電話も出ないのか。。」

俺は事務所を出てすいちゃんを探している

一旦姉街に聞いてみるとしよう。。

姉街 『もしもーし……紅蘭君から電話掛けてくるなんて何かあったの?』

紅蘭 『すみません突然お電話掛けてしまいまして……その……すいちゃんと連絡取れなくてですね……家に帰ってたりしてませんか?』

姉街 『うーん……まだ帰ってきてないね……私からも連絡してみるね!』

紅蘭 『お手数おかけしますがお願いします。。』

そう言い電話を終えた

紅蘭 「一体どこに行ったんだよすいちゃん……」

どうする……？

一旦家に帰るか？

いやでももしかしたら誰かに。。。

俺は長い間その場に立ち尽くして考えていた

紅蘭 「……一旦帰ってみるか……」

ここにいても変わらない

それなら一旦帰って落ち着いてみるしかない

紅蘭 「…はあ……一体どこに……」

俺は鍵を差し開く方に捻った

が、肝心の開く音がしなかった

紅蘭 「……閉め忘れたか？」

いやそんなことはない

今日出るときちゃんと閉めたことを覚えている

だとしたら……

紅蘭 「……空き巣でも狙われたか？」

俺は冷や汗が出始めた

まさかすぎる

もしかしたら俺に恨みがあつてされたかもしれない

紅蘭 「……物音は…しないな……」

それなら……入るしかない!!!

俺は思いきってドアを開けた

星街 「おかえりなさい紅蘭君……待ってたよ……お風呂にする  
?……ご飯にする?……そ、れ、と、も」

俺はボタンと勢いよくドアを閉めた

いやいやいや、何ですいちちゃんが俺の家??

紅蘭 「俺は疲れてるんだな……うんうん……気のせい気のせい……」

俺はそう唱えてゆっくりドアを開けた

星街 「……もう……言いきる前に閉めるなんて紅蘭君は悪い人だね」

うん、気のせいではありませんでした

そこにいたのは新衣装のすいちちゃんだった

紅蘭 「な、何でいるの?!?!」

星街 「いちやわるいの?」

紅蘭 「いや悪く……ないけど……」

星街 「それより……ほら寒いでしょう?」

俺はすいちちゃんに手を引かれ家へと上がった

星街 「いや〜…サプライズ大成功ってね!!」

紅蘭 「度がすぎてるよ…」

星街 「あー……でも皆からチョコ貰ってるの見てたらイライラしてたのは事実だから」

紅蘭 「ご、ごめんなさい。。。」

断れない性格でありまして。。。。

星街 「ま、すいちゃんのは本命だから……受け取ってくれるよね？」

紅蘭 「勿論!!…俺はすいちゃんから貰うのをずっと待ってたから!!」

星街 「ふーん………こんなことされてフワフワしてたのにな？」

見せられたのはぼたんさんにキスをされてるところだった

紅蘭 「あ、あれは……突然でして……」

星街 「その割には反応がね〜」

まさか見られていたなんて。。。

星街 「すいちゃんにもしてくれたら……許してあげるよ??」

……え？

あれをすいちゃんど……？

星街 「ちよつと……黙られると嫌だと思われるじゃん」

紅蘭 「そそ、そんな事ない!!……むしろいいの??」

星街 「…一緒に色々したのにそれくらい構わないけどな〜」

紅蘭 「た、確かに。。。」



星街 「じゃあ……すいちゃんのチョコは別で食べてほしいから……ホロメンのを……つと……」

すいちゃんは適当にチョコを取り口に含む

ん？

すいちゃんが取ったチョコって確か………

こより 「こよからは媚薬入りチョコ！」

紅蘭 「すいちゃん……ちよつと待つ……んう……」

すいちゃんは待たず俺の唇に重ねてきた

すいちゃんの舌と触れ、絡めてきた

星街 「プハッ……知ってるよ……そのチョコは……こよりの……で  
しよ?」

紅蘭 「何で……知ってるの……?」

星街 「さあ、何ででしょうね?」

すいちゃんはニヤニヤしながら媚薬入りチョコを食べた

星街 「まああとはさ………身体のおもう通りに委ねよ?」

星街 「もう……紅蘭君……盛りすぎ」

紅蘭 「……そ、それはすいちちゃんが……」

星街 「可愛いからでしょ？」

紅蘭 「……はあ……敵わないや。。。」

もう媚薬入りチョコなんてごめんだ。。。

紅蘭 「それよりどうやって家に??」

星街 「そりゃ合鍵作ったから」

紅蘭 「うん、せめてそれは言ってほしかった」

オフ会に参加…だと…!?

ぺこら 「あ、いた紅蘭ぺこ！」

紅蘭 「おやぺこらさん、突然どうしたんですか？」

どうやら俺を探していたようだ

ぺこら 「今から暇ぺこか？……暇ぺこね!!」

俺が答える前に何故か暇だと決められた

まあこの後予定はないし。。。

紅蘭 「わかりましたから一体何用で？」

ぺこら 「オフ会ぺこ！」

紅蘭 「オフ会？」

そんなところにお邪魔してよいのだろうか

ぺこら 「もつと紅蘭と仲良くなりたいたいから……だめ……ぺこ  
……」

何だこの子は?!?!?

突然可愛く見える!!

可愛いけど!!

紅蘭 「んんっ……わかりました……参加しますよ」

ペこら 「もう皆待ってるから早速行くぺこ!!」

俺はペこらさんに手を掴まれ引かれていった

ペこら 「皆、紅蘭を連れてきたぺこー!」

ペこらさんに連れられ着いた家は………

マリン 「紅蘭君待ってました」

フレア 「お疲れ様〜」

ノエル 「本当に連れてきたんだ!」

何と集まっていたのは3期生

紅蘭 「えつとその……いいんですかね……オフ会でしょ?」

ぺこら 「そんなの気にしなくていいぺこ」

マリ  
ン 「ちなみにこの家は船長の家で……船長の部屋は見ちや  
ダメ」

フレア 「覗く気もないと思うよ」

紅蘭 「ま、まあプライバシーですし」

マリ  
ン 「そこは覗くまでが定番でしょうが?!?!」

ぺこら 「マリンうるさいぺこ」

マリ  
ン 「うう……ノエル慰めて。。。」

ノエル 「うるさいのはよくないよマリ」

マリ  
ン 「この家主に対して酷くないかな!」

紅蘭 「まあまあ……マリン落ち着いて」

激昂するマリ  
ンさんを何とか落ち着かせることにした

オフ会は気ままに話したりと時間を過ごしていた

ぺこら 「フアツフアツフアツフアツ」

フレア 「え、何かぺこらが笑い始めたんだけど」

紅蘭 「あれ、今っってお酒飲んでるっけ？」

マリン 「いやいや飲んでませんよ…ほらぺこら落ち着きな？」

ぺこら 「思いだし笑いしてたぺこ…フアツフアツフアツ  
フアツ」

ノエル 「ま、まあ…大丈夫ならいいんじゃないかな？」

逆に心配になるんだけど。。。

ピンポーン



ふとマリンスさんのインターホンが鳴る

フレア 「あれ何かきたよ?」

マリン 「船長が出前頼んだっ!……取ってくる!」

そーいや小腹空いたしな

こーいうさりげない気遣いって嬉しいな……

マリンスさんは玄関へと向かった

ノエル 「ほーらぺこらっちよ落ち着いた?」

ぺこら 「ふう……落ち着いたぺこ」

紅蘭 「それはよかったですね」

マリン 「ほらほら皆いるから!」

ん?

出前を取ったんじゃないのか?

誰かと話してるみたいな……

マリンスさんと入ってきたのは

るしあ 「み、皆…お久しぶり…なのです…」

何とるしあさんだった

ペこら 「えー!?…るーちゃん!」

フレア 「嘘!?!…マリン呼んでたの?」

マリン 「るしあも3期生の1人だからね」

ノエル 「るしあく!!」

るしあ 「皆と会えて…嬉しいので…す…」

るしあさんは俺を見つけ止まった

そ、そうだよな……

3期生に混じって俺なんかがいるのはおかしいよな。。

るしあ 「貴方が噂の紅蘭君なのですか？」

紅蘭 「は、はい……」

噂の??

マリン 「紅蘭君はホロライブにとって大事な存在なんだよ」

ぺこら 「そうぺこー……るーちゃんもいたらよかったぺこ。。。」

るしあ 「……みててわかるのです……」

るしあさんは目を瞑り何か考えて目を開けた

るしあ 「紅蘭君はるしあのことどう思っているのです？」

紅蘭 「るしあさんの事……ですか？」

るしあさんの質問に3期生の皆さんは黙っている

るしあさんの事……

紅蘭 「一緒に仕事をしてみたい……ですね……」

るしあ 「……!」

紅蘭 「るしあさんの事、知ってみたいなど……そんなところで  
すかね……」

るしあ 「そ、そうなのですか……」

フレア 「やっぱり紅蘭……は……その……いい人！」

ノエル 「うんうん！」

マリン 「フレアって紅蘭君の事呼び捨てなの!？」

フレア 「い、今は関係ないじゃん!!」

ぺこら 「ほらほらるーちゃんをはじめましてだから紅蘭の隣に  
座るぺこ」

るしあ 「え?……ちよつとぺこら引つ張らないで……!」

るしあさんはぺこらさんに無理矢理俺の隣に座らされた

その際少し体制が崩れてるため支えてあげた

紅蘭 「え、えつと……大丈夫るしあさん？」

るしあ 「は、はい……大丈夫なの……です……」

るしあさんの頬が少し赤く染まっていた

マリン 「ちよちよ!……恋におちた顔してるんですけど!？」

るしあ 「し、してない!!」

ノエル 「さつきより赤くなってるね」

ぺこら 「説得力ないぺこ」

フレア 「…………る、るしあもかあ…………」

るしあ 「もう!…今日会っただけでるしあはそんな簡単におち  
ないのですから!!」

紅蘭 「何で俺に向かって言うの??」

口説いたつもりないんだけど。。。

マリン 「船長にも口説いてくだたーい」

るしあ 「今はるしあが独り占めしてるのでマリンは邪魔なので  
す」

フレア 「…………むう…………」

ノエル 「フレア…もしかして…………」

ぺこら 「まだまだオフ会楽しむぺこー!!」

勿論、るしあさんと連絡先は交換した

るしあ 「私がいる頃にいたらなあ……………」

## 謎のお届けもの

p r r r r r

俺の作業部屋の内線が鳴る

普段鳴らないから少し疑問に思いながら受話器を取った

紅蘭 『もしもし…紅蘭です……』

Aちゃん 『あ、もしもし…私だけだよ』

紅蘭 『新手の私私詐欺ですか?』

Aちゃん 『…ん?』

おっと調子に乗ってしまった

紅蘭 『す、すみません……えつとどうされました?』

Aちゃん 『何か紅蘭が受け取りの荷物届いたんだけどさ』

紅蘭 『俺宛のですか??』

俺は見に覚えがなく疑問に思った

最近何かをネットで買ったわけでもないし

紅蘭 『見に覚えがないんですが……俺宛なんですか？』

Aちゃん 『久崎紅蘭って描いてあるね……とりあえず取りに来てね』

A先輩はそう告げ電話を切った

紅蘭 「一体何が届いたんだ……？」

とりあえずあつちの事務所に行ってみよう

紅蘭 「失礼しまーす」

俺は主にホロメンが出入りする事務所へと入った

今はA先輩しかいないようだ

Aちゃん 「あ、きたきた……ほらこの荷物……」

紅蘭 「……これですか……確かに俺宛ですね……」



おつかしいな……

最近何も頼んでないのに

さては誰かのイタズラか？

だとしたらピンククコヨーテくらいだな↑

紅蘭 「……ここで開けていいですか？」

Aちゃん 「構わないよ……私も気になるし……」

よし……

重さは………ん？……重いぞ？

とりあえずテープをとって開けてみるか

そしてそこにあったのは

紅蘭 「……………右腕？」

え？

ちよつと待つて

何か右腕が届いてるんですけど

Aちゃん 「紅蘭……………誰か殺つた…？」

紅蘭 「ちちち、違います!!!」

A先輩もう入力して後は掛ける状態にしてるし!?

俺の思考がパニックってる時にドアが開いた

終わった……

俺の人生ここで終わりなんだ……………

ロボ子 「あ、僕の右腕届いてたんだ〜」

紅蘭 「……………え？」

「A先輩と俺は呑気に右腕を拾い装着しているロボ子さんを見つめる

紅蘭 「こ、これ…………ロボ子さんの右腕…………だったのですか？」

ロボ子 「そうだよ…………たまたま紅蘭の部屋に行ったら注文できたからしちやつたんだ〜」

紅蘭 「…………よ、よかったあ…………」

ロボ子 「…………？…………あ、それより紅蘭に用事あるんだけどさ〜」

紅蘭 「それより済みますんですか？……………はあ……………なんですか？」

ロボ子 「何か凄いため息つかれたような」

紅蘭 「こっちは危うく捕まるところでしたよ……………ねえ……………A先輩？」

Aちゃん 「ロボ子さん……………くれぐれも人のパソコンで発注しな

いようにお問い合わせしますね?」

ロボ子 「は、はい……」

この様子なら反省してるみたいだしよしとするか……

疑ってすまないなピンクココヨーテ。。

そして事務所に戻ってロボ子さんの話を聞く

紅蘭 「ゲームの世界を体験できる?」

ロボ子 「うん、先行体験できるんだけど一緒にどうかと思って  
ね」

ふむ

ロボ子さんとはあまり関わりがなかったしロボ子さんを知るには  
いいタイミング

よし、受けてみよう

紅蘭 「折角だし受けますよ、それにしてもゲームの世界を体験

ですか」

ロボ子 「僕も驚きだよ」

そうして今回のお話は終わり

ロボ子 「先行体験の準備できたよ」

呼ばれた部屋には大きいタイムカプセルみたいなのが2つ置いてあつた

紅蘭 「……VRとは別……なんですね……」

ロボ子 「うん、どうやらこの機械に入るみたい」

紅蘭 「ちなみに説明は受けました？」

ロボ子 「そこは勿論……僕は高性能ロボットだからね！」

こう高らかに宣言してるのって危うい気が。

でもここで高性能じゃないやろ!! ってツツコミいれても意味ない

よなあ

ロボ子 「何か疑ってる…？」

紅蘭 「と、とんでもない！」

ロボ子さんはジト目で俺を見ている

ロボ子 「じゃあ…ほら入って入って」

紅蘭 「俺からなんですか!？」

俺の抵抗は虚しく無理矢理機械に入れられた

あ、意外と寝心地いい

紅蘭 「…一体どんな世界なんですか？」

ロボ子 「それはお楽しみだよ」

ロボ子さんは手を振りながら機械を閉じた

ゲームの世界か…。

どんな世界かなあ…。

俺はそうして意識が薄れてるのを感じていった

ロボ子 「……これでよかったかな？」

？ 「……ありがとうございます！」

ロボ子 「……ゲームの世界とは伝えてるけど……あまり変なこ  
としないでね？」

？ 「は、はい……」

そうしてロボ子さんは出ていった

？ 「待っててね……紅蘭さん……」

「……はど……?」

「……? sideer」

ロボ子 「紅蘭を眠らせて自分のにしたい?」

? 「はい……そのただ眠らせるのではなく……こう夢みたいな感じを植え付けたいのですが……」

ロボ子 「うーん……あるにはあるけど……」

? 「ほんとですか!」

流石ロボ子先輩!!

相談してよかった!!

ロボ子 「僕は責任とらないからね?」

? 「大丈夫です!」

やっと紅蘭さんを私の側に……!」



――紅蘭 s i d e e r――

徐々に意識が戻ってきてうつすらと目を開ける

紅蘭 「……………どこかの…部屋……………」

俺はゲームの世界に入れたのだろうか

よくみたら服装が変わっている

見知らない部屋を俺は見渡す

紅蘭 「……………俺の部屋なのか？……………いやそれにしても…女性って  
感じの部屋だな……………」

「そう思うと物色をするのはよくないよな

紅蘭 「一体どんな世界なんだろうな……早くロボ子さんと合流しないと！」

俺は不思議とワクワクしている

そうしてると部屋のドアが開いた

……！……この世界で初めて会う人……！

そこにいたのは……

ルイ 「あ、やっと起きた……今夜はぐっすり眠れたみたいね」

そこにいたのはエプロン姿の鷹嶺さんだった

紅蘭 「……え??…鷹嶺……さん？」

「ここはゲームの世界なんだよね？」

な、なんでここに……？

ルイ 「……寝惚けてるの？……全く紅蘭は……朝御飯できてるから顔洗ってきなよ？」

鷹嶺さんは俺にそう言い部屋を出ていった

紅蘭 「ど、どういうことだ……？」

実は現実なのか？

いやそんなことは……

とにかくロボ子さんに連絡を……！

紅蘭 「……携帯がない……」

だとしたらやはりゲームの世界？

紅蘭 「……とりあえず降りてみるか……」

ルイ 「やっと降りてきた……ほら食べるわよ？」

紅蘭 「は、はい……」

鷹嶺さんに促され席に座る

ルイ 「…紅蘭…起きてからおかしいけど…何かあった？」

紅蘭 「…え？……あ……その…俺と……鷹嶺さんの…関係つて……」

ルイ 「鷹嶺つて……もう私は久崎よ？」

………え？

とどのつまり……結婚してるってこと?!?!?

咄嗟に手をみたらお互い指輪をしている

しかもぴったりだ

紅蘭 「……その…鷹嶺さん…」

ルイ 「…ルイでしょ？」

紅蘭 「えつと………ルイ………その………この世界つて……」

ルイ 「…世界？………まあ確かに穏やかではないけど………私は紅蘭といれば幸せよ？」

紅蘭 「そ、そう……か……」

この違和感はなんだ？？

ロボ子さんとは会える気がしない

そうだ………外に出たらわかるかもしれない！

紅蘭 「な、なあ………今日この後出掛けたりしないか？」

ルイ 「この後？………うーん………ちよつと無理ね………勿論紅蘭もよ」

………確定だ

この世界は現実だ

鷹嶺さんは動揺してないように話しているが少し目が泳いでいる

それにデジタル時計

あの時間から数時間しか経っていない事がわかる

後は……どう助けを呼ぶか

ルイ 「ちよつと聞いている紅蘭？」

紅蘭 「あ、ああ……ちよつと電話を借りていいか？」

ルイ 「電話？……何よそれ？」

紅蘭 「……鷹嶺さん……今なら許す……正直に話してくれないか？」

俺の問いに鷹嶺さんは俯いた

ルイ 「……すみません……」

どうやら折れてくれた

紅蘭 「…何でこんなことを？」

ルイ 「…：紅蘭さんと一緒にいたいと思つて…」

紅蘭 「…それならそうと言つてくれれば時間は作ります…：…それより俺の携帯は…：…」

今の現状を知っているのは恐らく俺、鷹嶺さん、ロボ子さんだ  
すいちゃんに知られたらお互いの身が危うい

鷹嶺 「…待つてくださいいね…：…確か…：…」

ピンポーン

不意にインターホンが鳴る

何故かそれが不気味に感じた

ルイ 「…：出た方が…：いい…：ですかね…：？」

ピンポーン、ピンポーン

何度も何度もインターホンを押す

まるでいるのが分かっているかのように

ピンポーン、ピンポーン、ピンポーン

紅蘭 「……帰ったか？」

突然鳴りやんだ

ルイ 「そう……みたいです……一体誰が……」

紅蘭 「……そこは気にしないようにしよう……」

危機が去ったと思ったその瞬間



ドゴン

と、ドアが無理矢理開けられた音がした

コツツコツツと足音が近づく

入ってきたのは……………

そら 「…やっぱりいたのね…久崎君」

紅蘭 「……………え？」

どうしてそちらさんがここに……？

## 魔法少女の相談所

そら 「2度とこんなことしないように……ね？」

ルイ 「は、はい……………」

あれからそらさんは鷹嶺さんに説教

ちなみに俺は席を外された

紅蘭 「あの……………どうしてそらさんはここに？」

そら 「ロボ子ちゃんがソワソワしてたからね……………問い詰めたら教えてくれたよ」

紅蘭 「と、問い詰めたんですか……………」

これ以上は聞かないことにしよう

そら 「とりあえず…無事でよかったですよ……………」

紅蘭 「心配かけてすみません……………」

まさかそらさんが助けてくれるなんて……

もし…俺があのまま気付かずにいたらどうなっていたのか……

そら 「…もう終わったことだからそんなに考え込まなくていいよ？」

紅蘭 「…あの……鷹嶺さんは俺に対して好意を抱いていたのでしようか……」

そら 「うーん…なかったらあんな事しないと思うよ？」

紅蘭 「…そう…ですよね……」

そら 「じゃあ私はもう行くね！」

紅蘭 「は、はい…本当にありがとうございます……」

そら 「これから気を付けるんだよ！」

そらさんは手を振りながら帰っていった

紅蘭 「……俺も帰るとする……か……」

早く帰って今日の事は忘れないと……

シオン 「あれ…紅蘭じゃん」

紅蘭 「シオンさん……」

シオン 「あれ、何か元気ないね……どしたの？」

紅蘭 「あ、いやその……」

こういう時は話した方がいいのだろうか

シオン 「…その様子じゃ訳ありだよね……ま、気が向いたら教えてよ」

シオンさんは箒から降りて隣を歩く

紅蘭 「あれ…シオンさんは帰る途中じゃ……」

シオン 「その状態の紅蘭をほっとくほどシオンは性格悪くないから」

前を向きながらそう言われた

迷惑をかけてしまった……………

シオン 「……………言ってみ？」

紅蘭 「…え？」

シオン 「そうやって誰にも言わずにしていると色んな人に心配されるよ？」

色んな人に……………

現にシオンさんは心配で俺という

紅蘭 「…わかりました……………先程……………」

俺は今日あった事をシオンさんに伝えた

シオン 「…うーん…何か悩むことあるの？」

紅蘭 「そ、その……今後鷹嶺さんとどう接すればいいとか……」

シオン 「そんなの普段通りいいじゃん……今のシオンみたいに  
さ」

紅蘭 「普段通り……に……」

シオン 「……そ……むしろ距離とられた方が悲しむと思うよ？」

紅蘭 「それは……嫌ですね……」

シオン 「でしょ？……だから紅蘭は気にする事なくいつも通りに  
すればいいよ」

紅蘭 「……はい……何かスッキリしました」

シオン 「そっか……力になれてよかったよ」

紅蘭 「助かりました……今度何かお礼を……」

シオン 「……うーん……あ、そうだ……今は無理だけど今度でい  
いかな？」

紅蘭 「……今度……ですか？」

まあ変なことじゃないと思うし大丈夫だろう

………フラグたったような……

シオン 「ついでに今から送ってあげるよ……ほら乗って乗って」

フワリと箒に乗り宙に浮かぶ

紅蘭 「……乗ってみたかったんですよ！」

シオン 「そんなに？…乗ったね……じゃ……いくよー!!」

一気に上昇し街を見渡した

こんなに気持ちのいい気分になるのは久しぶりだろう

紅蘭 「……シオンさん」

シオン 「……ん？」

操作に意識してるのか声だけで反応をする

紅蘭 「……ありがとうございます」

シオン 「フフツ……また何かあったら頼ってね？」

紅蘭 「……はい！」



紅蘭 「そういえば今度って何するんですか？」

シオン 「……んー……害にならないこと？」

紅蘭 「……嫌な予感しかない……。」

理性に打ち勝て!!

フブキ 「く・ら・ん・く・んー!!!」

紅蘭 「へ?……フブキ!？」

フブキは俺を見つめるなり抱き締めて押し倒してきた

フブキ 「えへへ…紅蘭君」

離したくないのか足まで絡めてきた

ミオ 「コラ!、フブキ……って………」

ミオは今の状況を見て固まってしまった

紅蘭 「ミオ……助けて……」

フブキ 「むっ……今は白上タイムですから!」

何や白上タイムで。。

それよりミオなら何とか……………

ミオ 「う、ウチも…混ざる!!」

フブキ 「うーん……………なら白上は右腕で我慢します……………」

紅蘭 「い、いや……………俺の意見は……………」

フブキ、ミオ 「「ない!!」」

何でこうなるんだ……………

白上 s i d e

――数時間前――

ホロメンの事務所には4人の屍が転がっていた

フブキ 「…はあ……」

ミオ 「フブキ…ため息ついてるよ………はあ……」

おかゆ 「ミオちゃんもしてるよ………はあ……」

ころね 「おがゆも…あ、こおねも……はあ……」

フブキ 「…皆してるじゃないですか………もしや考えてること……」

全員 「紅蘭／＼君に会いたい。。。」

ここ最近時間が合わないのか推しの紅蘭君に会えない

ミオ 「最近忙しいって言ってたもんね」

おかゆ 「いつそのこと突撃しちゃう?」

フブキ 「それはいい提案!!」

ころね 「流石おがゆ!!」

ミオ 「ちよちよっ……それは紅蘭君に迷惑なんじゃ………」

フブキ 「ふーん…それならミオはここで待ってればいいよ」

白上は紅蘭君に甘えたい!!

ミオ 「あー……こらフブキ!!」

おかゆ 「どうするころさん?」

ころね 「こおね達も向かおつか」

ころね 「つていうことなんだよね」

紅蘭 「いやだからって……」

うう……ころねさんが後ろから抱き付くから胸が……

おかゆ 「紅蘭君、ハーレムだね」

おかゆさんは俺の膝上に座ってもたれてる

フブキ 「みーんな、紅蘭君のこと好きですもんね〜」

ミオ 「そ、そ、そうなの!?!」

紅蘭 「何でミオが驚いてるんだ?」

おかゆ 「対して紅蘭君は驚いてないね」

紅蘭 「この状況だからもう間に合ってます」

こんな状況、すいちゃんに見られたら終わりだぞ。。。

かといってこのままもまずい。。。

何か打開策を。。。

フブキ 「紅蘭君……………アムツ」

紅蘭 「フブキ!?!?!」

フブキは俺の指を甘噛みしはじめた

フブキ 「えへへ……………くあんくんのゆり…」

舐めたり噛んだりして刺激が強すぎる。。。

ミオ 「うう……な、ならウチは！」

紅蘭 「ひゃう!?……ちよつ……ミオ……」

ミオさんは耳を舐め始めた

だめだ。。

だんだん思考が。。。

ころね 「紅蘭……抵抗しなくなったね〜」

ころねさんはさらに強く抱き付き胸を押し付けてきた

ころね 「こおねの心臓の音……聞こえてる?」

おかゆ 「紅蘭君はもう僕達のだね〜」

紅蘭 「おかゆさん……んう……」

おかゆさんは俺にキスをしてきた

甘い甘いキス。。。

舌まで侵入してきて絡み取られた

おかゆ 「フフツ……僕とあつーい……キス……しちやつたね  
？」

俺とおかゆさんの間に銀の糸が垂れる

ああ……

もうどうにでもなれ……

すいちゃんに合わせる顔が……

フブキ 「これからですよ……紅蘭……く……ん……  
……Z  
Z  
Z  
……」



ミオ 「ウチもみて…ね…あ…れ…？」

ころね 「次はこお…ね…と…」

おかゆ 「…まだ僕と…したい…よ…ね…」

紅蘭 「…え？」

突然フブキ達は寝てしまった

一体何が…？

と、とにかくこの場から離れないと!!

俺は何とかその場から逃げることができた

しかし何で突然寝てしまったんだ？

こより 「……女性に効く睡眠ガス効いたみたいだね」

いろは 「いや〜…流石でござる」

こより 「こよはずのーだからね!!」

どうやら暗躍したのはずのーのようだ

エイプリルフル、そうだ嘘ついてみよう!!

ふむ、

今日はエイプリルフル

つまり嘘をついていい日だな!!

と、まあ考えたが一向にいい案が浮かばない

「……うーん……何か何か……」

俺は思考を巡らせある答えとたどり着く

そうだ、すいちちゃんに嘘をついてみよう○

「今日はお互い休みでよかったね」

「だな…こういう日はあまりないからしつかり活用しないとね」

すいちゃんは俺の家でのんびりとしている

「あ、今度さみこちと配信するんだけどさでる？」

「うーん…2人だからこそ見応えあるから俺は観戦するよ」

星街 「えく…紅蘭君に出て貰いたかったなあ」

すいちゃんは頬を軽く膨らませてもたれてきた

うん、可愛い

今日もすいちゃんは可愛いぞ

だが心苦しいが早速かましてみるか!!

すぐにテツテレーとドツキリでした!と言えばいいはずさ!!

さあ、いざいかん!!!

「ねえねえすいちゃん少しいかな?」

「んー?」

「その…言いにくいんだけど…」

「勿体ぶらないで言つてよ」

「えっと…わ、別れない?」

よし、後は反応をみてドツキリと言うだけ

「…うん、いいよ」

「…………え?」

「え？、だって別れたいんでしょ？」

「あ、いや……これは……」

「色んなホロメンと関係持つてるんでしょ？……いや……すいちゃんがにいるのにね」

「ま、まって……すいちゃ」

い、いやだ!!

すいちゃんと別れるなんて……！

「言い出したのはそっちでしょ？」

「き、聞いてくれすいちゃん……」

「同じ気持ちだったならいいじゃん、じゃあすいちゃん帰るからね？」

すいちゃんはすぐに荷物を持ち玄関へと歩き始めた

止めないと……！

「待ってくれすいちゃん！」

俺はすいちゃんの腕を握り足を止めた

「離してよ……この浮気野郎」

すいちゃんは低い声で俺に言い放った

俺は……浮気野郎……なのか……？

すいちゃんからしたらそう……だよな……

ははっ……自業自得だ……

「バイバイ……もう二度とすいちゃんと関わらないで」

そう言い出ていった

体に大きな穴が空いたみたいな感覚だ

もう俺は……立ち直れない……

すいちゃんは俺のせいで苦しんでたんだ

オレノセイデ



「テツテレー!!…紅蘭君、ドツキリでしたー!!」

「……………ふえ？」

突然ドアを開け帰って来たすいちゃん

俺は突然の事で思考が追い付かない

「だーかーら、ドツキリだよ?…すいちゃんが紅蘭君と別れるなんてことないよ?」

「ほ、ほんと…………?」

「紅蘭君の事だからかましてくるなと思ったから仕返したの!」

「え、あ……………」

「お、おーい?…紅蘭君?」

「よ、よかったああ…」

「あーでも…………」

浮気はよくないよね？

「…ハ、ハイ……………」

しばらく尋問は続くみたいだ、…

酸っぱいのはいかが？

カタカタカタカタ

タンツ

カタカタカタカタ

タンツ

俺の作業部屋は静寂でパソコンの入力音が響く

うん、今日は静かで平和だな

「とか思ってたら誰か来たりしてな」

そう、これぞフラグなのだ!!!

「……誰も来なかった」

何というか、

寂しい気がするな……

ま、まあそんな日もあるよね!!

「……ぼちぼち帰るか」

俺は帰り支度をし作業部屋を出た

「事務所内でも……外でも会わなかった……」

今日はホロメンが事務所に来ていないという訳ではない  
少なからずレッスンや打ち合わせで来ている

「まあ……帰るか……」

俺は帰路へと歩きだした

誰かが自分の前にいたので咄嗟に避けそのまま歩いた

……何かサングラスかけて踊ってたような……

俺は一瞬の出来事に戸惑いを感じたが振り返らず歩く

再度サングラスをかけた人が俺の前に現れた

「……………わためさん？」

「やっと気付いてくれた！」

「いやまあ…最初やべえ人いるなど思いましたが」

「わためは悪くないよねえ？」

「まあ別に迷惑じゃないですし悪くないですよ」

「そこは悪いと言うところ!!」

……………??

「それよりわためさんが良かったらどこか寄りませんか？」

俺の質問にわためさんはニヤツとして

「い〜い〜!!」

そして訪れたのは定食屋

「俺は唐揚げ定食かなあ」

「わためも同じの！」

「ん、了解……じゃあ頼むとするか」

そうだ、今日あったこと話してみるか

「わためさん、今日ってホロメンの方いました？」

「ん？……いたよ……でも何か皆急いでてすぐ帰ったりしてたよ  
なるほど、そういうことだったのか

「わためはたまたま紅蘭を見掛けたからちよつかいだしただけ」

「ちなみに急いでたとは何用で？」

「うーん……わためはただのんびりしてたから聞いてない！」

うん、わためさんらしい

たまにホロメンの事務所寄るけど高確率でソフアーでのんびりしてるの見かけるし

そうして楽しく談笑していたら商品が届いた

「おー！……旨そうな唐揚げ！……あ、紅蘭って何かかける？」

「そうですね…無難にレモンですかね」

ブシヤツ

俺は備えてあったカットレモンを手に取りろうとしたら何故かわためさんは丸々レモンを潰して俺の唐揚げにかけていた

「……………えつとわためさん？」

「レモンかけといた！」

「……………はい？」



「レモンかけといたよ!」

「いやその……普通このカットされたレモンじゃ、」

「わためは悪くないよねえ?」

あ、これをやりたかったのか

「よし、じゃあほらあーん」

俺はレモンをたつくさんかかった唐揚げを差し出した

「えええ?!?!?…そ、それ物凄い酸っぱそう。。。」

「食べてく、れ、る、よ、ね?」

「ゆ、許しよ。。。」

これなら俺も……悪くないよねえ？

「それわための決め台詞!!」

おぶればいいじゃん

「お疲れ様です」

俺はA先輩に資料を届けるためホロメンの事務所に赴いた

そしてそこにいたのは

「紅蘭君……お疲れ様……」

物凄いテンション低いメルさんがいた

「お、お疲れ様です……メルさん……そのいつもより元気ないですね？」

「うん……昨日の配信で血が大量に出て来て……」

あ、メルさんは確か血が苦手なんだっけ？

吸血鬼なのに

そもそも何故そのようなゲームをしたのだろうか、

「A先輩、頼まれた資料持ってきましたよ」

「うん、ありがとね」

メルさんが気になるが今はこっちが優先

A先輩は資料を受け取りメルさんに指差し

「紅蘭、頼める?」

「えっと頼めるとは?」

「メルちゃんを家まで送る」

「……………俺じゃないとだめですか?」

「私忙しくてね、他のホロメンもこの後はいないし」

家に送るだけ、

そう、やましい事などないのだ!!

その前にすいちちゃんに一本連絡はいれておこう

「メルさん家まで送りますので帰りますよ?」

俺は横たわってるメルさんに近づき声をかけた

が、返事が返ってこなかった

「A先輩、メルさん寝ちゃってます」

「ん?...ほんとだ困ったね」

起きるまで待とうかな、

「おぶってやりなよ」

「...はい?」

「いやだからメルちゃんをおんぶしてあげて送ればいいでしょ?」

「起きるまで待つという選択肢は」

「そういえば今日メルちゃん配信予定だなー」

尚更寝ちゃあかんでしょ!!

「はあ、わかりましたおんぶして帰ります……住所はわかっています？」

「お、さっすが頼りになる紅蘭……住所は送つといたから頼むね」

「そう言いA先輩は資料を渡しに出ていった」

「……………おんぶするかあ、」

「……………」

俺はメルさんをおんぶし歩き始める

「背中に柔らかい……………ええい、気にするな！」

「それより、」

「普段も可愛いけど……………寝顔も可愛いな……………」

こんなこと聞かれたらヤバイけど寝てるならいいよね

おっと、お尻ではなく太もも付近にしないとな

変態とか言われたら終わりだし、

「あのマンションか」

やっと目的地であるメルさんの家へと着いた

後は起こすだけだね

「おーいメルさん、家に着きましたよ」

「……んう……」

メルさんは目を擦りながらうつつすらと目を開けた

寝起き不機嫌じゃなくてよかった、

「あ、あれ…メル寝ちやつてた？」

「はい、それでメルさん配信があると聞いたので仕方なくここまで来ました」

「ご、ごめんね紅蘭君!!」

脳の思考が追いついたのか突然謝ってきた

「謝らなくていいですよ…：…疲れてたのならちゃんと休憩して…配信も程々にですよ？」

「う、うん…：…」

「じゃあ俺は帰りますので…：…また何かありましたら頼ってくださいね？」

「わ、わかった！…：…ありがとね紅蘭君！」

「はい、配信頑張ってくださいね」

そうして俺は帰路へと向かった



あー、何とか送り届けられてよかった

送り届けてもらったメルはと、

「紅蘭君に可愛いって言われちゃった」

頬を少し赤らめて心臓の鼓動は少し早い

「今日の配信頑張っちゃお！」

なーんだまたこのパターンか

「お、き、る、ペ、ー、ー!!!」

「おぐっ?!?!?!?  
!?!?!?」

誰かが寝ている俺に乗ってきた

その衝撃で俺は目を覚ます

「ファッフアッフアッフアッフアツ…紅蘭起きたペコー?」

「起きたもなにも…こんな起こしかたしないで下さいよ、それより退いてください」

俺は未だ俺の上を馬乗りしているペコーさんに言った

てか、何でペコーさんいるの?!?!?

そのペコーさんは困惑な表情をしていた

「ど、どうしました？」

「こ、こつちが聞きたいペこー！」

どういうことだ？

「コラー……ペこら、紅蘭に迷惑でしょー！」

料理のおたまを持ってペこらさんに叱って入ってきたのは

「ミオ……？？」

エプロン姿のミオだった

エプロン姿似合ってるなあ、

俺が惚けていると

「え？……ミオ……？？」

「今母さん呼び捨てしてたペこー」

………はい？

ミオがお母さん??

俺の……………??

「と、とりあえずご飯できてるから2人は早く降りてくるように！」

ミオはそそくさに部屋を出ていった

「わかったぺこく……………紅蘭頭おかしくなったぺこく？」

「い、いや…至って平常……………」

とにかく今は情報収集を……………！

俺は部屋を出て驚いた

見たことのない廊下だ

今思えば部屋も俺ではなかった

「いったい何が起きてるんだ？」

「あ、おはよう紅蘭…ぺこらちゃんに酷い起こされ方したらしいね？」

廊下に出て声をかけてきたのはそらさんだった

「お、おはようございます……」

「……？……どこが悪いの紅蘭？」

そらさんは俺にでこを合わせてきた

な、何か距離感近いですよそらさん!?!?

「熱は無さそうだね……でもおかしいなあ……いつもはそら姉さんって呼んでくれるのに」

「……え？」

……そら姉さん……？

さつきはミオがお母さんだったよな、

ぺこらさんもそうなる家族……？

わかったぞ……！

これは前回同様、ゲームの世界だと言って俺を騙してるんだな！

ふっふっふっ

なら引っ掛かったフリをしてやろう！

「まあそこは後で話そつか……それより毎日のあれ頼める？」

「……毎日……？」

「それも忘れたの？……あくあちゃんを起こすのは紅蘭の担当でしよっ。」

「……あくあちゃん？」

「……？……そうだよ、あくあちゃんは私達の妹だよ？」

「どうやらまだ家族はいるようだ」

そうしてあくあさんがいる部屋前へと着いた

「じゃ、私はお母さんの手伝いしてくるから」

また後でねとそらさんは頭を撫でてから離れていった

もう少し撫でて……………つてそれより!!

「……………お、おーい…あくあ……………起きてるか?」

今の状況に合わすなら呼び捨てで呼ぶしかない

「……………」

返事がないな……

もしやあくあさんはこの世界?でもあまり話さない感じか?

「入るからな？」

俺はゆっくりとドアを開け部屋に入った

「……………」

ベッドに横たわってるのは間違いなくあくあさんだった

さてどうやって起こそうか

無難に優しく声をかけたり揺さぶってみるか

「あくあ…もうじき朝ごはんできるから…起きるよ？」

「…朝…ごはん…？」

「うん、そうだよ…おはようあくあ」

何だろうか

無性に頭を撫でてあげたくなってきた

「…おはよう…紅蘭お兄…チャン…」

うぐっ

何だこの破壊力は  
!?!?!?



お、落ち着け……………とにかく落ち着かないと…………

「おはよう……………」一緒に行く?」

俺の問いにあくあさんはゆつくりと頷きそらさんが待つところへと向かった

「お、おまたせ……………あくあ連れてきたよ」

「ありがとね紅蘭……………あ、ぺこら先に食べようとしなない!!」

「だ、だっってお腹空いたぺこ……………」

「駄目だよぺこらちゃん?……………もし食べたらわかるよね……………?」

「は、はい……………」

そらさんの圧は健在のようだ

そしてテーブルを囲うように座った

俺の隣はあくあさん

正面はそらさんでその横にぺこらさん

ミオは俺の斜め前に座った

「それじゃあ……」

「「いただきます!!」」

ご飯を食べながら勿論先程の質問をされた

「何で紅蘭はお母さんの事呼び捨てだったぺこ?」

「ウチもそれ気になる……ちよつと新鮮で嬉しかったけど」

「駄目だよお母さん……紅蘭に恋心いだいちや？」

「冗談だよ冗談」

あくあさんはえ？つという感じに俺を見つめている

「あ、あれは……寝ぼけてたんだと思い………思う」

「寝ぼけてて呼び捨てはアホらしいペこ」

「ペこらちゃん？」

「す、すみません。。。」

そのやり取りを見てたあくあさんは

「紅蘭お兄ちゃ……さんも……寝ぼけたりするんだね……」

何で今言いかけたんだ？

「ま、まあね……だから変なこと言つてごめんねお母さん」

「いいのいいの……ほらあんた達学校あるんだから食べ終わったら支度しなよ……片付けはウチがやっておくから」

……………学校?!

「私はもうそこに置いてあるから手伝うよお母さん」

「ありがとうねそら」

「忘れてたぺこー! ……あくあ姉ちゃんも早く早く!」

「ウ、ウン……」

「お、俺も準備しないと…」

とはいっても何を準備するんだ?

何やかんやあつて玄関に俺達は並ぶ↑おい

ちなみに荷物は机の上にまとまっていた

「それじゃあ行くっか……行つてきますお母さん」

「間に合うぺこね……あくあ姉ちゃん忘れ物ないぺこか？」

「ウ、ウン……」

「い、いってきます」

「気をつけて行ってらっしゃいね」

ミオは優しく微笑んで手を振っていた

そして俺はドアを開けた

その瞬間白い輝きに包まれた

「……………んん……………」

俺はうつすらと目を開けた

「あ、おはよう紅蘭君……………ぐ、ごめんね…勝手に膝枕しちゃってた」

目の前にミオの顔があった

どうやら膝枕をしてくれてたようだ

「ありがとう……………母さん……………」

「…か、母さん?!?!」

そのあとしばらくミオに色々と問い詰められました

シヨタしか勝たん!!

「くあく……疲れた……」

今日は朝からパソコン業務

目や肩に多少疲れがきている

「……………少し休むか……」

そういや栄養ドリンク置いてあるよな

俺は前に購入したのを思いだし冷蔵庫を開け栄養ドリンクを取り出した

そのドリンクはある人によって中身を変えられた事も知らずに

―Aちゃんside―

「おかしいな……紅蘭いると思ったけど……いたのは紅蘭に似ている……子供……」

「……?……僕の事??」

「……まさかね……」

そこにいたのはどこか紅蘭の面影を感じる子供  
紅蘭本人は見当たらない

が、恐らく紅蘭なのだろう

現に子供の服はダボダボだ

「また薬でも飲まされたのかな」

そう、秘密結社h o o xに所属する博士こと博衣ごより

前々からやたら薬を飲まされてるのは聞いている

「お疲れ様です……紅蘭君ついていますか………つて、こ、こ  
んなところにシヨタ?!?」

「ちよつとノエルさん、大声出したらだめですよ」



「はっ……す、すみません……興奮しちゃって……」

「お姉ちゃん誰?？」

「グへへ……ノエルお姉ちゃんだよー」

もういいや、ここは任せてしまうか

「ノエルさん、面倒みてもらっていいですか?」

「はい!……団長に任せてください!」

そうして私は作業へと戻った

紅蘭……

お前の事は忘れないからな……

「紅蘭side」

僕は今ノエルお姉ちゃんという人のお家にお邪魔しています

「紅蘭君はここで待っていてね…ちよっとお部屋の掃除してくれるから」

「うん、わかった!」

ちなみに服は買ってくれたんだ

何でさっきのはダボダボだったんだろ？

「お待たせ紅蘭君!…しっかり待ってたんだね!…えらいえらい!」

ノエルお姉ちゃんは抱き締めたり頭を撫でたりしてくれた

「く、苦しいよノエルお姉ちゃん」

「ごめんごめん…可愛くてついつい」

「僕、男なのに可愛いのか?」

「シヨタは皆可愛いんだよ」

シヨタつてなんだろ、？

気になるけど今はいいかな

「ねえノエルお姉ちゃん……僕のパパとママは？」

「うーんとね……団長が代わりに面倒をみることになったんだよ」

「団長……？……それってノエルお姉ちゃんのこと??」

ノエルお姉ちゃんはそうだよと頷いた

じゃあ僕はパパとママに捨てられたの？

どうして、

パパとママに会いたいよ。。。

「大丈夫だよ紅蘭君……団長がこれからたつくさん楽しい思い出作ってあげるから」

「ほ、本当に??」

「うん、本当だよ、約束する」

「じゃあ指切りしよー!」

「指切りげんまん嘘ついたらハ針千本のーます!……指切った!」

その後は美味しいご飯を食べたり一緒にゲームをしたりした

お風呂もノエルお姉ちゃんに入った

ノエルお姉ちゃんの胸がその、大きくて驚いた、

「さてと…髪の毛も乾かしたし…寝よつか!」

「うん!…ノエルお姉ちゃんと寝るの?」

「そうだよ…あ、嫌だった?」

「ううん…ノエルお姉ちゃんと寝たい!」

「うぐっ…シヨタは強い…」

「…シヨタ??」

「き、気にしないでいいよ!…じゃあ団長と寝よつか!」

「うん!」

ノエルお姉ちゃんといるととても楽しかった

これからもこんなに楽しい事たくさんあるんだ!!

「おやすみ紅蘭君」

「おやすみノエルお姉ちゃん」

そうして僕は眠りについた

「…………んあ…………あれ俺、いつの間に寝て……………え??」

目覚めると俺は全裸だ

いや、服が破れてる?  
しかも子供用??

「…………くら…ん…………くん…………zzz」

「……………」

俺は寝起きの脳をフル稼働して状況を処理している

俺は全裸

隣にはノエルさん

何なんだこの状況は?!?!?

と、とにかく脱出せねば!!

「…………全裸で外に出たら完全に捕まる。。」

どうする……

ノエルさんが起きるまで待つか？

それもそれで何か嫌な予感するな、

「…………ノエルさんの服を借りるか…………」

今度詳しい事を聞くとしよう、

俺は人生初となる女性の服を着ることになった

俺はノエルさんの家を出て現在地を把握する

「後はバレずに帰るのみだな、」

「あれ、ノエル先輩かと思ったら紅蘭じゃん」

「……おわた、」

そこにいたのはポルカさんだった

## お着替えタイム

「ふーん……起きたらノエル先輩の家に行ったんだ、しかも全裸で」

「本当なんですよ!」

たまたま居合わせてしまったポルカさんにドン引きされている

その反応が普通だよな、

「何か覚えてたりしないの?、例えば気絶させられたとかさ」

「そうですね……強いて言うなら栄養ドリンクですかね」

「いやもうそれしかないじゃん」

まさか、

いやいやあの栄養ドリンクは自分で購入したのだし、

誰かが俺のいない隙に中身を入れ替えた??

「てか、それより流石にそのままの服装だと不審者扱いされるし……ポルカに任せな!」



「な、何か考えがあるのですか？」

「何って……ポルカのサーカス団の誰かに借りれば何とかなるでしょう？」

「頼りになるっす…ポルカ先輩!!」

「先輩言うな!!」

そうしてポルカさんと一緒に目的地に向かってる最中ふと思ったから聞いてみた

「そーいや何でポルカさんはあそこに？」

「ラミイの家にて5期生集まってたんだよ」

「ラミイさんの家で5期生集合か……」

「5期生………はっ!!」

ふと少し前にぼたんさんにあんなことされたのを思い出した

「あー………紅蘭……この事はポルカしか知らないから」

「へ？………あ、ありがとうございます………」

「それともすいちゃんに伝えた方が」

「それは止めて……………って何ですいちゃん??」

「だって紅蘭とすいちゃん付き合ってるでしょ」

「なっ……………なななななな?!?!?」

「動揺しすぎでしょ……………てか知られてないと思ってた?」

お、落ち着け。

ク、クールに徹すれば何とか。

「おーい紅蘭ー?」

「へへ、変な冗談はや、やめろよな」

「キャラおかしくなってるぞ……………すいちゃんが言ってたから嘘じゃないでしょ」

何で言うてんねんすいちゃん

俺の居場所無くなってまう

「ち、ちなみに…他に聞いてたのは……………」

「うーんと…しらけんメンバーだね」

ピンポイントにノエルさんいるじゃないですか

「そーういやフレアも付き合ってるでしょとか言ってたな。。。」

「まあそんな気にすることないかな…前々からそんな感じしてたし」

「嘘。。。」

「あ、いや紅蘭じゃなくすいちやんだね…紅蘭の話題出すとどこで何をしたの？、変なことしてない？、紅蘭君の事どう思ってるの？って物凄く質問された」

「あ、あはは……」

「ポルカはまだ死にたくないからそこで付き合ってるのか聞いたら頷いた」

「死にたくないって…そんな大袈裟な…」

「斧持って質問責められたら誰だってそうなると思う」

「……………え、斧??」

「だから今回の事はバレないように頼むな」

「いやその……斧……?」

「気にするなってほら着いたぞ」

斧が気になる。。。

まあ俺も斧を首もとに置かれたことあったな

ちよつと待っててとポルカさんは中に入っていった

頼りになるよなポルカさんは

今度何かお礼しないと、

「おまたせく…何とか確保したから着替えてきなよ」

「ありがとうございます!!」

ポルカさんとこの座員さんは好人ばつかやなあ。。

俺は渡された服を持ち着替えにいった

「……………まじ?」

「お、似合ってるんじゃない紅蘭」

「恥ずかしすぎるわ!!」

何と渡されたのはメイド服だった

「スカート似合ってるぞ」

「そ、そう?……………ってなるわけないわ!!」

「まあまあ落ち着けて紅蘭……………考えてみて」

「…何を?」

「すいちゃんとお揃い」

「なるほど……………ってなるわけないわ!!」

「もうそれしかないからバイバイ」

「そんな!?!…待ってポルカさん!!」

閉じられ営業終了しましたと看板がでてきた

「いやでもすいちちゃんとお揃いって何か嬉しいな」

案外チヨロい紅蘭であった

L e t , s t r a i n i n g

「何ぞやこれは」

「何って私のツインテールだよ？」

ツインテールだよ??

「……俺いつからもぎ取ったんですか?!?!」

「違う違う…紅蘭君につけただけだよ」

「……何ですかそのついたり外したりできるの可能なツインテールは」

「え? ツインテールってそういうものでしょ?」

……ええ??

俺の価値観がおかしいのか?

いやいやツインテールって普通浮いてないよな……??

だよな……??

あくあさんも確かツインテールで取れたりしな………  
してるか……

確かおかゆさんに渡してたような気もする……

ならばツインテールは着脱可能なのか!!

「そ、そういうものだよね」

「なんか凄い熟考してたけど大丈夫??」

「気にしないでいいですよって……いつの間にそっちに戻ったのですね」

「少し前にだよ?」

……意思持つてるのかな……あのツインテールは………

「ところで紅蘭君は最近鍛えてる?」

「いや特には……剣の腕を上げるくらい……ですかね……」

「うん、それは鍛えてるって事だね」

「そうですね?」

「よし、さらに筋肉をつけよう!!」

めっちゃ笑顔で力こぶ作っておりますやん

そういやアキロゼさんって某ゲームでムキロゼとか言われてたよ  
うな言われてないような



「さあさあ…ジムにいくよー」

まるで子供を拾い上げるように俺を担いだ

「えっ…えっ？」

あまりの事に俺は困惑していた

俺担がれてる???

そんなこんなで着きましたトレーニングジム

「あ、あの…まじ??」

「ほーらちやちやつと着替えてトレーニングするよー!」

アキロゼさんは俺の言葉に耳を傾けることなく脱衣所に入って  
いった

「……………仕方ない……………とりあえず着替えるか……………」

俺は渋々トレーニングウェアに着替えトレーニングルームへと赴いた

「あ、きたきた!」

「お待ちせしましたって……もう始めてるのですか?」

「ほら紅蘭君もトレーニングして筋肉つけよう!!」

「もう言い方がジムトレーナーだよ……」

「え?…ポケモン持ってないよ?」

「……いやそつちじゃない!!」

「たまに天然出してくる。。。」

「そう?…それよりほら紅蘭君はまずダンベルをやろう!!」

「そうしてアキロゼさんの指導のもと俺のトレーニングは始まった

「ラスト1回!!」

「そ……れ……何回……め……だあ!!!」

「10回目だね!!」

「数え……てる……のか……よおおお!!」

俺は勢いをつけて器具を上げきった

ちなみにやってたのベンチプレス

他にも色んなトレーニングをやらされた

「さすが紅蘭君……はい、これプロテインだよ」

「はあはあ……もう限界……あり……がと……」

俺はプロテインを受け取った

受け取るまではいいんだよ??

「……………量おおない??」

無意識に受け取ったが何と2Lのペットボトルだった

「一気に飲まないと筋肉つかないからね!!」

アキロゼさんは平然とグビグビ飲んでいた

……………やるしかないか!!!

「うっぷ……………」

「もうあれくらい飲めないといけないよ?」

「いや……………なんでもない……………」

「帰ったらしつかりストレッチしてね！…じゃないと筋肉痛で動けないから!!」

いやこれもう帰ったらばたんきゅーだよ。。。

――翌日――

「おーい紅蘭君??」

「あ、すいちゃん……」

「何か産まれた小鹿みたいに痙攣してるね」

「筋肉痛でプルプルしてんだよお。。。」

「ふーん……」

すいちゃんはニヤリと笑みを浮かべていた

「す、すい……ちゃん??」

「えいっ」

すいちゃんは指先で俺の太ももを押した

「やめてすいちゃん?!?!?!」

俺は意図も簡単に倒れた

「………うう………もうトレーニングしたくない……」

おや?? 喧嘩ですか??

「兄ちゃんよお?……謝ることできないかな??」

「……俺はただ待ち合わせをしているだけです……それにぶつかつたのはそついででしょ??」

「痛みで教えないといけないなあ!!!」

今時こんな輩がいるのか……  
仕方ない対処するしか……

「あ、紅蘭くん!!」

男達はピタツと動きを止めた

それより待ち合わせの人が来たみたいだ

「かなたさん数分遅刻ですよ」

「ごめんごめん……渋滞で……」

そう待ち合わせしてたのはかなたさんだ

にしてもこいつら何で動きを止めたんだ?

「紅蘭君、何か揉め事？」

「かなたさんを待ってたら後ろからぶつかって何か殴られそうになったんですよ」

「へえく……僕の紅蘭君に傷をつけようと??」

「誤解されるから僕のとかわないの」

全く油断するとすぐこうなるから。。。

「それよりこの人達……どこかで見たことあるような……」

「き、気のせいですよ!!…な、なあ??」

「そうそう…いやあ兄ちゃんすまん!!…俺たちが悪かつて」

「あ、ココの組の人か！」

……………ココ??

ココってあの会長さん??

それに言われてみれば服装なんかヤクザっぽい

「か、会長にだけは言わずに……」



「ココならもう後ろにいるよ?」

男達は首をギギギツとゆっくり後ろを向いた

「よおかなたそ……それとお前ら……私の連れに手を出そうとして……覚悟あるんだろうなあ!?!?」

「やっちやえココ」

「やっちやえくくじや、ありません!!……もう大丈夫ですから!?!?」

「ん?……かなたその彼氏か?」

「うん、僕の最愛の紅蘭君」

「だからサラツとやばいこと言わないの!?!?」

「よくわからんなあ……ま、それよりいつもの持ってこい!!」

ココさんの合図で何かを準備し始める手下達

「何が始まるんだ?」

「うーん……わからないね……」

「会長……準備できました……こちらです……」

ココさんに渡してきたものとは………

「どこでもエ○コセットくら!!」

……………え??

「ちよいちよい?!?!?…何物騒なもん出してるの?!?!?」

「こつちの世界じや責任の取り方がこうだからな!!」

「責任取らなくていいですから!!」

「ココ……紅蘭君がここまで言ってるから許してあげよ?」

「うーん……仕方ない…お前ら先に戻ってていいぞ!」

「ハッ!!」

すげえ。。

ものの数秒で消え去った。。

「いやあ…見苦しいもん見せちまっでごめんな……えつと……」

「ホロライブのスタッフをやってます……久崎紅蘭です…ココさんとは初めまして……ですね…」

「おう!!…噂で聞いてたけどいい面してる!!…かなたそが惚れるのもわかるなあ!」

「ちよつとココ?!?!?」

かなたさんはアタフタして驚いていた

「あ、そうだ……この後ココも一緒に行こうよ!!」

「うーん……邪魔にならない?」

「ならないならない!!……ね、紅蘭君??」

「なりませんよ……むしろいてくれた方が助かりますね……」

「紅蘭君??」

ジトーつと俺を見ているが無視をするでしょう

「それじゃ着いてく!」

そうして俺達は歩き始めた

「そういえばかなたさん……この後は?」

「お楽しみだよ」

「何かかなたその機嫌がいいな……良いことあったか?」

「ココに会えたから!」

「かなたそく!!」

ココさんはかなたさんに抱き付きスリスリしている

やはりこの二人はとても仲が良いとわかる

それよりどこに向かっているんだ??

「皆々…紅蘭君と…ココ連れてきたよ!!」

そうして連れてこられた場所は…

「紅蘭君やつほく…つてココ?!?!」

「紅蘭待ってたのらしく…ココちやなのらしく」

「角巻じゃんけん…ココち?!?!」

なるほど4期生で集まっていたのか

あれ、前に似たような事あったな……

「トワにルーナ、そしてわためえ……久し振りだな!!」

4人は抱き合って再開を楽しんでいた

「……なあかなたさん」

「どうしたの紅蘭君??」

「何ていうか……今日は4期生が集まったのなら……俺いらないうな……」

「必要だよ紅蘭君は」

「でも今日はあまり会えないココさんがいますよ?」

「確かにココとはあまり会えないね……でもそれとこれは別……いいね?」

「……わかりましたよ……楽しみましょう」

「いやあ〜…久々に会えて楽しかった!!……まさかトワが紅蘭に惚れてるとはなあ〜」

「ちよつと言わないでよ!?!?」

「…愛されてるね紅蘭君」

「何て返せばいいのやら……」

「付き合えばいいのら〜」

「トワと紅蘭君、お似合いだと思う!!」

背中を押してくれる

それは純粹に嬉しい……

けど、俺にはすいちゃんがいるし……

「もう、紅蘭君を困らせないの!!……トワは紅蘭君に会えたりできればいいだけだから!!」

「トワさん……」

「…ま、トワと紅蘭の事は私らが口挟むことはない……それより紅蘭……困ったら私に連絡しな……いつでも力になる!!」

「お、頼りになるねココ!!」

「ありがとうございます!!」

「おう!!……じゃあ皆で最後締めよう!!」

おつココでしたー  
!!!!

## エリートorポンコツエリート

今日も今日とて平和な日

俺はのんびりと事務作業に取り組んでいた

ドドドドドドドドドドドド

取り消そう

平和じゃなかった

まるで工事現場の騒音かのような音が近づいてくる

一体だれが……

「やっと出番だにえ!!!」

「ドアを開けるときはノックしてください」

「あ、そうだった……ちよい待ってて」

訪問者は扉を閉めノックをした

「どうぞ」

「やっと出番だにえ!!」



「…どういうことですか？」

「とぼけても無駄だにえ!!…みんな紅蘭と遊んだりしてるのにみこに出番回ってこなかったにえ!!……きつとこれは筆者のせいだにえ!!」

「…メタいこと言わないでください」

興奮気味にそして珍しく噛まずに言いきったのはさくらみこさんだ

「紅蘭…聞こえてるにえ」

「おっと……つい本音が……」

「本音?!?!」

この人はオーバーリアクションするなあ

「とりあえず落ち着くためにお茶でも飲みます?」

「おう……冷たいので頼むにえ」

俺はコップにお茶を入れながら雑談を始めた

「それにしてもあんな物凄い音出されると驚きますよ」

「ふっふっふっ……そこに気付くとはやはり紅蘭はエリートだにえ!!」

やけにエリートつてところが発音よかったような。

「それはどうも……にしても確かにみこさんとはこうやって話す機会ってのは少なかったですね」

「絶対筆者のせいだにえ!!……おらあ!!出てこいやあ!!!」

「いやだから出てこないって」

呼んだ?!

「いやあんたも乗るんじゃない」

乗るもんだと思った

「こうなりや教えるんだにえ!!……何故……何故みこが出てくるのが遅いのと紅蘭とイチヤイチヤできるのが最後だと言うことをにえ!!」

「後半の質問はガン無視でお願いします」

そりや、みこめつとで締めたかったわけよ

「にえ??」

「これまたメタいことを。。。」

いいですか?

この作品は個人のスタートはすいちゃんからです

「言われてみれば確かに……」

「そして最後はみこで締めると!!」

そういうこと

最後の人は決まっていたのだ!!  
ではおさらば!!!

「…何だったんだあいつ。。。」

「そっか…：みこはホロメンの最後の砦…：とてつもない信頼がないと務まらないにえ!!」

何言ってるんだみこさんは…：

「ふっふっふっ…：このエリートみこが力を貸してあげるんだにえ!!」

もうどうでもいいんだが。。。

「確かにみこは信頼を得られる人だにえ!!…：何たって…：東京観光大使なんだからにえ!!」

「まあそれは凄いですよね…：選ばれたとき驚きました」

「でしょでしょ?!?!?…：ほらもつと褒めて褒めて〜」

「褒めますが…：みこさん1人じゃないでしょ?」

「それは関係ないでしょーが!?!?」

何かみこさんといると楽しいなあ

「コホンツ……気を取り直して……じゃあ紅蘭……みこと何をしたいんだにえ?」

「じゃあつて何ですか……全く……」

何を……か……

「ま、まあ……紅蘭がどうしてもみことあんなことやこんなことをしたいとか言うなら……そ、その……許すにえ?」

「エロゲー脳を突然発動すな……東京観光大使という肩書きが台無しになるぞ」

「はっ!!……そ、それはだめにえ!!」

「頼みますよポンコツエリート先輩」

「任せなさい!!……って何でポンコツなんだにえ!?!?」

「あはは……つい言いたくなってしまった」

「冗談でもよくないにえ!!」

「さっきのは悪かったです……じゃあこれだけは言いますね」

「これだけはちゃんと伝えないと……」

「これからも迷惑かけたりすると思いますがスタッフとしてよろしくお願いします」

「み、みこも…紅蘭は頼りになるから…よ、よろしくお願いします……」

「ふふっ……にえが抜けましたね」

「う、うるさい!!!」

これからもホロメンの皆とこういう楽しい日々を迎えられるように頑張らないとな

なっ、筆者!!!

わがはい？ワガハイ？吾輩!!

久しぶりだな皆、紅蘭だ

出社の道中珍しい？事があったから教えるぜ

俺がいつも通り歩いていたらこんな声が聞こえた

「吾輩は吾輩のだ！」

「いーや吾輩のは吾輩なのだぞ!!」

何か吾輩吾輩聞こえますけど

まあ片方は恐らくやまだだろう

「誰がやまだじゃコノヤロー!!」

「地獄耳ですか??」

「あれ君、この子のお兄ちゃん的な？」

んー??

この人どっかで見たこと……うーん……

俺はもう1人の吾輩連呼してた人を見て頭を捻る

「紅蘭は吾輩の執事だ！」

「うん、あんたには聞いてないんだよね」

「うつつつぎ」

「まあまあ落ち着けてやま………ラプラスさん」

「いつ……」

とりあえずラプラスさんを落ち着かせることにしてと……

「自己紹介まだでしたね……俺はホロライブで皆のサポートをします  
ます久崎紅蘭です」

「丁寧な紹介だな！……吾輩は魔乃アロエだ！……元々ホロライブ  
のメンバーだったぞ！」

そうだ……この人は5期生の1人、魔乃アロエさんか！

「あー……だから吾輩って言うのやめろー！」

「吾輩が先に使ってたし!!」

吾輩がどちらのかというのだけで言い合いしてる。。

「あの一……もういいですか?」

「だめ!!!」

えー………

こういう場合は他の人を呼べばいいのか?

うーん……折角アロエさんと会えたし話してみたいからラプラス  
さんを帰らすか？

……誰かお迎えを頼むか

俺はここで思考が止まってしまった

こよりさんは薬の件で関わるのを避けている  
クロエさんは何故か避けられている  
ルイさんは会わないようにしようと言われた  
いろはは会うたびに挑んでくる

……詰みだ……

「吾輩は吾輩!!」

「いや吾輩!!」

その間は子供の喧嘩のように2人は言い合っていた

……こつちも終わる気配ないよなあ……

とりあえずいろはを呼んでみるか  
そうと決まれば電話掛けてみるか

p r

『蘭殿から電話とは何用でござるか?』

……いやいやp rで出る人いるのか?

鳴り始めに出たの初めてよ

『あれ?……もしもーし……蘭殿聞こえてるー?』



『すまんすまん…電話に出るのが早すぎて驚いてたわ』

『暇してたでござる〜』

暇してたらそんなに早いのか……

『それで何かあったのでござるか?』

『えつとな…ラプラスさんのお迎えを頼みたいんだけど…』

『えー…いやでござる』

まさかの拒否られました

『はあ……なら手合わせ少ししてやるから』

『それならお迎えに行くでござる!』

素晴らしい電話を切った

いやいや場所すら伝えてねーぞ

まあトークアプリで位置情報送っとくか

「吾輩とか言ってるけどちっこくて威厳ないぞ?」

「はー??…ちっこいとか関係ないし??こちとら総帥だし??」

「総帥とか関係ないぞ?」

ばっちばちに言い合ってます

早く…早くいろはきてくれええ…

「蘭殿！…ラプ殿のお迎えに来たでござる！！」  
助け船きたー！！

「あつれー？…お迎えってお子様？」

「ちよつ用心棒！！…吾輩そんなの頼んでない！！」

「はいはい…蘭殿に頼まれたから行くでござるよー」

そっくり軽々とラプラスさんを担ぐいろは

「では蘭殿……後日よろしくでござる」

「ああ…気を付けてな」

いろはを見送り…アロエさんと俺だけになった

「…えつと…吾輩に何か用事的な？」

「そうですね…今からお時間あります？」

「ま、まあ…あるにはあるぞ？」

「そうですね……ではこのまま少し話しましょう」

さてどこまで持ちこたえられるか。

「紅蘭は忙しいんだな」

しばらく色々話していたら俺への警戒心は無くなり打ち解けてくれた

「まあおかげで楽しいですよ？」

「楽しい……か……」

やべっ、地雷踏んだかも……

そ、そろそろ時間だな

「アロエさん……ちよつと席外しますね」

「え？……お、おう……」

突然のことにアロエさんは戸惑っていたが頷いてくれた

さてと……俺の出番はここまで……

俺は離れたところでさつきいたところを見つめる

そこに来たのは……

「魔乃ちゃん!？」

「魔乃ちゃんだー!!」

「魔乃ちゃん……」

「まのあろがいる!!」

「え……みんな……？」

そう俺は密かに5期生の方をここに呼び出したのだ  
勿論、アロエさんの事は伝えていない

「皆……どうしてここに……」

「あー……さては紅蘭だな」

「紅蘭君……全くまのちゃんいるなら言えばいいのに……」

「ま、そんな所が紅蘭だよな」

「それなー!!」

「え、えつと……吾輩とはあまり関わらない方が……」

「そんなこと言わない!!」

「ラミィ……」

「そうそう!!……折角会えたし……楽しも!!」

「ねね……」

「ここは紅蘭に感謝つてところだな」

「ししろん……」

「まのあろ泣きそうじゃん!」

「う、うるさいポルカ!!」

…俺の策は成功したようだ  
よかったよかった…

またアロエさんと会えたら話しても聞こうかな

「どこまで連れてくんだ用心棒!!」

「あれどこまでだっけ??」

「ポンコツすぎる!!!」

## 噂の同居人

「ほらほら紅蘭君…上がって上がって!!」

「ほ、本当にいいのか?」

「もう…遠慮せずに!!…さあさあ白上の家に上がって!」

「わかったよ……」

俺は渋々フブキの家に上がった

遡ること数時間前

本日の業務を終え帰りの準備をしているとフブキが現れた

「こんこんきーつね!…紅蘭君、今からお帰りですか?」

「ん、フブキ…お疲れ様…そうだね、今から帰るところ」

「じゃあ家まで白上が送ります!」

「いやそこは俺が送る方では……」

「ほらほら帰りますよ」

俺はフブキに背中を押されながら事務所を出た

「それにしても俺と帰りたいなんて何か企んでるか？」

「紅蘭君の中の白上はそんなにやばいんですか!？」

「やばいというか……まあほらこの前めちやめちや抱きついてたし」

「お、思い出させないでください!!……は、恥ずかしい……」

フブキは顔を両手で隠し耳がペタンと倒れているからかいすぎたかな……?」

そうして色々と話していたら俺の家へと着いた

「やっぱりフブキの家まで送るよ」

「大丈夫ですよー……白上の事は気にせずに!!」

うーん……ここまで言われたら……

ん??

「あ、あれ……おっかしいな……」

俺は鞆の中で鍵を探している

が、見当たらない

「……?……紅蘭君……何かありました?」

異変に気づいたのかフブキは心配そうに俺に聞いてきた

「家の鍵が見当たらなくて……落としたか?……うーん……」  
いつもいれてあるところがない……

出した記憶もないし……

「そ、それは大変じゃないですか!!……このまま野宿になっちゃいますよ!!」

「いやいや野宿にはならないよ……お金はある……ああれ?」

お、おかしい!!

財布までも見当たらない!!

「……か、顔が真っ青ですよ紅蘭君……?」

「は、はは……ハハハ……!!」

「く、紅蘭君!?!?」

「……落ち着きましたか紅蘭君?」

「ごめん……冷静が欠けてしまった」

「欠けたというか……無くなってましたよ」



「……ご、ごめん……まさか鍵と財布……同時に無くすなんて……」

「まあ誰でもそんなこと起きたら現実逃避したくなりますよね」

「……だよなあ……はあ……一旦事務所に戻ろうかな……」

「いや……いい案があります!」

「……いい案?」

「はい!!……白上の家に泊まるのです!!」

「………はい?」

そうしてフブキの家にお邪魔することになったのだ

「じゃじゃーん!!……ここが白上の配信部屋であります!!」

今は突然始まったフブキの家紹介ツアーの真っ最中

「機材が色々あるな……お、このチェアはいいやつだし……流石フブキだな」

「えへへ……紅蘭君に褒められた……」

照れやがって可愛いやつめ↑

「おい……ちやちやちやうるせーぞ」

……ん？

今フブキとは違う声がしたな

俺は声がした方を向いた

「……あ？……男??…何だフブキ……彼氏でも連れてきたのか？」

「く、黒ちゃんいつからそこに?!?!」

「この家の紹介ツアーからだ」

「大分始めからいるね!?!」

あ、黒上フブキか！

やっぱりフブキとは正反対なんだなあ

何て言うかフブキとは違うから魅力的だなく

「おいお前」

「は、はい…」

「……そいつより私の方がいいぞ?」

「ちよつ…黒ちゃん?!?!」

ゆ、誘惑されています!!

だがしかーし!!

俺にはすいちゃんという彼女がい r

「お前がしたいことなーんでも許すぜ？」

な、なんでも?!

え、なんでもって……ナンデモ??

た、タトエバ

「す、ストップー!!!」

「ちっ……何だよフブキ」

「今舌打ちしたよね!?!……ね!?!」

「うるせーな……」

「紅蘭君は白上が誘ったから黒ちゃんはあっちにいつて!!……しっしっ!!」

「はいはい……またな紅蘭……何かあれば私に言えよ?」

「え?……あ、はい……」

黒上さんはしてやったりとどや顔でどこかの部屋へと入った

「むう……黒ちゃんは躊躇無く言える……羨ましい……」

何かフブキはブツブツ言ってるし

「……えっと……それで俺は今日お泊まりなのか?」

「うん！…白上は添い寝を所望します！」

「助けて黒さーん!!!!」

「く、紅蘭君?!?!」

一方紅蘭宅には

「…」また”…紅蘭君が帰ってこない…」

合鍵を使って紅蘭を待ってるすいちゃんがいるのであった

## 鍵と財布は何処へ

鍵と財布を無くし

そしてフブキの家にお邪魔した翌日

すいちゃんはお怒りのようです

だってハイライトオフで斧を構えているのだ。。

今思えばすいちゃんを待てばよかったと思う。。

過去に戻れるなら戻りたい。。

「それで……鍵と財布は見つかったの？」

「え、えつと……鞆の中には見当たらないです。。」

「そっか……それでフブちゃんのところにお邪魔したと？」

「成り行きといえますか……その…結構強引でありまして……」

「ちなみにフブちゃんが持つてるとか考えてなかった？」

……え？

「紅蘭君を自宅にお邪魔させるために紅蘭君の鞆から鍵と財布を抜き取ったとかさ」

「そ、そんなことフブキがするはずない……た、多分事務所の机の中とかにあるはず……」

「……随分信頼してるね？」

「……今までのフブキを見ての判断しただけで……」

まさかフブキがわざわざそんなことをするのか？  
心配してたしなと思うが。

「それでどうするの？……鍵はいいとして財布はヤバイんじゃないの？」

「財布はカード類が心配だ……え？」

「紅蘭君……これなーんだ？」

ドンと机に置かれたのは見覚えのある財布

「あ、こ、これ……俺の……？」

「そう、紅蘭君の財布だよ？……それに鍵もある」

「ど、どうしてすいちゃんが持つてるの？」

さつきはフブキが持つてると言ってきたけど……すいちゃんが持つてる……

「どうしてなのか……考えればわかるよ？」

「考えれば……？」

な、何を言ってるんだすいちゃん……

「それと紅蘭君はもつと危機管理をつけなくちゃね？」

「もしかしてすいちちゃんが言ってた……フブキが……」

「うん、フブちゃんが持ってたんだよ……まあ紅蘭君から連絡あった時にすぐ確認したんだよね」

「え、えっと……もしかしてフブキと戦ったとか？」

「そんな物騒なことしないよ？……ちよーつとテトリスでボコボコにしたただけだよ！」

「そ、そっか……」

でもそんなボコボコにする時間あったか？

いやあまり模索はしない方がいいか

今度フブキに詳しく話を聞くとしよう……

「あーあ……すいちちゃん昨日は一人で寂しかったなあ」

「へ、へえ」

「誰か慰めてくれないかな」

チラチラツと俺を見てくる

「紅蘭君……すいちちゃんと今日は過ごしてくれる？」

「勿論だよ！……断る理由なし！」

「じゃあこの後お風呂だね！」

……お、お風呂?!?!?

「……あのー……流石にそれは……」

「拒否権ないよ?!」

「……は、はい……」

理性保てるかなあ……。

そうしてすいちゃんとお風呂入ったりご飯作ったりと常に隣にいる状態が続いた

「じゃあ最後は添い寝!」

「いつも添い寝はしてるよ?」

「味気ないこと言わないの!」

まあ添い寝くらい大したことないか

「紅蘭君……今からすいちゃんをどうしたい?」

ベッドに座り上目遣いで見つめてくる

「……ど、どうしたいって……」

「ほーら……いつも通りすいちゃんど……ね?」

「……っ……参りました……」



すいちちゃんには敵いません

「と、まあこんな感じで昨日は色々あつて疲れてるんですよ」

「うん、それ僕に話す必要あるかな?!?!」

事務所で昨日あったことを話す紅蘭と聞いてはいけないことを聞いてしまったかなたそであった

今日は晴れのち拳が降るでしょう

「何をそんなに驚いてるんですか？」

「聞いちやいけないこと聞いちやったんだよ!!」

「いやいや聞いてきたのはかなたさんじゃないですか」

「確かにそうだけどさ!!」

そう、俺は昨日すいちゃんとおんなことやらこんなことをした結果  
疲れているのだ

「まず紅蘭君とすいちゃんが付き合ってるの初耳なんだけど!!」

「あれそうでしたっけ??」

「あーあ…折角僕狙ってたのになあ」

「いやいやゴリ」

「紅蘭くーん??」

おやおや机が拳で跡形もなく粉碎されてるじゃないですか

「コホン……でもかなたさんにはココさんがいるでしょ?」

「ココは特別!!」

「それよりこの木屑となった机はかなたさんが掃除してくださいね

？」

「誰のせいになっちゃったと思ってるかな!？」

「え、俺のせいなんですか？」

「やったのは僕だけど原因は紅蘭君だからね!?!？」

解せぬ

結局かなたさんと掃除をした

「はあく…僕、紅蘭君の事結構狙ってたんだけどなあ」

「あの…俺の何処がいいのですか？」

「その前に敬語やめようよ!…距離取られてる感じがして僕は嫌  
！」

「拳で机を粉碎するような人とは距離を取るのは自然かと」

「まだそれ引っ張るかな!?!？」

「実はトラウマだったり」

「それなら僕が責任を取らないといけないね！」

………ほえっ…

「何かその顔みるととてつもなく僕はイラッとしたんだけど」

「かなたさんの」

「かなた」

かなたさんは俺の言葉を遮った

「は、はい？」

「かなたって呼んで」

「そ、それはちよつと……」

「ふーん……ミオ先輩やフブキ先輩とかには呼び捨てなのに？」

痛いところつかれたなあ……

事実ではあるし……仕方あるまい

「かなた……これでいいか？」

「うぐつ……僕には効果抜群……だ……」

……何言っただこの天使紛いは↑

「ちよつと……変なものを見たような目で僕を見るなあ!!」

「急に悶え始めたから」

「相変わらず思ったこと言ってくれるよね!!」

「いやまあ……事実だし」

「く、くそお……」

あ、そうだ…ちよつとからかってみるか

「俺がかなたと呼んでるなら……かなたも紅蘭って呼ぶよな？」

俺の言葉にかなたは固まってしまった

「ななな何でそうなるかな!？」

「なーんだ…呼べないのか」

「よ、呼べばいいんでしょ!!」

かなたは目を閉じ深呼吸を行う

こう、大人しいと可愛い妹みたいなんだよなあ……つて言ったら調子乗りそうだからやめておこう

「く……」

「……く?」

「く……む、無理!!」

「アバブツ!!!」

俺の意識は一瞬で消えた

「あ……く、紅蘭くん!?!?」

この後事務所で気絶してのびてる紅蘭とその周辺をアタフタして  
るかなたを目撃されたらしい

## 目覚めたらあるある現象

俺はうつすらと目を開け段々と視界がクリアになってきた

「……………知らない天井だ」

ここはどこだろうか

何故俺は知らない天井を見上げているのか

寝惚けていた脳が段々と理解しようと思考する

「……………確かかなたといて…」

1番最後にある記憶はかなたといた

なのに今は知らない天井

「……………あ、目覚めたんだ紅蘭」

この聞き覚えのある声は…………

俺は声がした方へと顔を向けた

「ん…記憶喪失…じゃないよな？」

「ぼたん…さん…………」

ぐくつと身体を伸ばしながら心配そうに見つめてたのはぼたんさんさ  
んだった

「お、その感じだと大丈夫な感じだな…よかったよかった」

「ちよつ…」

優しく頭を撫でられる

でもなぜかそれが心地いい

「何だろ？…照れてるのか？」

「て、照れてませんから!!」

俺は凶星をつかれたからぼたんさんの手を退けた

「……………」

「あ、ぼ、ぼたん…さん…？」

突然の沈黙に俺はどうすればいいだろうか……

「心配してたのに……………どうしてそんなことするの……………」

「あ……………、ごめん…なさい……………」

ぼたんさんは変わらず俯いたまま

ど、どうすれば……………」

この様子だと俺を運んで看病？をしてくれたのはぼたんさんだ  
それに対して俺はやめてほしいと思いき撫でられた手を退けた

最低じゃねえか……………俺……………」

沈黙が30秒くらいだろう



その30秒はとてつもなく長く感じた

「くくっ……ふふ……ふはははは!!」

「ぼ、ぼたんさん!」

ぼたんさんが突然ゲラ笑いし始めた!?

「あー……笑った笑った……紅蘭が凄いソワソワしてたからさ」

「なっ……そりや悪いことしたな……と……」

「それより何か聞きたいことあるんじゃないの?」

「……あの……俺はどうしてここに?」

「ま、それが聞きたいよね……いいよ……教えてあげる」

「――回想――」

「アバブツ!!!」

「く、紅蘭君!?!?」

「……………」

「ど、どうしよ……紅蘭君を殴り飛ばしちやった……す、すいちちゃんに  
殺される……!」

「ららーいおん…紅蘭いるか…って何ですかこの状況」

「ぼ、ぼたんちゃん！…ごめんけどこの事は皆には秘密にして欲しい…そして僕は逃げるから…さらば!!」

「いやちよつと…もういない…はあ…おーい紅蘭起きてるかー?」

「……………」

「仕方ない…家に連れてくか」

「――回想終了――」

「ま、こんな感じ」

「やはり殴られたのか…」

殴られて気を失うって…てかよく生きてたな!!

「まあ紅蘭の寝顔見れたり頬触ったり…さっきのソワソワしてるの見たから満足満足」

「むしろそれだけですんでよかったですよ……」

「このぼたん様に感謝しろよー?」

もしぼたんさんじゃなくあのピンクコヨーテだったら…うん、薬飲まされてたな

「あれ、そういえばぼたんさんは俺に用事があつたんですよね？」

「あー……あつたけどいいよ」

「いやいや……助けてもらって面倒までみてくれたので……」

「じゃ、じゃあ！……今度……一緒に買い物……とか……」

「……？……それくらい今からでも」

「この鈍感紅蘭!!……今度でいいから!!」

「な、何で怒るんですか!？」

女心というのは難しい……

「あ……そういえば時間は……」

「まだ夕方くらい……もう帰る？」

「は、はい……長居するのもだし……」

ぼたんさんはあらかじめ準備してたのか俺の荷物を置いてくれた

「あ、ありがとうございます……」

「いいっていいって……それじゃ玄関まで送るよ」

とにかく今度一緒に買い物に行かないとな……

「あ、今日は本当にお世話になりました」

「助け合いだからなく……あ、それと魔乃ちゃんの件ありがとな……  
久々に会えて嬉しかった」

「あの時は5期生の皆と会えた方がいいと思いましたから」

「さっすが紅蘭……これだから皆に好かれるんだよな」

「……え？」

「………コホンツ……ほらもう帰った帰った」

俺は外に出され扉を閉められた

「………ぼたんさんって俺のこと………」

って、今は早く帰らないと!!

送り届けたぼたんは自分のベッドに寝転んだ

「最後何かすればよかったかな………ん?………あ、紅蘭の匂いする  
………えへへ………」

海だー!!! いや目的とちやうやん

とある道場にて刀を持ち戦う者達現れる

はずだった……!!

「おいこらポンコツ侍…道案内は任せるでござる…とか言つてたぐせに何で海に着くんだよ!!」

「風真の真似しないでござる!!……蘭殿途中気付いたなら言つてほしかったでござる!!」

「今気付いたわ!!……昔会つた道場で手合わせしたいと言つて辿り着いたのが海て!!」

――数日前――

「蘭殿いるか?」

「いるぞ……ん?いろは1人か?」

「そうでござる…今日は蘭殿に頼みがあつて来たのでござる!!」

えっへんと誇らしげに胸を張る  
いや頼み事なんだから偉そうにすな

「帰り道分らないとかなら何もしないからな」

「ち、違うでござる!!」

「……本当に一人で帰れるのか？」

「……………た、多分??」

「はあ……あのアジトだろ?…送ってやる……それで頼み事は？」

「……あー……蘭殿……手合わせを申したいでござる!」

あー……ラプラスさんの時に言ってたのか

まあ俺から言ったことだし受けるとするか

「ああ……構わないぞ?……どこか広いところで……」

「折角ならあの道場でやるでござる!」

「……案外距離あるぞ?」

「何度も行ったところなら余裕でござる!……この風真に任せるで  
ござる!」

そうして辿り着いたのがこの海

……………信頼した俺が馬鹿だった!!

「蘭殿との手合わせが無くなってしまっているのでござる……………」

「今から道場に向かうのも面倒だからここでやるか?」

「い、いいのでござるか?!?!」

「その代わり…木刀な?……………真剣なんて使ったら警察沙汰になるかもしれないからな」

「ぐぬぬ…………それは仕方ないでござる……………」

「……………何でこの格好?」

「?…何かおかしなところあったでござるか?」

俺といろはは水着に着替え木刀を手に持っている

水着はお互い海の家で購入した（紅蘭の自腹）

「…いろは…………お前…………この後海を満喫するつもりだな」

「折角来たのでござるから遊ぶしかないでござる!!」

開き直るんかい

まああまり人いないし変な噂にはならないか

「よーし…準備運動終わったでござる!…蘭殿…始めてよいでござるか?」

「んー…いつでもいいぞ」

俺は木刀を構え手合わせの開始を待つ

「じゃあ…次の波がきたら開始でござる!」

「おっけー……」

そうして静寂となりカモメの声、波の音だけとなった

………きた!

1本で決めてやる!!

俺は得意の居合の構えをする

両者がすれ違い数秒後

「ぐっ……風真の負けでござる……キャツ?!?!」

「ふっ……礼をいう…俺はまだまだ強くなる……ってどうした?」

居合じゃなかったら俺の負けだったかもしれない



真剣だったら斬ってたかもしれないし木刀でよかったあ……

「てか悲鳴あげてどうした……いろ……は……」

振り向いたら顔を真っ赤にししやがんでるいろはがいた

「み、見ないでほしいでござる!!……こ、この変態エッチ蘭殿!!!」

「……………は、はあ?!?!」

俺はすぐ反対を向いた

「な、何で上の水着を脱いでんだよ!!」

「や、やっぱり見たのでござるな!!」

「目に入ったからだよ!!」

「言い訳でござる!!……これは蘭殿が水着の紐を斬ったからでござるよ!!」

「あれそうだったのか」

「と、とにかくこれじゃあ風真歩けないから他の買ってきてほしいでござる!!」

俺に女の水着を買えってか!?

ただの不審者じゃねえか!?

……………仕方ない……

「いろは………今はこれで我慢してくれ」

俺が着ていた服を被せる

「これ蘭殿の服でござるよ?」

「それ着れば買ってこれるだろ?」

「確かに名案でござる!!」

いろははせっせと服を着て水着を買いにいった

「……………いろはは俺がいても普通に着替えるのか」

まあ着替えそうになった時に見ないようにしたのは褒めてほしい

「帰ってこねえ…………」

いろはに帰ってこないから連絡したらアジトにいるでござるよ  
と呑気に返信がきたのであった

うん、もうあいつとは出掛けねえ!!!!

## 目指せ釣りマスター!!

「はあ……暇潰しに釣りでもするか」

折角海に来たのだから何かしらはやっておきたい  
しかしあのポンコツ侍は勝手に帰宅し俺を置いていったため1人  
である

なので消去法で釣りとなった

釣れたらラッキー

そんな感じでやってくか

俺は釣り道具を買い釣れそうなポイントを探し歩く

「船とかもあればいいんだけど……」

「あ、じゃあ船長の船使います?」

「お、いいですね……ありがとうございます」

………ん?

「つて……な、何でマリンさんいるんですか?!?!?」

「ちよっ……突然大声出さないで下さい!!……耳痛いでしょうが!?!」

この人ナチユラルに話してきたから気付かなかった……

「……ふう……ここには何用で？」

「え？……それ聞いちゃいます？」

「あ、何か嫌な予感するのでいいです」

「いや言わせて貰います！」

人の話を聞かんかい

「ここに来たのは勿論……ナン・パされにきたんですよ……そして来てくれたのが紅蘭君なんです！」

「いや俺声かけてませんし」

「もう照れちゃって♪……紅蘭君つてば照れ屋さんだから♪」

人の話を聞かん人ですな

はあ……暑くて疲れてるのに……またさらに疲れるよ……

「さあさあ……船長と一緒に出航しましょう!!」

「……強制？」

「勿論!!」

そうして俺はマリリンさんの船に乗り込み海へと出航した

「ちなみに今回はあくあさん乗っていないのですか？」

「そうですね〜…今回は娘を船酔いさせてしまいましたからね」

「確か前はあくあさんもいたな」

「無理矢理マリリンさんが乗せてずっと面倒みてた記憶があるな」

「それで…何処に向かっているんですか？」

「目的地なんて決めてませんよ？」

「じゃあ何で出航したんだよ!？」

「もう陸から離れてるし!？」

「まあまあ…この船長に船の事は任せておきなつて!…じゃ後は頼んだよ!」

「いやどつちだよ!?!？」

「そ・れ・な・ら・う今から船長の部屋であんなこんなことやらを!」

「あ、三十路越えはちょっと……………」

「船長のライン越えましたね!?!? ……こちとらピツピツの17歳なんだよお!?!?」

「無茶はよくないですよ?」

「煽ってんのかあ!?!?」

「これ以上はマリリンさんから何されるか怖いから下がるとしよう」

「まあ俺は適当に釣りでもしてますから……ちゃんと帰らせてくださいね?」

「マグロ釣ったら考える」

「これ漁船じゃないでしょ……」

そうして俺は釣りを始めた

「……………釣れないなあ……」

それに日差しが暑い……

てか俺は何をしているんだ??

あ、元凶はあのポンコツ侍か

今度シバいたろ

「……………ん?…お、おお!?…かかった!!」

「本当ですか?!?!」

「な、中々引きも強い!!」

「こ、これはまさかまさかの大当たり?!?!」

「一気に引き上げます!!」

釣竿を一気に引っ張り釣れたのは……

「……………あ…サメでくす」

トライデントを持ったホロライブENのGawr Guraさん  
だった

「とんでもねえの釣っちゃまった!!」

……………てかここまで泳いできた…………??

広い海を超えてきた!?

前回のおさらいだ!!

海で釣りをしたらG a w r G u r aさんを釣ったぞ!!

以上!!

「えっと…はじめまして…」

「はじめまして!…G a w r G u r aです!」

「すごー!…紅蘭君…グラ釣ったの!?!…クラだけにつてか!」

「……………」

「何かフォローしてくださいよ?」

ほんつとこの人は……

とにかくグラさんを降ろさないと

「貴方が紅蘭ですね!」

「そ、そうですね…」

目をキラキラさせながらえらく近寄ってきてな



にしてもちっちゃくて可愛いなあ

「グラは何でこんなところにいたの?…ここ日本の海よ?」

「噂の紅蘭に会うためです!」

「う、噂…?」

なーんか嫌な予感してきたぞ

「紅蘭はとつても女誑しと聞きました!」

「誰情報なんですか!」

「確かに紅蘭君は女誑しですね…この私、船長が公認します!」

「そんな公認いりませんよ!?!…それより…こんな悪知恵吹き込んだの  
マリンさんでしょ?」

「な、何のこと…ですかね」

下手な口笛吹きながら海を眺めていた

「おお!…紅蘭は読み通しです!…マリンが言っていました!」

「ちよ、グラ!」

「そつかあ…マリンさん…俺のこと女誑しって色んな人に言ってるの  
かあ…」

「言っていない言っていない!!…グラも何とか言っ…っ…っでもういない  
!」

「海に飛び込みましたね：時期に戻ってきますよ……それよりマリ  
ンさん?」

マリンさんはびくつと肩を驚かせぎこちなく振り向く

「着くまで……飯抜きですからね?」

「ゆ、許してくだたーい!!!」

そうして何とか帰ってこれた

「呼ばれてきたらどんな状況ペこよ」

「悪いのは全部マリンさんですよ」

俺は事の詳細をペこらさんに説明した

「それでマリンは飯抜きで縛られてるってわけペこね」

「縛るつもりなかったけど縛ってくださいと興奮してたから」

「紅蘭君にこの後沢山……わからされるう………：そ、そんな汚物をみ  
るような目を向けなくてくださいよ!!……興奮しちゃうじゃないで  
すか!!」

「救いようがないね」

「これは無理ペこ」

全くこの人は……

まあおかげで船旅中は楽しかったけど

「あれ…そういうえばG a w r G u r aさんがいない…」

「それならさつき泳いでいたペこよ」

…ゆっくりしてけばよかったのに…

ほんとに俺に会うためにわざわざ泳いできたのか？

「とりあえずこの人は置いていきますか」

「賛成ペこ」

「ま、待ってくださいよ紅蘭君…ペこらあ!!…放置プレイなんて…マリン…どうなっちゃうんですかあ?!?!?」

ようやく事務所に着きドアを開けると

「やっと帰ってきた…仕事…溜まってるからね?」

「は、はい……」

笑顔なのに笑ってないA先輩が待ち構えていたのである。。。